川柳塔

平成十四年 四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻八九九号

日川協加盟

No. 899

四月号

「川柳塔」900号記念川柳大会

〈臨時同人総会〉

と　き　5月4日（土）午前10時～11時
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　3F信貴の間
（近鉄上本町・地下鉄谷町六丁目下車・TEL06-6772-1441）
議　事　役員選出（総会継続審議事項）

〈記念句会〉

と　き　同　日　午前11時開場
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　4F金剛の間
開　会　午後1時　披講　午後2時
おはなし　「川柳塔900号の歴史」　川柳塔名誉主幹　橘高薫風
出句締切　正午（各題1句・欠席投句拝辞）

兼題		
「宿」	川柳塔社	奥田みつ子 選
「休み」	川柳塔社	森山盛桜 選
「囲む」	川柳塔社	高瀬霜石 選
「説得」	川柳塔社	小野克枝 選
「葉」	ふあうすと川柳社	泉　比呂史 選
「不思議」	時の川柳社	小松原爽介 選
「パンチ」	番傘川柳本社	磯野いさむ 選
「生きる」	川柳塔社	西田柳宏子 選
「九」	（事前投句）	河内天笑 選

※4月10日までに川柳塔社事務所宛

閉　会　午後4時半予定
会　費　2,000円（記念品呈）　当日いただきます
〈懇親宴〉　7,000円（会席料理）　午後5時～7時半　4階　金剛の間
〈宿　泊〉　8,000円（朝食付）　アウィーナ大阪
〈翌日見学〉　5,000円（昼食付）
高野山川柳塔碑見学・参拝（南海電鉄特急利用）午後3時帰阪予定

◎大会、懇親宴、宿泊、翌日見学の申し込み及び事前投句は、所定のハガキ（2・3月号に添付）に明記の上、**4月10日**までに川柳塔社事務所宛お願いします。
◎懇親宴、宿泊、翌日見学の費用のご送金（当日会費を除く）も同日までに添付の払込み用紙でお願いします。
◎記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

主催　川柳塔社

血液さらさら

河内天笑

平成八年三月初めに心筋梗塞で倒れ、大阪労災病院でお世話になり、運よく一命をとりとめてから丸六年になりました。その折、食道に近いところで心筋の約15パーセントが壊死しましたが周りの筋肉の助けで動いてくれています。心臓の筋肉に酸素や栄養を送る冠動脈は三本あります。もし次に他の血管が塞がる事になれば、今度こそ周りの助けを得られなくなり心臓は停止します。そうならないために、いろいろと主治医からメッセージを頂きました。

一、血管を収縮させるのでただちに禁煙
二、魚類以外の動物性脂肪は極力摂らない
三、血液を粘らせないようにたっぷりの水分
四、心臓に負担のかかる体重を減らす
五、寒暖の差に注意
六、筋力をつけて脂肪を減らす

また、栄養士さんからは

一、バランスよい食事（一日三十品目以上）
一、大豆たん白や青身魚
一、食物繊維と緑黄色野菜
一、血液さらさら食品（にんにく、納豆、海藻など）

などを摂るように教えられました。

以来、難題は多いものの、全てこれに従う生活となりました。先ず四十年来のたばこときっぱり別れました。キウイ棚の下に常設した六人掛けの炭焼きバーベキューの炉も、退院まもなくとり壊しました。幸いなことに鯖やさんまは好物でたすかりましたが、たまのすき焼も赤身ばっかりです。

好物を何もかもストップされたら、ストレスの塊みたいになりそうですので、アルコールは週に二、三回やっています。といっても、最近はコップに半分くらいで満足出来るようになりました。一番困っているのは体重です。「肥満は敵」と念頭に入れていますがなかなかの難題です。六年前の退院後、半年で四キロも減らせましたが、ちょっと油断するとリバウンドがきつく、秋から冬への三ヶ月ですぐに元に戻り、その後の約五年で三キロも増えている始末です。

平成十二年冬至の日に二本目を、そして今年二月に三本目と、私の冠動脈は三本も修復工事を受けてきました。このたびの工事は、内径四ミリの血管がS字カーブをしている所なので手間どり、二時間十分かかりました。

工事は「ステント」といって、血管の塞がりかかった部分へステンレスの網のトンネルを作るべく、中心に風船を仕込み、ステンレスの網（細く畳んだ状態のもの）を患部へセット。そこで気圧をかけて一気に風船を膨らませ、ステンレスの網状の筒を完成させる作業です。手間どったため、血管を拡げるニトロを余分に注入したせいで、血圧が下がって脳への血流が極端に弱まり、いっとき頭がぼうっとしましたが、修復工事は今回も無事終了しました。このように飛躍的に進歩した現代医学の恩恵を受けていることに、感謝する日々を過しています。

座右の句
子を持って教科書に名を書いてやる　（路　郎）
私の句
憧れた自由　港の無い船出
銭山昌枝

川柳塔　四月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　血液さらさら……河内天笑…（1）
弘前へおいで下さい……斉藤劦…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
自選集……（50）
水煙抄……板尾岳人選…（55）
■エッセー　松江城と桜……小川注湖…（81）
麻生路郎物語（4）……東野大八…（82）
愛染帖……波多野五楽庵選…（85）
誹風柳多留二四篇研究　40……（88）
茴香の花……宮西弥生選…（90）

歓迎　弘前へおいで下さい

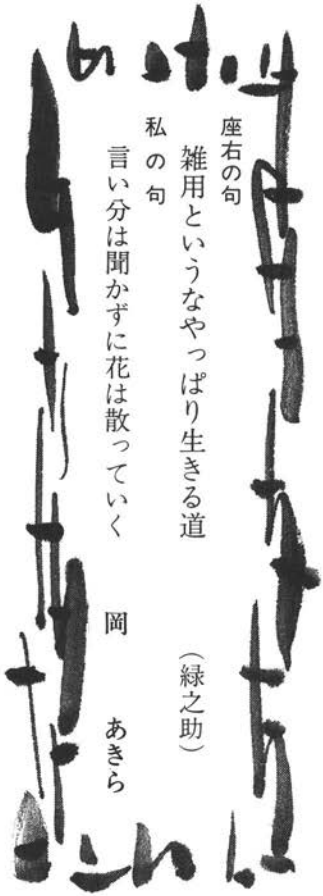
（川柳塔みちのく十五周年）

斉藤劦

小鳥達の行動に感動して散歩から帰った立春の日、川柳塔社編集部から原稿依頼の葉書が来ていた。その内容は柳論でも身辺雑記でもよいとのこと。散歩は、雪のない季節は早朝に、冬期間は十時頃から一時間位する。辺りの風景を見たり、川柳を考えたりしながらゆっくりと歩く。歩きはじめて二十分もすると血のめぐりがよくなり、頭の中がほんのりと温かくなって、ふと一句が浮かんでくることがあるから面白い。課題吟の題をあらかじめ頭に入れて散歩するのも結構楽しい。浮かんだ句はその場で野帳（市販の小さなノート）に書き留めておく。

話は、はじめに書いた小鳥達に戻って。一週間程前に散歩の途中、街角の庭木に一センチ程の長楕円形の赤い木の実がとても可愛らしくぶらぶら無数に下がっているのがふと目についた。梢には小鳥が数羽止まっていたがそれを食べようとしない。小鳥達はこの木の実はたべられないことを、あるいはまだ食べ頃でないことを知っているのだと思い、しばらくの間、観察しようと思った。そして、

「バッグ」……野坂なみ選…(92)
一路集「もう」……増田紗弓選…(92)
「目」……三好専平選…(93)
初歩教室「勝つ」……吐田公一…(94)
秀句鑑賞┌同人吟……米田恭昌…(96)
　　└水煙抄……白根ふみ…(98)
■句集紹介『花絨毯』……波多野五楽庵…(99)
噫 奥山美智子さん逝く……黒川紫香…(100)
三月本社句会……(102)
各地柳壇（佳句地十選／植田一京）……(107)
柳界展望……(123)
四月各地句会案内……(124)
■編集後記……楓楽・希久子…(126)



座右の句

雑用というなやっぱり生きる道　（緑之助）

私の句

言い分は聞かずに花は散っていく　岡　あきら

四日後、梢の小鳥は十数羽になって一斉に木の実を食べはじめた。それから三日後の立春の日には木の実は一粒も残っていなかった。小鳥達は一番美味しい食べ頃をしっていたのだ。小鳥達の生きる知恵に感動ばかりしていられないときもある。桜の花芽を食べたり、真っ赤に熟れた美味しいりんごを選んで食べたりする。こうなると鳥害である。そこで鳥害対策をするのだが完全とまではいかない。小鳥の生きる知恵には負けてしまう。

赤いりんごと言えば、丁度十年前、川柳塔あおもり五周年大会開催の際は、参加した皆さんに赤いりんごに包まれた津軽平野の旅を楽しんでもらい、それから五年後の川柳塔みちのく十周年記念句会では、盛夏、弘前のねぷたを観てもらった。そして本年、川柳塔みちのく十五周年記念句会は、七月十四日（日）受付、正午、場所、弘前プリンスホテル（弘前駅より徒歩で三分）で開催することになった。（詳細は後程御案内）七月は、麻生路郎先生ご誕生の月であり、川柳塔あおもりの結成総会（後にみちのくに改名）を開いた月でもある。また、青森は一年中で「緑」が一番深く美しい時であり、世界遺産の白神山地や十二湖を観て楽しんでもらいたいとも思う。

川柳塔みちのくの会員一同皆様のおいでを心からお待ちしています。

七月は弘前でお逢いしましょう。

川柳塔

河内天笑選

ばたばたとする間に梅が桃桜
リストラの風さむざむと作業帽
浮浪者に飼われ幸せそうな犬
自己主張過ぎると思う枇杷の種
次次と雲へタッチの観覧車
閻魔さま誰にも席を譲らない

枚方市　海老池　洋

桃活けて私に少し女足す
楽しゅうてやがてむなしい百円屋
胡蝶蘭Sの事務所に来て汚れ
何してもよしせんでよし夫の留守
えらい目にあわされたのと孫自慢
光りながら空へ蝿もわたくしも

羽曳野市　徳山　みつこ

人の手の温味が残る一夜干し
寝ころぶと土の下から春の音
じわじわと同級生が消えてゆく

米子市　政岡　日枝子

老いていくふたり繕うこともなく
ジャニーギター一瞬昔に包まれる
朝獲れの鰯をぜいたくに食べる

羽曳野市　安芸田　泰子

喜怒わかつ人なく春の炬燵守り
男の子をかしこまらせる雛の宴
日だまりを追って動いた立ち話
番犬の使命を捨てたペット犬
網の上でするめが駄々をこねている
こんにゃくに活を入れてるタカの爪

出雲市　岸　桂子

再会に安定剤を一つ飲む
感情に走れば後に戻れない
人間を人間らしくする笑顔
窓ガラス拭いて一人の雪を見る
爪そめて一日爪が気にかかる
私の骨コリコリと鳴る日暮れ

羽曳野市　三好専平

野良猫は優しい人を知っており
死んだのかと妻が顔出す長い風呂
スーパーのレジの前にも募金箱
ペイオフで慌てるほどの金はなし
わたくしの心に地雷つまってる
大臣の椅子を捨てたら良い笑顔

香川県　池内かおり

早とちりするけど銭勘定確か
瞬きをするからばれる夫のウソ
鋏研ぐ亡父の真似してハサミ研ぐ
駈けて来る先生を待つ島のバス
もたれ合う人の背中も痩せて冬
産廃の島で村人奮戦記

倉吉市　米田幸子

相続税なんて全く他人事
濁らせてならぬ三途の向う岸
私の客を夫が独り占め
割り勘でゆける気楽な飲み仲間
ばあちゃんは音に響いたけちん坊
二千円ぽっちと孫のしぶい顔

鳥取県　さえきやえ

ペイオフに金持さんが大さわぎ
遠慮なく物が見たくてサングラス
花の趣味生きる支えになってきた
小鳥のおかげ千りょ万りょの赤い庭
年の差を越えて話のウマが合う
子の帰り待って実の成る木を植える

東大阪市　谷口義

数え年で言わねばならぬ時もあり
無愛想な親子に深い絆あり
似合わない帽子のように夫婦いる
利息の計算は早いおばあさん
忘れたりとぼけたりして暮らしてる
八合目からは神様の手を借りる

西宮市　西口いわゑ

心から笑えぬ人と飲んでいる
冬木立空の神秘の中にいる
蒼天へふわり真綿の絵画展
鏡よ鏡たまには嘘も方便よ
底の底では夫に丸をつけている
震災も早や七年が過ぎ去りぬ

箕面市　岩津ようじ

化けの皮嘘の皮はげ下がる支持
降る雪も汚れて見える雪印
院長も署長社長も詫び上手
白黒茶　髪色に見る三世代
忍ぶれど色に出にけり族議員
露天風呂禿と白髪フルムーン

残された余白急がぬことにする
家の中にも見張ってる目があった
死にざまで僕の評価は出るだろう
笑い皺裏を見るのに長けている
危険信号だから渡ってみたくなる
リストラですると脱皮出来ました

砂川市　大橋政良

点滴を見つめて明日を模索する
頭じんじん心じんじんポカン
友人に豪華な花で見舞われる
幽冥の境を夢は遊ばせる
あの日から現在があり君が居る
馬車馬のような頼もしき看護婦

横浜市(故)　菱田満秋

まだまだと湯舟で孫を茹で上げる
また一つできたとリハビリ室が沸く
目印の銀行名がまた変わる
日本を気遣いながら鶴帰る
年金に似合う小さなゴミ袋
職探しプライド徐々に小さくなる

唐津市　市丸晴翠

長短をつなぎつないで丸く住む
イレギュラーするからゲーム見逃せぬ
心から握手するなら是非両手

香川県　川崎ひかり

空箱がとてもきれいで捨てられぬ
握手する片手に悔いを握りしめ
恋を知り嘘がだんだん上手くなる

松山市　宮尾みのり

腕力はないがパソコンなら打てる
価値観の違いか恥に気がつかず
根回しの網からひとりもれていた
ずっしりとその一言が胸で生き
定位置は二番手周囲見えている
至近距離思いがけないものが見え

高知県　赤川菊野

キサラギの闇をゆさぶる訃の知らせ
リトマス紙今の私はどんな色
昨日より高いハードル飛んでみる
レンタルの夫がほしい吹雪く夜
アリランの唄が聞えるエアメール
次の世はきっと此の手に母子手帳

富山市　酒井輝

身に滲みる感謝のどまで来て出ない
当然のように養子に別居され
雨よ雨やさしく戻れ広い海
寄り付きで遁げ暴落を掠り疵
貝の巣をライフラインが突き崩す
惑星の一つ火を噴く銀河系

米子市　青戸田鶴

新刊書ひらくときめきいつまでも
言いあったあとは無口のままに過ぎ
年相応では気に入らぬ女たち
ある時は髪さかだてて言いつのる
現代を深夜テレビでおそわった
根分けして花いっぱいの庭にする

出雲市　佐藤治代

覇気のない夫婦喧嘩になって老い
命とや夫婦で祈ること多し
教訓になることもあり友の愚痴
追いかけた日を懐かしむ写真帳
わたくしのお尻を叩くのも私
失敗をバネに越えたい山がある

出雲市　竹治ちかし

愛着があるから脱皮出来ず居る
凡人の域で悟ってまた悩む
父越えることなく父の歳となる
善と悪仮面時々取り替える
予定があって信じたくない予報
物干しにわたしの脱皮した姿

鳥取県　石谷美恵子

レストラン何処の肉やら迷い箸
福の相少し崩れた目鼻だち
やさしいが一緒に夢の見えぬひと
長ばなし本音はやはり金のこと
たとえばの話あんたは多過ぎる
大笑いしながら涙拭いている

岡山県　小林妻子

介護してもらうと分かる有難味
完全看護今日も殿様ぐらしです
脳味噌に悪夢ばかりがこびりつく
人工レンズ僕も二十歳の目に戻る
部品交換此の世の風は温かし
余生幾許神に明りをいただきぬ

富田林市　藤田泰子

ひとつ捨てひとつ拾って収支零
七十歳　いろはカルタを咀嚼する
甘酸っぱい思い出がある嘘ひとつ
臺が立つ前にあなたを食べ尽くす
孫の髭　私も歳をとりました
私の居る場所でなし繁華街

富田林市　中井アキ

後から撃たれぬように振る尻尾
火祭りのとんどに遠い亡父がいる
究極のうまさは老母のにぎりめし
果敢にも男一匹風になる
高砂ややがてやがての一里塚
言い勝ってみても流れは変らない

あの時の無駄な話が今日光る
母ちゃんのえくぼ繁盛引き寄せる
ＩＣＵ闇魔を蹴って脱出す（大腸炎）
一人観るテレビ自由で味気ない
未亡人になり損なって乾杯す
病床は六つドラマも六つあり

河内長野市　水谷正子

雪吊りのおしゃれで春を待つ木立
しだれ梅色気たっぷり城下町
シャンペンの味を覚えた孫娘
咲き揃う花は鋏が大嫌い
花道は無いが周りに敵も居ず
永久に姿を消すか雪印

河内長野市　井上喜酔

いい事がありネクタイが決まらない
相槌をうつてくれない人といる
十九からずっとおんなじ人が好き
計算機作動してます胸の奥
十字路をまだ抜け出せぬあかんたれ
暇な日は笑う練習しています

藤井寺市　太田扶美代

振りむいてまた面倒を背負いこむ
わたしってきっと変人の部類だろ
糸瓜のまんまでゴミと言う和服
うまいでしょペイオフ内で残します

西宮市　山本義子

奥伝にいかぬ趣味なら五つ六つ
春の花の浮かれ上手にのせられる
鬼は外　見栄も弱気も飛んでゆけ
忘れな草初心忘れてから久し
早すぎる時の流れよ　なァ亀よ
二十四時すべての人の持ち時間
はらはらと退屈させぬ子が二人
母と娘の絆うれしく疎ましく

西宮市　奥田みつ子

自問自答重ね贅肉そぎ落す
空手形しょっちゅう自分宛に切る
仏壇に毎日力借りている
見れば見るほどよく出来ている漢字
風邪三日旅のパンフを繰ってみる
値に惚れた柄それなりに好きになる

大阪市　西出楓楽

正義感がビーフステーキ拒否をする
銀行はどっちやＵＦＪとＵＳＪ
せめてものお百度まいり病む人へ
お遍路もスポーツ　リュックにスニーカー
三方一両損とは医者代上がること
招かざる客連れて来るＷ杯

大阪市　板東倫子

八尾市　生嶋ますみ

ライバルを褒めちぎってる負け惜しみ
大根の白さに寒がすきとおる
逆らってみても妻には勝てません
からす鳴くまるで批判をするように
テレビ音あげて隣もお年より
裸木の会話が弾む春そこに

八尾市　神原まさと

パソコンにあいそつかされふて寝する
熱燗に緑内障の目を忘れ
カタカナの文字に白髪がふえて来る
買わなんだ時に三億出る売場
不景気と寒さで暇な理髪店
ペイオフの講義案内僕になぜ

吹田市　穴吹尚士

門限を娘にちびちびと値切られる
鼻声で父の財布を娘は開く
時折はバラ一輪を妻に買う
食べ尽くし喋り尽した妻の客
バイキング妻には勝てた事がない
抱き癖をつけたら嫁に叱られる

高槻市　傍島克治

都落ちする身に月が明るすぎ
息子との距離が拡がる変声期
優先順位　孫犬猫のわが家です
千手観音になりたや掴みどり
余生とは起死回生のロスタイム
追い風に浮かれて進路踏み外す

枚方市　鈴木政子

貧乏戎と皆が言うけどこの人出（京都）
ヒビ割れの鏡に私ピカソの絵
人間の悪知恵牛もあきれてる
巨泉さん出番がなくて砂をかけ
貞子さん絶対NOと思ってた
ヒューストンにまた負けました種子島

寝屋川市　平松かすみ

自己主張出来ぬ私は輸入肉
年中無休あなたの妻になってから
占いの老後は吉でご安心
大声で泣きたい時もある大人
ペイオフで探す格付けAランク
お日様に向って踊るシャツパンツ

四条畷市　吉岡修

スパイスの効いた話に誘われる
ご学友我が家も孫に期待しょう
カタコトの初鴬に起こされる
監督の冥利ライバルから招き
グループの最高齢になって来た
この前の名が出て来ない銀行へ

堺市　村上玄也

負け犬が傷なめあっている屋台
朝ドラに涙腺ゆるめてる老母
下戸だけど宴盛り上げる芸達者
新人類と言われた世代はや五十路
また一つ老舗が姿消して行き
悲しみへマイク突き出すインタビュアー

宝塚市　嵯峨根保子

回想は目を閉じてから彩がつく
ブリ大根どちらが主役かと迷う
カーテンを閉めて自由になるパジャマ
名山のボトルを踏破しています
本当の手前で止めている言葉
地蔵さん激しい過去のない顔で

川西市　西内朋月

大寒や仏の花が枯れている
同宿を敬遠されている鮒
着ぶくれて玄関の鍵閉めている
侘助の一輪がある無人駅
茅葺きの宿屋で囲む牡丹鍋
清浄な雪と似つかぬ雪印

京都市　高島啓子

レジのミス帰ってからは責められず
人生とはなどと考えるのは男
たてまえが男を造ることもある
落ちてから苔にも一度咲く椿
家事こなすこれが修行でなくて何
戦前より弱くなったは絹の糸

和歌山市　細川稚代

気遣いがあって続いた半世紀
再会を約して風の街に散り
立春へ独りの豆を煎っている
抱き合って男泣きする金メダル
親バカと言われそうだよ手巻すし
スランプと言う大切な時間帯

和歌山市　田中みね

人当たりとてもいいけど無責任
もうあかん言うて母上今卒寿
イカ天が跳ねて修羅場のクッキング
愛ちゃんのその後如何と思う春
役一つ済ませ寝る事食べる事
腹立てた此方が馬鹿と知る悟り

海南市　三宅保州

三寒四温首を出したりすくめたり
また水を遣りすぎているおとうさん
満面の笑みで入って来た詐欺師
ゆっくりと出ていったのが犯人だ
鑑定に出すと後悔する家宝
封を切るときの鋏はもどかしい

熊本県　岩切康子

お喋りの中に得ること二つ三つ
佇んでピンクの雲に恋をする
慰めの電話長びき貰い泣き
向き合って居れば逃げ出したくなる日
誕生日長い電話で弾み合い

熊本市　永田俊子

コンプレックスせめて心に花を植え
近くて遠かった父の冬帽子
色とりどりの思い出抱いてる端切れ布
老いをくすぐる勧誘員のやさしさ
先頭からだんだん離れてゆく私

唐津市　井上勝視

核家族嫁の目実家だけを向く
酒煙草やめて小遣い削られる
我が家にも九条らしきものがある
Eメール栄え言葉が亡びゆく
改革のメス手袋のまま欠伸

唐津市　樋口輝夫

肩の雪払ってくれる人がいる
大仰に雪囲いした医者の庭
沖縄の子らに眩しい銀世界
アフガンに飛んで行きたいパンの耳
初孫が十指を見せて安堵させ

唐津市　久保正剣

不手際な政治の中で喘ぐ民
実行犯不明の妊婦も来る外来
喜寿過ぎた今は人類愛の日日
一人では死にそうだから別れない
門限を訊いて出て行く宿の下駄

唐津市　仁部四郎

春は曙町内会の役に就く
春は曙古い上着を捨てるべし
春が来た雲よく動く永田町
春が来た人事の嵐来るらしい
それぞれに進学孫に春が来た

唐津市　宗水笑

政治への期待は冷めてプロ野球
出世した教え子君で呼ぶ冥利
身勝手なようでも好きな山頭火
雑木とは失礼山の下支え
百円ショップあれこれ千円程になる

香川県　神保坊太郎

月の砂漠を今は戦車が西東
薬石の効あり米寿を生かされる
分業の日本の神は争わぬ
いい夢も獏に食われてばかり居る
解放のカブールの女被らない

光るものない手で五人育て上げ
控え目に座って居ても光る人
平凡な歩み自分史書けず居る
新宮のはや女帝なるお顔付き
苦労した分だけ笑顔美しい

香川県　清川玲子

健康な余生を送るむずかしさ
共に病む人のイビキを堪えて寝る
山里の風に抱かれて遍路旅
お遍路の鈴で幕開く島の春
夢という一字に生涯惑わされ

香川県　成重放任

少しだが私にもある隠し金
詐欺商法元を糺せば根は深い
ちゃん付けで今も呼び合う七十歳
色づいた蕾が夢を膨らます
地球だってストレス一杯溜めている

香川県　瀧井勝

スタート切った二十歳の孫に職が無い
雪深く静かに眠る森が好き
母が逝った深夜も雪の深い刻
最初ちょっぴりだんだん度胸つく汚職
ペイオフなど無関心です庶民です

松山市　丹下美津子

夢追ってでこぼこ道を七十年
蕗味噌は母の小言の味がする
恋人を待ちくたびれた猫柳
人間を信じて牛は草を食む
生きざまを父の遺影が苦笑する

青森県　西谷大吾

正論も後ずさりする多数決
宴席の美女は独酌などしない
シリコンの乳房も混じるコンテスト
毒味したことを後悔する夫
義理の糸ばっさり切って軽くなる

黒石市　相馬一花

脳味噌の手入れは金がかからない
母さんの手には名誉の傷がある
いい仕事してます女郎蜘蛛を観る
別々の趣味でよかった夫婦独楽
貧乏神と一対一で話する

弘前市　高瀬霜石

外人の胃袋で来る機内食
胃袋がも一つ欲しいバイキング
消費税分も割勘ややこしい
安い酒売るから量が多くなる
六人で校正したが気付かない

弘前市　須郷井蛙

弘前市　福士慕情

閑古鳥おんなじ鮨が回ってる
口コミの店に並んだ腹の虫
自販機が分け隔てなく礼をいう
不馴れだが炊事洗濯する生活
湯豆腐の愚痴なら聞かぬことにする

弘前市　櫻庭順風

せせらぎの音に起こされる河川敷
打撲傷　気怠い午後の河川敷
よくぞ上がった　梯子はたった五メートル
鎖骨脇骨七本折れた空元気
脱衣婆に誉められている武勇伝

弘前市　宮崎ヒサ子

雪まつり武者絵灯籠凛凛と
りんご煮るゆったり時が流れます
親切はほどほどがいい薄日射す
春浅く虎落肌刺す訃が続く
高齢のお仏さんは和らいで

弘前市　相馬銀波

雪投げの汗納豆に塩を足す
裏年の花芽捜している鋏
古希の声歩幅を変える靴になる
立ち読みは気まま時間を止めている
節分の豆は野鳩と分ち合う

弘前市　蒔苗果林

初冬は霰に気力煽てられ
ささめ雪傘さす老いにわらべ唄
暖房のいらぬ大寒日向ぼこ
吹雪には熟睡出来てよい目覚め
明日の天気お山の雪の彩に訊く

弘前市　高橋岳水

かみ合わぬ話へお茶が冷えてくる
雪解けの水が多弁になって春
晩成を夢見たままで黄昏れる
雨降れば雨を味方にする宴
秘め事を抱くと艶増すのはおんな

弘前市　今愁女

北窓を開けば山はすぐそこに
うつむきの蕾まだありシクラメン
天に学帽投げて若きら卒業す
涙拭く拳もありや春の雨
朝の膳春をたのしむ花菜漬

弘前市　一戸ツネ

ふわふわと少女の化身　春の雪
きな臭いだれもかれもが共犯者
外は雪窓辺の笑顔シクラメン
長い影それはわたしの背後霊
種袋はしゃぎだしそな春の風

荒ぶ世を潤す姫のお誕生
老いつれど紅は残せり絵の具皿
嫁からの電話かすかに孫の咳
掃くに惜し銀杏一葉を栞とす
葉を落し大樹は凛と空に立つ

静岡県　薗田獏沓

おめでとう作り笑いが上手くなる
肩肘は張らぬが脇は締めておく
泣く事があって心が乾かない
洗脳されそう話の腰を折る
神様は間に合ってますドアー越し

東京都　播本充子

更迭のドラマ見つめる夜の冷え
未消化の交代劇の深い闇
肩に背に五輪食い込む選手達
実況の前に寝不足強いられる
悴んだ手を開かせる春の風

東京都　後藤早智

即身仏真似て三食抜いてみる
嘘のスペア使い果たしたどうしよう
歯が抜けて挑戦状が風に舞う
狂牛病どこ吹く風よ肉旨し
たかがラーメンなどと言えない長い列

富山市　舟渡杏花

つば広の雲を帽子に富士の山
アピールの上手な人に負けました
大波を小波で過ごす技を持ち
うたた寝の顔年輪が浮いている
夕方の祈りは深くふかくする

富山市　島ひかる

冬を耐えたわらびの檄が聞えそう
残雪の坂を励ますふきのとう
春風に会おうと眼鏡ニューにする
春風に誘うひとない券二枚
その節はむにゃむにゃむにゃと世を渡り

富山県　増田紗弓

金魚鉢から人間って面白い
日曜日力仕事をあてにされ
五時半になると闘志が湧いてくる
どこからか四ツに折った札を出し
泡立ちの中から岩魚ごぼう抜き

愛知県　早川盛夫

富士山の彫り深くして空青い
一輪車道いっぱいに声ひろげ
名水で今日も飲んでる頭痛薬
一病を味方につけて人ぎらい
豆雛を出せばかすかな息づかい

川崎市　和泉あかり

病院の実態を知る見舞客
励ましが祈りに変わる寒の入り
理不尽であろうが神に逆らえず
悲鳴かもナースコールへ駈けつける
体力をつけて試練へ立ち向う

横浜市　清水潮華

付添いが六人も行く宮参り
晩成を信じる妻がいとおしい
速効のうしろに潜む副作用
苦労した過去を聞かされ好きになり
夢を追う男は過去をしゃべらない

横浜市　菊地政勝

三姉妹と聞けば美人と思っちゃう
銀行も協力しない二〇〇〇円
赤提灯今日もとぐろの不況論
窓際にまだ骨太な生き字引き
一線を守る男の侘住い

横浜市　小野句多留

侮れぬ新老人の心意気
気休めの栄養剤に見縊られ
少子化に我慢の文字が淡くなる
日だまりの痩せ蟷螂とにらめっこ
風花に諍いの肩歩み寄り

横浜市　保田絹子

万年床で時差取り戻す独り部屋
厳冬のハイビスカスを観るハウス
雨垂れにショパンのCD盤探す
発表の待つ間を祈る茶髪の子
激論で火照った顔に牡丹雪

京都府　丹後屋肇

お抹茶に目のない老いのひとり言
豊かさの価値観同じ人と住み
娘ぐらいのヘルパーさんの笑顔よし
指導碁を打つ鬼さんはもう居ない
鋭い予感に背筋がぞっとする

京都府　稲葉冬葉

今日こそは芋タコナンキン父は留守
母の言う通りに父をたしなめる
父さんと似ても似つかぬ人を恋う
父の髭さっぱり落とし好々爺
介護されるチチはわたしの父でない

堺市　志田千代

感謝して生きているのに愚痴が出る
物干し場まで茶柱を見せにくる
本気なら不倫も咎めたりしない
干し草の匂いする人憎めない
鬼は外豆を撒くのはうちの鬼

堺市　和田つづや

住みついた鬼がときどき弱音吐く
親ごころ出過ぎる口に鍵かける
酒の席で聞いた本心忘れます
テレショップ私も鍋を買いました
日の丸の旗が寂しい冬季五輪

堺市　齋藤さくら

風の囁き雨の囁きから春に
不器用な両手が恋をまた逃がす
情報を甘く見過ぎたツケがくる
背きたし背けぬこころ春や憂し
コンプレックスと自信が揺れる風の中

吹田市　山本希久子

遺跡縹渺争わねば人生きられず
砲弾の中で最も神呼ばれ
能天気すぎる地裁の理想主義
楽団でフルート吹いてるうちに禿げ
俗なまま豆秋逝きし歳を過ぐ

吹田市　早川棲世

つつがなく朝餉感謝の卵割る
コーヒーを挽くリズミカル春の音
福はうち居場所に困るワンルーム
改札を無口で急ぐ冬帽子
地球儀を割ると地雷がこぼれ出る

高槻市　江原秀夫

保存する肩書きついたこの名刺
七十路散歩の道に花が咲く
バブル期に買った金庫が眠ってる
レストラン無言の食事老い二人
きびしさとぬけたところのある親父

高槻市　西谷治三郎

居眠りは許すいびきは許さない
人気など捨ててコアラは帰りたい
背中にも表情がある春の駅
保険屋がまさかまさかで攻めてくる
追い越してしまうと夢が消えそうで

寝屋川市　江口度

破綻した過去のブランド着て掃除
現役の靴はひと際光ってる
ワンマンもタバコ喫う場を探してる
拝まれてリストラされて泣いている
大入りも懸賞金も減る相撲

寝屋川市　高田博泉

さくら咲く歩ける膝が嬉しいね
作るより買うのが安い野菜たち
蟻の巣のような迷路が地下にある
申告書記入わたしも世帯主
マンションへお盆のような春の月

寝屋川市　岸野あやめ

寝屋川市　籠島恵子

如月の月はぬき足しのび足
それぞれの曲り角です家族たち
妹に頼むしかないチケットだ
刃こぼれを起こしてしまうハイトーン
パソコンのパソのあたりで骨折す

寝屋川市　太田とし子

輸入した野菜法事の膳にのる
黄昏れて行方不明になる記憶
死にたいと言う口で飲む置き薬
寒の水飲んで胃腸も寒修行
掌の生命線が呼吸する

枚方市　寺川弘一

寿命とは１００パーセント生きること
シナリオはあるが共演者が居らぬ
傷ついた河淡々と受ける海
チンパンジーが笑い華やぐ動物園
拝み方にも国境があるうとましさ

枚方市　宮川珠笑

捨てられて犬は首輪を外せない
ウイルスに一喝している大くしゃみ
過疎駅の案内私にだけ流れ
手をつなぐ手袋片方ずつ分けて
水洟が花粉をガードしてくれる

枚方市　安達忠央

似合う人も似合わぬ人も冬帽子
パーティーの帽子に苦心令夫人
行かねばと帽子襟巻き寒の通夜
身のほどを知らずに難儀雪の山
カブールにもニューヨークにも雪が降り

羽曳野市　酒井一壺

七福神ずっと仲良し続けてる
下積みはよくぞ我慢の残り福
豆まきへ勝手な台詞鬼が吐き
偏差値は低いが福引よく当てる
雪山はテレビで見てるほかはない

羽曳野市　吉川寿美

ふるさとをずっしり詰めて荷が届く
子にゆずる地図は白紙のままでよい
嘘一つ追いつめ返り血浴びる羽目
侘びしさと気ままに馴れた大根炊き
掌の中で握りつぶしている怒り

羽曳野市　西村りつえ

寒空に竜かけ登る聖火台
ダイナミックに素敵な笑顔銅メダル（女子モーグル）
菜の花の海騒がせた春一番
雪印モラル消え失せ雪が泣く
生き方の違いが滲む同期会

藤井寺市　中島志洋

好きだった酒掛けてやる春彼岸
八起き目にやっと光が見えてくる
肩の凝る話はよそう春うらら
部下にまで同情された春異動
恐妻のタクトで回る夫婦ごま

藤井寺市　高田美代子

正面を向きたがらない壺のキズ
山が哭く遠くで海も哭いている
名も告げず終着駅で別れたり
それぞれの個性で違う満足度
マンネリで時々爆ぜてみたくなり

松原市　小池しげお

南無阿弥陀だけでも分かる仏さま
つながりがあるので同じお座ぶとん
メニューにある湯豆腐の高いこと
親切がだいぶん過ぎたおかんむり
まだ若くラジオ体操一二三

八尾市　篠原いつふみ

取れかけたボタンに似てる夫婦仲
男気の金以外ならまかせとけ
家出でもするほど荷物妻の旅
雪吊りにご苦労さんと冬を解く
慟哭の喪服の肩に牡丹雪

八尾市　髙杉千歩

自己満足ひとりよがりや春の筆
パソコンにテストメールが詰ってる
補聴器が春のリズムにけつまずく
ランドセル卒業孫の眩しかり
四泊五日検査入院別世界

八尾市　宮西弥生

ひとことの毒舌あれもほんまもん
鬱の日も手足が動く万歩計
昇る陽も沈む陽もよい旅カバン
地獄でも極楽でもよいぽっくりと
他人の知恵たべて大人になりました

八尾市　吉村一風

ライバルと会うとどしても背伸びする
土鈴振ると昔の旅を思い出す
全身で笑う憎めぬ友と酌む
欲の無い男を真似て欲減らす
赤ちゃんが笑うとみんな笑い出す

八尾市　長谷川春蘭

霜柱さくさく崩しつがい鳩
三寒の手足をだます酒少し
水の味たしかに風邪の癒え初めし
冬霞バス温かく人容るる
雨戸開け先ず冬木の陽をたしかめる

八尾市　井尻　民

ふっきれてやさしい眉を引いてみる
待つ春にホップステップジャンプです
お水取り待ってましたと戻り寒
もろもろの言い訳のせて終電車
変り身の早さランクを少し上げ

八尾市　宮崎　シマ子

地蔵様の鈴に民話の音がする
暮しぶりオープンにして友が増え
邪魔くさい話はしない決算期
少し位悪さする方に運がくる
王様になりたい欲は持っている

八尾市　村上　ミツ子

ちょっとした油断を風邪に狙われる
無気力とやる気ぶつかり合うている
義理を欠くことでなんとか暮らせそう
年金の杖は下まで届かない
騒動が茶の間を政治通にする

箕面市　出口　セツ子

思い出に触れると溢れだす涙（父宗孝逝去）
世の無常はかなさ孫へ刻む亡父
今思えばあれが遺言突然死
出棺へ起きてと揺すり起したい
薄情な娘だごはん食べられる

池田市　栗田　久子

ことば無き別れの朝のシクラメン（計光氏永眠）
袴脱ぎそよいでみたいつくしんぼ
麓からうねるがごとき山桜
人恋し春たけなわの街に出る
そよ風に乗っていってよしゃぼん玉

豊中市　安藤　寿美子

だんだんと人畜無害になる私
四苦八苦お悔み状は書き難し
いく度か人の訃を聞く寒の内
実南天食べつくしたか鳥も来ず
ひとり居てひとりぼっちでない私

豊中市　山門　タミ

アスファルト地球の吐息聞こえない
語り部も隣近所も遠くなり
窓を開けば前後左右は屋根ばかり
浮雲は茜に染まり絵になった
口達者足の不調は天の業

豊中市　山門　幸夫

人恋し無性に恋し梅の香よ
晩酌を残せば老妻が心配し
じゃあまたねそれからねえと長電話
ひょっとして一鉢くれる花を褒め
辛過ぎるソルト祭りの日本勢

豊中市　田中正坊

これがもう最後と思うパスポート
花が好きフロリアードを見に行かん
妻なりの一年の計味噌仕込む
すくないが年金ボクの命綱
改革が進めばつのる不況風

豊中市　江見見清

突風にそっと帽子へ白い指
継ぎ足しの話の方がうけている
土俵から踏み外したい時もあり
世の中に疎い貴方に癒される
リヤカーと荷馬車に出逢う遍路道

豊中市　吉田あずき

参ったと言わぬ頑固な寒の月
結び目も思わずゆるむ春の風
チューリップふっくら春を孕んでる
ライバルが翔んだ羽音で目を覚ます
ロボ犬の芸増えてくる人の憂

富田林市　片岡智恵子

度の弱いめがね優しくしてくれる
銀行に悲喜こもごもの顔座る
時どき嘘まぜて楽しい生き仏
振り返ればよくぞ登った八合目
道しるべ多すぎ道を見失う

富田林市　大橋鐘造

朝刊は見ない血圧上るから
風向きを読んで糸切る奴凧
一線を守り通した悔い一つ
裏の裏読んだつもりの浅い知恵
お互いに己を殺し馬合わす

大阪市　本間満津子

大風呂敷拡げた手前身銭切る
齢と言う数字に勝って正常値
自己主張一番強い黙秘権
お金で買えるものなら総て売っている
知らぬが仏疑えば食べるもの無し

大阪市　川久保睦子

ライバルは自分の中に住んでいる
うかつにも本音をもらす雪が降る
熱いものください少し寒いから
底冷えの五臓六腑へ屋台の灯
枯葉舞う風の喝采浴びてから

大阪市　神夏磯典子

エネルギー春の雑草からもらう
分析表に負けぬ私の目分量
その時にたまたまうけた拍手です
真剣に後姿を見てほしい
ばあちゃんが白酒に酔う雛まつり

大阪市　前　たもつ

コンタクト探すにまわり静止させ
愛想よいバスだ新人運転手
切手不足で戻ったハガキふてくされ
二日分呑んで明日は休肝日
父の歳生きれば亡父に逢いに行く

大阪市　鈴木トヨ子

おひな様茶髪にしたい世相です
傘寿まだ喜びあえる友が居る
デザインの違うドレスはお家元
アベックが車内なごまし手話つづく
降る星に悩み送った露天風呂

大阪市　小林周信

父の職継いで忍耐知らされる
ドンマイと許す笑顔に救われる
神様のお許しがあり生きている
満額の回答は出ぬお小遣い
仕送りのお礼は母に来るばかり

大阪市　小糸昭子

馬鹿でした小さな意地で深い傷
情報の坩堝の中で足掻く蜂
遥かなる故郷恋しと象は啼く
習性は犬にもあったこの一途
意地悪な風が耳から忍び込む

大阪市　川原章久

牡丹雪ああエンゼルが舞い降りる
狸より上手に化けるギャル車中
カーテンが来る春告げる窓の風
努力すりゃ大の虫食う小の虫
愛のある女一番美しい

大阪市　津守なぎさ

二年坂三年坂に弾む旅
金網の奥　仁王様おわします
ダイエット心がけても目方増え
病院に来ると血圧上がります
外出が好き寒風も厭わない

大阪府　澤田和重

案の定カラオケ下戸が盛り上げる
我が道をゆく上も見ず下も見ず
堪忍袋破れぬように小出しする
譲られた席香水のいい匂い
さりげなく友がフォローをしてくれる

大阪府　米澤俶子

今少し忙しさ残す生きるため
心配より興味本意で来る見舞
蒟蒻の悲鳴聞こえる針供養
銀髪になったらおしゃれしたい色
新色の口紅が待つ春の風

体温を感じる言葉かけて欲し
きれいだったのにと言われる同期会
等身大の自分で生きてゆく余生
ふり向けば別れる決意鈍るから
志半ば真紀子の鬼退治

東大阪市　北村賢子

クラス会欠席にして旅に出る
この旅はオハラショウスケさん気取り
雪国の雪に埋もれた灯の温さ
除雪車も行き交う長野ハイウエー
天気予報ロシアの上に雪ダルマ

東大阪市　指宿千枝子

記念館　菜の花を盛り菜の花忌（記念館見学　3句）
司馬遼太郎の偉大さを見る蔵書棚
魂が見守る中で記帳する
案内はローテーションのボランティア
もう頭出そうか土筆考える

東大阪市　安永春

お祝はキャッシュの方がいいと言う
おしゃべりが減って体調気遣われ
改革の痛み弱者に押し付ける
ストレスをまた持ち帰る旅鞄
見るだけと呪文をかけてデパートへ

大阪狭山市　矢野梓

ノンキャリア　キャリアに負けず金を貯め
不満でもライオンに物言えぬ党
模範高　模範の生徒だけならず
大学の生き残る道スポーツに
安い下着買って洗濯機をこわし

和泉市　岡井やすお

占いもくじにも当り外れあり
いつも上座に坐る人お茶運ぶ人
助け舟出そうかいいえほっておこ
プライドが崩れる時はアリバイも
気持だけあふれて付いてこぬ手足

高石市　浅野房子

氷雨降り初弘法に行きそびれ
自販機の計算私より確か
古稀ですがまだチョコレートたんと欲し
ししおどしコツンコツンと春を呼ぶ
馬刺しなら問題ないと農水省

交野市　森本弘風

この先は流れに任せケセラセラ
歳を取り祈る事のみふえて行く
前向きに生きよと朝日昇り来る
これからは本音で生きよ老い二人
なるように仕向けた話波が立ち

大東市　児玉蛙

岸和田市　高須賀　金　太

人様に右へ倣えはいややねん
スポットライトが暗転したままや
ライバルが転けたら笑うてもええか
運のある男べらべら喋らへん
散骨にしてやと妻に言うてある

岸和田市　木　村　正　剛

妻の飲む風邪薬では治らない
専業主婦なのに優しい言葉ない
三人が辞めれば嘘もみな本当
怒り肩まだ足らないで肩パット
ユーウツな春が待ってる花粉症

岸和田市　井　伊　東　吉

夕刊を旅案内が埋めつくす
不祥事を一度は否定直ぐ謝罪
風邪ですとこれ見よがしの大マスク
牛よりも人間狂いが恐ろしい
経済も政治も三流なり下がる

岸和田市　原　　さよ子

ネット化が流れを変える年賀状
血の流れきっちり貰ろた左きき
リストラに三日残った定期券
夢のせた定期預金にそむかれる
さりげない言葉の裏にあるヒント

河内長野市　加　島　由　一

西の風風力は三　おぼろ月
四月馬鹿笑える嘘が出てこない
逆風の中で磨いている笑顔
良妻で賢母やきもちきつね色
働いて飲んで時々片思い

西宮市　門　谷　たず子

合格通知チューリップの芽出揃った
キャッチボールの愛がずれだす夕茜
やさしさを武器に一匹鬼を飼う
ささやかな愛に転がる紙風船
足元にある倖せに気付かない

西宮市　秋　元　て　る

朝の顔一人増えそう散歩道
一回り下に招かれ初歌舞伎
車内化粧見てる楽しい暇つぶし
忘れたが口癖友の老い哀し
酒好きの亡父で只酒飲む勿れ

西宮市　牧　渕　富喜子

暗がりにぼんやり浮いた梅の精
さよならを病院出てから言っている
ドラマひとつ書けるとしたら母のこと
矢印の一つ手前の角曲がる
ボス猫に道ふさがれる日の寒さ

横すべりの犬が照れてる凍る朝
十七回忌出世頭が欠席す
芹つくし摘んでまだ来ぬ過疎のバス
シャンパン色の山の彼方に春生れ
てんとう虫と春が来たネと話し合う

西宮市　亀岡哲子

サッカー来るフーリガン達引き連れて
お好みの神籤もらえる村の寺
固まって渡ろう怖い青信号
年毎に日記の行が痩せてゆく
作業場に汗と恋とを置いてきた

西宮市　坪井孝一

輪廻転生やがてものみな春の色
旅立ちのときめき木の芽色冴える
カラーよりモノクロにあるかくし味
煩悩の灯がチロチロと消えぬ胸
義理人情引きずりながら生きている

尼崎市　松下比ろ志

命とはなんと果敢ない小雪舞う
一寸先闇かも知れぬ発泡酒
珈琲で天下国家を論じ合う
人格を彷彿させる言葉尻
肉ジャガは出来ると二十歳胸を張る

尼崎市　長浜澄子

妻の怪我歳のせいとは言いきれず
現実の無常を映すレントゲン
ギブスした足が喋りたそうにする
一人飲む酒はさっぱり酔いが来ぬ
妻の頬精気が浮かび安堵する

尼崎市　春城年代

左足は頼りきられて可哀相
病んでいる足は気遣いばかりする
小康に忘れた唄を思い出す
恩讐は彼方に義母のかたみ着る
自信過剰の失敗ばかり刺抜かん

尼崎市　春城武庫坊

黄昏れてカカア天下の灯が赤い
人類の進歩を示すゴミの山
殺気かも研ぎ澄まされた鎌の月
大空をご覧よ許す気になれる
慶弔はもう沢山という財布

尼崎市　田辺鹿太

定年後の夫を遊びに連れ回す
正義派で遊び心を知らぬ父
出しゃばらずなりゆき見るも楽しみだ
絵手紙の可愛い鬼が来た節分
内緒やけどと噂ふりまく町内会

伊丹市　小熊江美

初生りの茄子に貰う温い夢
春風が気ままにさせる老いの旅
義理チョコをみんなに配る老院長
米百俵実って欲しい国創り
永住か雪降る昆陽に鴨のペア

伊丹市　山崎君子

そこだけは雪降りかかる雪やなぎ
囲碁よりもパソコン好きなおじいさん
ママの引くくじで入園決められる
凶と出たみくじ当らず早や四月
ゆれ方が居眠りするに丁度よい

芦屋市　黒田能子

あの頃の女専の君とバスの窓
半世紀ぶりの心ぶら春の雨
浜寺も高師浜も恋の跡
岩波を返してくれた花栞
アベノから松竹座まで歩いたね

神戸市　中村ゆきを

レットイットビーまた歌ってる一人の夜
犬一匹もてあましてる冬ごもり
午後のお茶卓上写真の君と飲む
夢でいい会いに来てねと鐘を打つ
ゴミの山まだ生きている物が泣く

神戸市　木村貴代子

いい趣味と言われ遊びに熱が入り
癒されて癒し返して生きている
海外で遊んでからの婿選び
横文字があふれて世事にうとくなり
いい話心の底が晴れてくる

三田市　久保田千代

おしゃべりをしたくて寄って見る市場
方言も袋に入れる土産物
ひたひたと背後に迫るような老い
札所にもエスカレーターある時代
灯籠の火もＩＴで持つ文化

川西市　米原雪子

戦時中思えばなんて通じない
路郎師が先輩だった小学校
兎にも亀にもなれず無位無冠
極寒の記事を読んでる堀炬燵
釘抜けるようにがたつく物忘れ

川西市　松本ただし

リストラへ赤い反旗は影ひそめ
年金の肌に寒さが痛く刺す
嘘つけぬから一言が多くなる
引っ越し荷思い出しばしタイムとる
仲裁もおんなじような声になり

相生市　中塚礎石

大和高田市　岸本豊平次

ドクターストップ乾杯はウーロン茶
お隣の婦唱夫随を聞くすだれ
老いの膝改札のベル諦める
心地よい寝息の妻でよく太る
親の背を見て育ったと見えない子

香芝市　大内朝子

ガボットのリズムで春がやってくる
うまそうでパン屋の前の深呼吸
葬列に出合い命のこと思う
ふる里を思うこころにいる仏
天地人　感謝ひとしお病み上がり

橿原市　居谷真理子

媚はせぬ小粒で種のあるミカン
母と娘の違う夢見る万華鏡
祝わねば老けこみそうな誕生日
ストーブを消しラジオ消し梅を挿す
古い恋打ち明けあって女旅

奈良市　米田恭昌

雪印雪の白さも恥ずかしい
福耳の女に男寄りかかる
旅の宿フルムーンらしい下駄の音
関白もやがてお世話になるおむつ
ワリカンに下戸はマイクを放さない

奈良市　天正千梢

藤原氏亡びの美学其処此処に
高館に義経堂のひっそりと
弁慶の立往生はどのあたり
家裁で返すメッキの指輪です
外堀を埋めに来たのに茶を出され

奈良県　渡辺富子

梅香り必勝の絵馬奮い立つ
修二会の火浴びてきっぱり断った思慕
合鍵を捨てて終った愛ひとつ
天下盗る話の好きな屋台酒
世間体鼻であしらう鼻ピアス

和歌山市　桜井千秀

太らないための苦労がいじらしい
死亡欄この人こんなえらい人
椅子ひとつ貰って耐える後ろ指
創造性逞しくて和を拒む
新鉱脈ありそう心掘り下げる

和歌山市　松原寿子

山襞がいくつもあって越えられぬ
楽しみをところどころに予定表
胸のつかえ取れそう春の陽と遊ぶ
向き合って飲むコーヒーに溶ける愛
突風が胸の痛みを掻き回す

和歌山市　福本英子

声大にした改革の尻すぼみ
過去ばかり積んで未来の無いはなし
心から愛した人に捨てられる
シャボン玉甘やかされて無責任
風邪ひいて今日も通院止めにする

和歌山市　木本朱夏

ミナミからキタまで歩く恋一途
タコヤキをはふはふはふと戎橋
いずもやの暖簾の前で深呼吸
ティーフォーツーわが青春のプランタン
やわらかい雨に濡れてく法善寺

和歌山市　福井桂香

夜間飛行北斗の下を悠々と
遥か夢みて唐三彩の馬飾る
螺鈿の箱に恋文を隠しおく
玉の児を産み落としたは阿古屋貝
貝殻の奥からシャンソンが聴こえ

和歌山市　楠見章子

背を伸ばしアンテナ春のタクトふる
ヒヒヒーン鼻先だけのハガキから
電子音びっくりしてる貝の耳
頭の中描く色紙がピカソめく
仲直りの切っ掛け探す箱の中

和歌山市　玉置当代

再会の孫と遊んだ那覇の街
娘や孫と守礼の門でハイポーズ
ひめゆりの塔にお花を手向けたり
紅芋やゴーヤ土産にエアポート
ふところが寒いと皺も増えてくる

和歌山市　青枝鉄治

名を成した男出たがるクラス会
日本語を喋れぬ児らのラブソング
抱いた児が泣いてけりつく立ち話
嘘少し混ぜて法話が沸いている
野良猫に育児のヒント教えられ

和歌山市　吉村さち子

言わぬだけマグマはいつも溜めている
倖せという確証のない長寿
仕草まで似ていて孫は義理堅い
モノクロのわたしが澄ます高島田
私に死ぬまで来ない追徴金

和歌山市　西山幸

邪心などない大根の白さなり
一日のメニューの中の梅茶粥
鏡の中の私にあかんべえをする
鬱の日はセールス電話ばかり鳴り
現実は歩き疲れた背負い袋

和歌山市　古久保　和　子

鎌首をもたげて冬が真後ろに
たった一人で吠えているのは野良犬か
出方によって私もラベル張り替える
座布団を勧める猫から取り上げて
仙人の顔して深海魚が浮上

鳥取市　岸　本　宏　章

申告の時期へ税務署ぬかりない
株安を他人ごとなどと言っとれず
あれからは知ったか振りをしていない
まだあった両成敗という裁き
被害者の声が届かぬ軽い刑

鳥取市　岸　本　孝　子

介護などされずに逝けば万歳だ
千羽鶴役目果してから孤独
難民のテレビに箸がふと止まる
老いふたり冬中かぜを移し合い
プロ野球日本列島春にする

鳥取市　福　田　登　美

逆境の坂で静かに歩を合わす
老いながらバレンタインの義理も買う
少年が無口になって脱皮する
虚飾捨て素顔の友に恵まれる
春の陽がとてもやさしく黄昏れる

鳥取市　岩　原　喬　水

悪口は酒が言わせた気にするな
災難の時だけ神は頼られる
厚化粧落すと別の顔ができ
神信じ死を恐れないテロリスト
煩悩でまた女狐にだまされた

鳥取市　加　藤　茶　人

赤い糸もつれたままでする離婚
ハレンチな先生何を子に教え
死ぬまでは悩みの種に居る子供
増額の保険へ妻が鬼に見え
逆算の死から数えた仕舞風呂

鳥取市　武　田　帆　雀

葬二つ体は一つ南無阿仏
テコ棒になりコロ石になり女房
ボロが出るから数かずと言うでない
憐れとも立派とも見る口髭よ
テレビ料理見ているアホな顔をして

鳥取市　植　田　一　京

大声の父で内証が話せない
リストラの父へもチョコは買ってきた
追いかける夢があるから振り向かぬ
敵はバッチリ私の癖を読んでいた
プラス志向　日差しにっこり笑いだす

鳥取市　倉益一瑤

この人と走ろうワッショイワッショイ
B面は意外もろいとご存知か
軽く見ちゃいけない雑魚の底力
自分史のところどころにテロの跡
年金の小槌を孫が振りに来る

鳥取市　近藤佳子

うつむいた影よ背筋を伸ばさねば
生きているうちに好きでしたと言おう
しがらみを抜けて天馬と飛んでみる
駄馬なりの的をさだめて生きてゆく
許されぬこともどんどん過去になる

鳥取市　美田旋風

閉店のセールも閑古鳥が啼く
いつの世も民から搾る天下人
そのときに愚妻の杖になれるかな
目を入れたダルマが雑魚に背を向ける
身辺の整理がゴミの山となる

鳥取市　徳田ひろこ

球根の主張に大地湧いている
すみれタンポポ咲く庭のドレミファソ
にべもなく他人は頂へのぼる
身の丈に似合う私の低飛行
たくさんの辞書に囲まれ落ちつける

鳥取県　原みさを

どうにもならぬ時には妻をふり返る
新しいパソコン買って古稀元気
会議は踊る火種に水がとどかない
憎まれる私がここにあるほんと
アメリカが憎まれるわけ知っている

鳥取県　奥谷彩子

ほどほどの夢を紡いで老い忘れ
古希の坂ゆっくり二人縄を綯い
雪しんしん虚構の街を白に染め
おいしさの話題三婆姦しい
はないちもんめ列抜けてから痛む胸

鳥取県　黒田くに子

人情をひとつ拾った過疎の道
夢追うて若い木馬は塀を越え
一瞬の命を演技する花火
すんなりと席も待ってる天下り
嘘ひとつ消化不良でねむれない

鳥取県　鈴木公弘

春はまだ景気の底を抜け出せず
硬いこと聞きに役所へ行ってくる
神経を抜かれて歯切れ悪くなり
指すべて動くだろうか十年後
夕焼けを力いっぱい抱きしめる

雪山に春が描いた縞模様
立春は我が誕生日飯を食う
なに一つ踏ん切り付かぬ二月尽
饒舌家歯に衣被せたり脱がせたり
やんわりときつい言葉で断られ

鳥取県　林　露杖

虫を踏む人間みんなテロリスト
重たいが扉を開けて春を呼ぶ
雪に咲く赤い椿の強い意志
無言だが風が仲人花の恋
椅子の価値知っているのはこのお尻

鳥取県　谷口次男

使い捨てカメラが露天風呂の底
健康のためにはならぬ雪掻きだ
ありがとう痛いところを突かれても
ポン友の助言にいつも救われる
老人会で元気を誓い合っている

鳥取県　土橋はるお

ふところが浅くて君をとり逃がす
花吹雪に会うしあわせの季を数え
真ん丸になって丸虫身を守り
病む人に二月の峠厳し過ぎ
歳なりの歩幅で生きるスニーカー

鳥取県　岩崎みさ江

人なみに動ける今日の薄化粧
窓越しに初啼きを聞く日向ぼこ
愛は無償　赤い椿は藪で咲く
消火器のスペア確認怠らず
茶柱を倒さぬように飲む朝餉

鳥取県　土橋睦子

墓参り雪が降るのでまた今度
意に添わぬ日も稀にある咳くしゃみ
空っぽになれば聞こえる川の音
グローブが戸棚で硬くなっている
株下落ハハハと力なく笑う

鳥取県　新家完司

とんとんと弾む会話に陽がそそぐ
下駄箱に下駄があるから珍しい
春の陽の残照嬉し種を蒔く
偶然の出会い話に花が咲く
ワンテンポおくれて届く老いの耳

鳥取県　石尾かつ乃

何の苦もない顔をして歯を磨く
言い訳はよそう桜も咲いてきた
九十の父がときどき幼子に
小さな春見つけて嬉し蕗の薹
春日和どう過ごそうかまず掃除

鳥取県　田村きみ子

鳥取県　下田茂登子

私の影がだんだん薄くなる
お隣の粗大ゴミとはよく笑う
向き合って何の会話もない夫婦
時どきは死者の悪口言ってみる
喜劇のように別れ話をする夫婦

鳥取県　羽津川公乃

テレビにも飽きてブラブラ三千歩
それなりに多忙診察券の数
予防注射は何だったのか風邪五日
申告書の手引き細字の不親切
孫の目に素敵な祖母を残したい

倉吉市　野口節子

賞味期限ぐらい何じゃとおばあちゃん
日本の心に浸る和紙の里
二番手を走る賢明かも知れぬ
言葉尻とらえて夫小うるさい
気力満々されど五感がぶれ始め

倉吉市　松本よしえ

黒めがねマスク外せば我が息子
割当で老人講座ききに行く
若蟹と名前を変えてデビューする
化粧品の匂いただようジャスミン茶
遠く来る息子が好きなぶり大根

倉吉市　牧野芳光

寂しくて虎落笛吹く雪女
缶蹴って帰る寂しい音がする
騒音も春の空気によく弾む
フリージア百本活けて春を呼ぶ
遺された家思い出と住んでいる

倉吉市　淡路ゆり子

つなぐ手に弾みがついて唄になる
つぎはぎの障子に亡母を偲ぶ冬
親孝行末期の水をしめらせる
椅子取りに負けて故郷へUターン
この国も水の無い日が徐々に来る

米子市　林瑞枝

シンデレラの衣擦れ静か春の風
筆を持ち式部となって梅さくら
白内障は全治し連峰が綺麗
てのひらの愛の線路を走る貨車
夕陽さす離れ家ポチの指定席

米子市　鷲見正子

好きだった汚れちまった雪印
義歯にガムぐちゃぐちゃになる自尊心
ぐちを聞く息子のやさしさにハッとする
要介護無口になったお義父さん
木枯らしに負けるな老いた一輪車

塩の町しばしアフガン忘れさせ
トンネルの中をどんなに照らしても
栄転へ見知らぬ街が好きになり
先の先見れば地球が燃えている
テロリスト　レッドカードを持ったまま

米子市　中村金祥

釣り上げた魚としばし話し合う
浜の松風父母の声のせてくる
流木が身の上語り合う浜辺
すばらしい友と出逢ったまわり道
太陽にピチピチ光る魚たち

米子市　澤田千春

雪の日は呪文のように待つ彼岸
来年もまた逢いたいな雪だるま
惜しみなく若芽にそそぐ母の愛
野育ちで薬嫌いに生れつく
神代からまつりの好きなヒト科族

米子市　木村富美子

七転び人の心が読めてくる
歳月という薬に任す時がある
火花を散らす癖もっている国境線
妖怪を祭神にする町おこし
お祭りの調べで白寿見送った

米子市　野坂なみ

老犬がやるせない目で待っていた
半袖で雪像を見るティールーム
祭屋台のメニューが替わるソーセージ
昔ほど祭太鼓がはずまない
アセチレン匂いも遠い宵祭り

米子市　中井ゆき

恋の予感胸の振子が鳴りやまぬ
離婚とは金がいるもの痩せるもの
好きだけど母を残して嫁げない
放されて見返す意地のダイエット
傷ついた心に母の愛が染む

米子市　永井三津子

駅までを亡母と歩いた高架下
芯まで冷えて百円バスを待っている
待つ人もなくて冷たいドアのノブ
仏飯が固くなってる御免なさい
燃えつきるまでろうそくの傍にいる

松江市　川本畔

最後の祭り生前葬を考える
散財の癖が直らぬ年金日
鬼の居ぬ間の洗濯をする亭主
針ほどの噂が棒になる怖さ
スキップで春の便りがやって来た

松江市　銭山昌枝

出雲市　岡　あきら

ひと山を越しブレーキを確かめる
魚屋さんのエンジン音を当てる妻
飛んでくる鶯がいて庭の梅
今月で終りですねと集金人
節分の豆転がったまま春に

出雲市　石倉芙佐子

とおせんぼしても旅立つ浅い春
現し世にぽうと生れる白い蝶
一筋のピエロの涙見てしまい
菜の花にうもれて弾む女の子
女の泪檜舞台にまで上がる

出雲市　小白金房子

おみくじを結ぶ農婦の太い指
かじかんだ手に搾乳の暖をとる
牛舎の灯消していちにち無事終わる
冬眠の夫婦へお茶の客が来る
凡人の心で綴る農日記

出雲市　城多喜

我が儘を通した道が狭くなる
ぐつぐつと胸でお鍋が煮えている
好きなんてさらりと言える事じゃない
ちょっとだけ嬉しい事があり満腹
年輪の神にいただく皺の数

出雲市　青山久子

先頭の好きな人には道ゆずる
ずっとずっと騙してほしいお月様
手の中に忘れてならぬ日々がある
ゆっくりと眼鏡を拭いて返事する
つれそうた鬼と福豆たべている

出雲市　園山多賀子

昇華して亡父八度目の干支の春
修羅越えて孤高の着地確かめる
一徹を糧に卒寿を生き伸びる
気紛れに誇張してみる笑い皺
皺しわの大根漬けて背を伸ばす

島根県　多々納テル子

行き帰りまだ続いてる立ち話
障子開け長い緊張ほぐす庭
お日様の笑顔待ち侘び冬ごもり
小さな春犬が嗅いでるふきのとう
用心は口ばかりです体重計

島根県　森茂美

まだ固い蕾だそっとしておこう
同室の友に済まない退院日
供え物山の鴉が見ているよ
耳の痛いはなしは知らぬふりをする
見渡せば黄砂が包む日本海

倉敷市　小野克枝

変化球受けて返して凡夫婦
いつからか手紙子供のことばかり
韋駄天の父がバリウム飲んでいる
集団の蟻は仁義を知っている
軽軽と受けて穴から抜けられぬ

倉敷市　井上富子

もう少し女でいたい白髪染
大好きな服が小さくなっている
トリプル安　氷雨ムードの日本丸
シャッターの下りたかつての繁華街
経済は氷河地球は温暖化

岡山県　富坂志重

終章へ一人漕ぎ出す老いの海
つかれるとすぐ念仏が出てしまう
年齢の深さか腹が立たなくなり
思い出に若き日のままかぎを掛け
今日は足五体どこかが不足言う

岡山県　大石　あすなろ

ドアチェーンゆるめて春の風を待つ
携帯で通話エリアを広くする
末席でリラックスする酒とろり
仲のいい友に逝かれた後遺症
気配りの嘘なら許してあげましょう

竹原市　小島蘭幸

無念無想私の順はいつか来る
真っ先に風邪引く鬼となりたるか
蜘蛛の巣よ蜘蛛は芸術家であるか
犬も僕も静かに一日が終る
風邪薬素直に飲んでいる鬼よ

竹原市　石原淑子

お浄土に蝶々誘う花筏
二三枚キルト地買うて満たされる
善し悪しと見かけに迷う空しさよ
七光りやれぬ負けん気だけ持たせ
梅園をならんで歩くそれだけで

竹原市　古谷節夫

正論が衝突してる眼鏡拭く
CMに負けない今朝の味噌の味
竹籠に採れた野菜がよく喋り
今日の罪ゆっくり落す湯はぬるめ
蜘蛛の巣が揺れてドラマが動き出す

竹原市　時広一路

百歳の元気晩酌すると言う
年千回越えて薬とお付合い
星屑が落ちて来そうな無人駅
退屈へどのチャンネルも気に入らぬ
潔く従っておく多数決

ちゃん付けで呼ぶと伝わる人間味
霊場や人間本来無一物
舗装路になりふるさとの詩が消え
名を捨てて実を取り今日も無事に暮れ
師は在す心の中に凛として

竹原市　森井菁居

男だって感極まれば泣けばよい
閉塞な時代なみだを出すもよし
フリージアよ百合の遠縁かも知れぬ
ユニークな神事おねだり姫も出る
聞くだけのわたしの耳が赤くなる

広島市　森田文

支えるのは人気引っ張るのは不景気
支持率が戻って並の上になる
納税拒否したいＢＳＥの処理
着ぶくれて四角に歩く妻の背な
妻老いて昔ばなしを繰り返す

広島県　藤解静風

万歩計つけると歩幅広くなる
時間給命の切り売りかも知れぬ
甘い汁がとっても好きな族議員
本当の美人心も美しい
許せないことをしていたのは自分

宇部市　平田実男

損をした気分で眠る宵っ張り
タイミング迷った隙へ交通禍
美人ではないが愛嬌なら負けぬ
やって来た街の文化と薄情さ

熊本県　高野宵草

さくらさくらちやほやされて散っている
乱暴な言葉と思うご勝手に
安らぎを捜し求めた恋いくつ
真っ直ぐな一本道を歩いてる

愛媛県　中居善信

人は皆等しと声をかけ散歩
九十回建国記念日を迎え
心電図異状はないと主治医から
鏡川沿いを数えつ一万歩

高知市　北川竹萌

出発を見送るだけの無人駅
雪解けと競う蕾が背伸びする
土壇場で真一文字の口結ぶ
うたたねは炬燵で春とたわむれる

弘前市　小寺花峯

春一番攫ってくれた愚痴あまた
雪解川自由一途にケセラセラ
川端の春うるるんと万歩計
移り香の女を見返る繁華街

弘前市　岡本花匠

深呼吸四季折々の気を貰う
四方海旬の刺身に舌鼓
四隅見て寺の掃除を褒めている
四国巡礼宗派を超えた旅路

弘前市　中山雅城

喜寿過ぎてやっと夫婦の味がでる
体調が良くて薬を飲み忘れ
髪染めて輝いている里の母
人様に言えないような悩みごと

十和田市　阿部進

美人なら妻になどなるはずがない
リストラが妻にもあれば面白い
選り好みしても知れてたハズバンド
五階では逃げ場がないよ鬼は外

横浜市　山下省子

若ぶったつもりが座席譲られる
バーゲンに財布の口がそっぽ向く
恥かいて他人から貰う善の数
夫婦して元気が取り得今日も留守

横浜市　田中笑子

麻痺の手で書いた手紙に胸打たれ
携帯をお守りにして気まま旅
墓出来てどうぞと夫婦ゆずり合い
感覚も動作も声も喜寿になる

さいたま市　八田敏

鈍行は走る気楽な一人旅
健やかにはぐくむ児等は五日制
老いひとり料理本見て昼仕度
カタカナの海へなじめぬ老夫婦

富士宮市　渥美弧秀

怒られているは脈あり気にするな
テロ以来飛行機乗るも命がけ
生真面目が私の取り柄ご存知か
親しみを込めたつもりがセクハラに

滋賀県　中宗明

嘘　涙　別離　政界も演歌調
めでたさや今年は喜寿になる昭和
宇宙食あれば助かるひとり者
糖尿の守護神大根とモロヘイヤ

京都市　都倉求芽

じじとばば近頃ヘマを自慢する
変人じゃなくて一番まともかも
国を盗るうじゃうじゃうじゃと族の顔
キッチリとここらで国をキッチリと

亀岡市　井上森生

ショーウインドー春を先どる淡い色
満開の桜と競う姥桜
桜吹雪浴びて一服串だんご
初初しい背広制服ターミナル

堺市　源田八千代

鏡餅食べ終る頃梅便り
お年玉遣い終った子のさいふ
アスパラを抱いて眠るか冬の土
春の気の動く頃から浮かれ出す

堺市　山本半銭

茹で上げた蟹に飲んべえ睨まれる
割勘へ少し飲み過ぎたと思い
服を選る妻の真剣見てしまい
春の服嬉し切なし千尋色

堺市　神原文

空っぽの心に欲が湧いてこぬ
ぼかし絵にいつも浮かんでくる笑顔
兄弟の絆さだめの顔かたち
杉花粉美人も顔を覆う春

堺市　宮本かりん

路地裏を通れば温い風に逢う
缶ビールが食欲そそる春の膳
きゃらの里の暮しにも馴れ春近し
好きなものばかり並べて独りの膳

堺市　黒田真砂

寂しさをいつも心に連れている
三拍子揃ってるのにまだひとり
大好きは何度聞いてもよい響き
暗闇の中で携帯鳴り響く

吹田市　大谷篤子

一坪の畳これだけ俺の城
遠来の友もてなしてとろろ飯
距離おけば心の奥が見えて来る
追うように追われるように老いてゆき

吹田市　太田昭

この歳で煩悩の海まだ泳ぎ
厳格な父も綻ぶ支那の夜
古日記青雲の字が痩せている
お隣の芝生良く見え大リーグ

吹田市　野下之男

パソコンを妻へごほうび定年日
大企業大病院にある不信
くびだけの挨拶声に出しなさい
山と海称えた校歌消えました

吹田市　瀬戸まさよ

時々の弱気を叱る影法師（入院）
嫌味でも丸く言うから怒れない
時効にはならない罪を背負ってる
テロよりも平和がよろし冬五輪

吹田市　石原靖巳

傷ついてワインの赤に癒される
鬼の面ついた豆買う福よ来い
本積んで眼鏡かけたら眠くなり
般若の面女の胸の中なるか

高槻市　井上照子

バイク買う声が流れる昼下がり
日溜りに影遊ばせる丸い背な
地域の絆さらに深まる震災忌
巻き舌が肩で風切るネオン街

高槻市　左右田　泰雄

大正のロマンを残す中之島
落葉焚く僧の背中に舞う粉雪
割り勘と知らされピッチ速くなる
大騒ぎしたあと玉虫色で決め

高槻市　生田　義一

冬の底抜けたのか梅ふくらんだ
二世帯を繋ぐ階段音静か
階段は喜怒哀楽をよく奏で
新世紀カタログだけで店を開け

豊中市　樫谷　郁子

陽だまりに座る閑なし貧乏性
ガラス越し春遠からじ陽の温さ
御破算で大正生れ玉はじく
ひろうすと焼餅十三土産です

豊中市　岸田　知香子

手作りの仲睦まじいお雛様
許されてハッピーエンドの花が咲く
玄関に可愛い靴が一つふえ
白いバラ垣根をこえてうちで咲く

豊中市　松岡　久留美

節分の鬼が駆け込む寺がある（吉野・金峰山）
国産と騙す大豆は鬼が知る
名の如く誠に生きた友悼む
友おくり落ち込んだまま梅の春

豊中市　湯浅　馬洗

遠出する日は携帯を持たされる
ハムスター静かに肥満しています
幸運を招く水晶撫でてみる
振り向けば涙がこぼれそうになる

寝屋川市　森　茜

福の豆大へんな数目の前に
とっておきの新茶を入れて有難く
目を見張り息詰めて観る妙競技
ふと気が付き夕食後のくすり飲む

寝屋川市　柴田　英壬子

口出しは出来ず独りで胸痛め
親娘喧嘩時の氏神だった自負
双方が勘違いした金一封
いきさつはどうあれ頭下げておく

寝屋川市　冨山　ルイ子

退院後まだ出ぬ酒のゴーサイン
醒めやらぬはたちの夢を古希で追い
人文字の点の一つに徹しきる
注意され沽券ぎしぎし軋み出す

寝屋川市　酒井　勇太朗

寝屋川市　堀江光子

風邪引きが妙に隣に許りくる
かなしみを埋める土の他に無し
雪しきり吐くもの天にある如し
隅っこに母の花壇は葱も植え

寝屋川市　坂上高栄

少子化を助けてほしいにしんの子
餅撒きに出合った今年縁起よい
あれからで通じる歳になりました
鳥帰る別れを惜しむ雁の声

寝屋川市　北岡波留吉

青春を爆発させた甲子園
ジャングルで祖国偲んだ暗い青春
ペンを武器に不正を暴くど根性
軽い腰重宝されてボランティア

枚方市　森本節子

何本か増えてる医院の忘れ傘
いい日和ご無沙汰勝ちの土手歩く
コードレス身軽になって余生ゆく
春の旅プランは友にまかせきり

枚方市　二宮山久

紅梅も白梅もよし初節句
オリンピック期待大きいプレッシャー
幸せをちょっぴりかみしめ初節句
初孫の笑顔を浮かべ帰路につく

藤井寺市　楠昭子

ぐずなりに一人で渡る橋がある
それぞれのくらしが見えるゴミ袋
疑いも悩みもなくて味に欠け
燃えるものあってきらきら目がきれい

藤井寺市　鴨谷瑠美子

雪国は善い人ばかり癒される
希望の芽勿忘草の横に出る
手袋の過去洗剤につけておく
一歩の差発車のドアが閉まるなり

守口市　井上桂作

古希をすぎ肩書すてて丸くなり
狂牛の保護を逆手に雪印
お互いに昔の事は内緒です
好きなほど飲んでお酒が百薬と

守口市　結城君子

どっぷりと時をかせいで春の風
低い目の血圧計を手離せず
ウツ抜けて弥生の雲にとび移る
残照のような余命でありたいな

大阪府　籾山隆盛

てっさにも一万円と一千円
睨みが効かん寄る年波の鬼瓦
一式を揃えてからの入門書
俗界を二つに仕切る高い塀

大阪市　津守柳伸

やるだけはやった不敵な面構え
東風吹かば青息吐息申告期
使い捨て時代を愚痴にする旧家
ウィークデーは手持ち無沙汰の人力車

大阪市　松尾柳右子

公園の花をテントも愛でている
上天気花に集まる人と蜂
母さんの背中みつめてつまみ食い
ゲーム機にスリル求める繁華街

大阪市　寺井東雲

正月は大吉のくじ多く入れ
外出着妻の関所を無事に抜け
風邪の初期紅茶のウガイ効きました
青年に戻るためにも気を若く

大阪市　川内叭笑

春蘭の見方が変わる恋もある
泣かされた想い出深い学舎消え
春弥生どこへ行くのか自民党
思惑がからむ男の夕餉時

大阪市　川端一歩

妻連れて春の神戸へ忙中閑
傷癒えぬままに不信のえひめ丸
勝者より負けた背中にあるドラマ
女性アナ萌え黄の胸がちと眩し

大阪市　町田達子

こち吹かばを口ずさんでる梅便り
雨の日も好きなことなら出掛けます
ユーモラスな鬼が顔出す古都の寺
血液型の話に花が咲く茶の間

大阪市　榎本舞夢

初夢を見る間ないほどよく寝てる
不揃いのリンゴの味に癒される
鬼やらい不況風をも吹き突ぼせ
寒い夜のラーメン屋台別世界

大阪市　中澤伽羅

決断をしてから易を見てもらう
憂さ埋めてジグソーパズル出来上がり
寒くても食べたいものは買いに出る
土曜日になると寝過ごす癖がある

大阪市　榎本日の出

試されているのだろうかこの会話
楽天家そんな自分に救われる
自分でも感心してる物忘れ
この町もゴーストタウン目の前に

大阪市　中村叡子

冷蔵庫整理今夜は八宝菜
関西弁まかり通った痛快さ
恐い子と弱い男の変な国
国会中継矢張り総理もメモを読む

大阪市　杉澤汀

傷いやすつもりの酒が肚にしむ
リストラの話になるとみな無口
ペイオフへ心配なもの何もない
肩ごしに覗く他人の夕刊紙

大阪市　清水絹子

雪をいただき今年も無事な富士の峰
無視されるよりは重荷もまかしとき
老姉妹あの日に還る寡婦同士
足音に逃げたい夜の裏通り

大阪市　玉置英子

字を知らぬ孫すらすらと絵本よむ
永い旅してきましたと川の声
あやかって今年増えそう愛子ちゃん
かぞえてはみたが福豆八十個

大阪市　中田あい子

雪の中出た座禅草凛として
菜の花が阪神キャンプ大歓迎
愚痴るまい黙って歩いて来た道を
白壁に紅梅はえて城の早春（はる）

大阪市　岡本久峰

五座消えてトンボリカニが大手振る
生き残り賭けてのれんの若返り
外交下手駆け引き知らぬもやしっ子
検診を受けてポックリ逝った友

大阪市　清水利武

春の海潮を吹いてる鯨の子
梅咲いて枝で鶯恋してる
安くても肉は恐くて手が出せぬ
身勝手な母だよ産んだ子を殺す

大阪市　長谷川会美

一坪の母の菜園春告げる
春の陽に公園デビューお砂場で
奥の路地通って通う舞扇
三回も着替えて試着決まらない

大阪市　津村志華子

やわらかい陽差しが包む猫やなぎ
タックルに白旗上げる孫の守り
弥陀の手に縋る願いの朱印帳
菜の花の風とたわむる道祖神

大阪市　安達はじめ

働いている長生きは許される
強運に乗ると相手が小さく見え
幽玄の世界に響くシテの声
参詣を導くマイク寺の春

大阪市　大塚節子

旧暦にこだわり独り雛の膳
ひとめぐり違う若さに一寸妬け
花嫁を笑顔が囲みハイポーズ
花の雨一寸こたつに入ってる

窓際の野心葬る肩たたき
惚れられた仮面に苦悩する素顔
仲の良さペアールックでちょっと見せ
満足をそっと握ってフルムーン

大阪市　鶴田遠野

子が巣立ち鍋も寂しい箸の数
勉強はせずに祈願は他人の倍
健康食あれこれ聞いて食べすぎる
姑を嬉しくさせる嘘まぜる

大阪市　奥村五月

お人好し話題ばかりを作ってる
不祥事が闇から闇へ消えて行く
本当の闇夜を知らぬ子供達
病院食になれて血圧正常値

池田市　岡本吉太郎

カレンダーに妻だけが知る赤いマル
妻肥満猫も肥満の我が家系
人形になった或る日の娘が嫁ぎ
華やかさ夕餉に盛った妻の知恵

和泉市　西岡洛酔

マゲモノにチャンネル合わす憂さの日々
ほんにまあアホのサカタ似とは言うが
老人は金持ちセンセ誰のこと
いい国だ神仏数多同居だぞ

泉佐野市　山本蛙城

物忘れだけは互角の老夫婦
寿命より持ちそうな歯に入れ替り
生きる張りだった吾子もちりぢりに
一人残って生きる不安も八十路坂

茨木市　島元ふみ

寒いのに朝の散歩を犬が待つ
解釈を変えて身内に甘い処理
採決へ議長眼鏡を掛けかえる
妻の旅ちょっとおしゃれなサングラス

茨木市　藤井正雄

午の春六十路を古稀に衣替え
国会で狐と狸もめている
五輪来て我が家に戻る和の話
アフガンに黒赤緑新国旗

交野市　山川日出子

赤ちゃんがけたたましく泣く夜の闇
私より孫が受話器を早く取る
二人目の孫に追われて年が明け
病院中回って薬山になり

河内長野市　植村喜代

ウルトラマン地球の戦火消しなさい
踏んばろうまだまだ私見捨てない
自爆テロ少年恐くないと言う
アフガンに降る雪ダルマさんになれ

岸和田市　岩佐ダン吉

ペイオフで通帳の数かぞえてる
家計簿はマイナスへそくりが残る
割引きにつられ万円札消える
解体へ家具のすき間で仮ずまい

岸和田市　藪野けい子

口だけは達者手足は別の人
遺伝子に負けない頭子に期待
刑事より鋭い目付き犯罪者
いとこ会遺産目当てに勢揃い

岸和田市　長谷川呂万

春風が凋んだ夢を膨らます
春の足音聞こえてこぼれ種目覚め
こぼれ種の芽生え思わずありがとう
脳細胞へ届く水仙のよい香り

神戸市　山口美穂

青信号だめ押すように右左
優しい人おとなしい人勘違い
百組百様みんな味ある老夫婦
近況一行思いふくらむ年賀状

神戸市　池田善守

カラフルに干して団地は栄えてる
開運の神は稼ぎを見逃さず
二代目の栄えよろこぶ庭の石
かわいさが過ぎて嵌った水たまり

尼崎市　的場十四郎

髪の毛は大方会社へ置いて来た
不摂生不慮の長寿と言う米寿
自分史を残した父が羨まし
晩酌の相手はテレビ見る背中

三田市　北野哲男

甘酒の窓越しに雪しんしん
ハンチング老いを隠して散歩する
宣伝につられ見に行くＵＳＪ
セールスの電話にのらぬ受け答え

西宮市　井上松煙

年賀状来ればやっぱりいいものだ
土割って芽を吹く春がうれしくて
土いじり無心に動く母の背な
響き合う二人に国境線はない

西宮市　刈田泰司

里帰り父は孤独を強いられる
このごろはなるべく撮られないように
私にだけ春を告げくる杉花粉
私が昼寝をすると犬も寝る

西宮市　緒方美津子

初まいり合格祈願親子連れ
祖父創立不況の風に追いつけず
木簡に古代のロマン見えて来た
七草を摘んだ昔が懐かしい

西宮市　菊池トミヱ

姫路市　古川奮水

たれ焦げる換気が誘う焼とり屋
節分の鬼に我慢の衣装着る
寿し片手北北東へ丸かじり
還暦の同期と歌うデッカンショ

兵庫県　大谷幸次郎

戒厳令如月の雪降っていた
ぬけぬけと来世も一緒などと言う
畑仕事眺めていては捗らぬ
本音しか言えぬ同士の二人です

大和郡山市　坊農柳弘

花まつり今年の桜せっかちで
啓蟄の風さわやかに猫柳
時は春人恋しがる猫柳
絵手紙の柿の葉眩し法隆寺

和歌山市　山根めぐみ

スイトピーこれが私の愛の色
涙ポロポロ誤解しないで花粉症
紫に染めよか白い髪の私語
生き上手無の掌を見せ歩く

海南市　谷口義男

精一杯老後を飾る一行詩
体力は落ちても口は衰えぬ
少子化で誰が墓守り引き受ける
忌憚無い意見に何処か含む針

和歌山県　中後清史

燃えている手紙を開けて火傷する
弁解を流す蛇口がよく騒ぐ
回転のいい部下持ってやり難い
スケジュール組んで明日への羽繕い

鳥取市　西村黙光

春闘の流れを変えた不況風
不況風ドコ吹く風のコマーシャル
酒呑みの底なし沼に大蛇棲む
家系図に酒呑童子の血が流れ

鳥取市　冨山檳榔樹

露天風呂こっそり覗くおぼろ月
祝盃に浮かぶ満月花明り
手のひらの地図が進路の羅針盤
生きざまは浅瀬に揺れる老いの葦

鳥取市　杉本孝男

シンプルな味だ病後によく馴染む
すずらん灯のある街角に梅香る
将軍を二人名乗ると世が騒ぐ
主婦三人寄ると噂が跳ね回る

鳥取市　春木圭一郎

花明かりきみの笑顔に乾杯だ
めくるめく梅から桜ああ日本
ライバルへ花を持たせる一手指す
花形を目指し早起き努力する

考える時間がないと嘘も出る
恐々と呑んでる歳となりました
幾たびも窪地にかがみ生きてきた
起立さすさせぬを決めるのは利害

鳥取市　夏目健一

墓掃除こころすっきり洗われる
人間の芯の恨みは火の玉か
鼻歌のリズムに乗ると踏み外す
フリーター浅い仕事で生き延びる

鳥取市　山本益子

わかち合う痛み友情花開く
合掌をしながら遺産の額はじき
移植して救える命なら受ける
目を休め頭休めに森に行く

鳥取市　田賀八千代

散るもみじ風化さすには惜しい色
一晩で看板変える街の顔
逢って来た匂いかくすに四苦八苦
ハイポーズ二度と出来ないピントぼけ

鳥取市　前田一枝

遅刻した訳をマスクと低い咳
手をつなぐ輪の中にいる恋敵
位牌堂やがては眠る位置を買う
友達も老いたしばらく名が出ない

倉吉市　最上和枝

愛子選手誇り新たに記録出す
コウノトリやっと御所への道覚え
暖房中屋根のツララが美味しそう
晩婚化四十で子抱くパパが増え

倉吉市　猪川由美子

世界中とりこにしてるオリンピック
愛子さま桃がほほ笑むお食い初め
味噌汁にこめた命の根野菜
禁煙のパイプもだえた甲斐あった

倉吉市　山中康子

四月馬鹿うそ言った事悔いている
高校入試終わり泣いてる絵馬もあり
以下余白ハローワークに職が無い
新品同様成田離婚をした夫婦

米子市　神庭詩郎

寒さに耐えて笑顔で咲いた寒牡丹
童謡を歌って気持若くする
肩書きを一つずつ辞め川柳に
庭がありピアノがあって猫がいる

米子市　門脇晶子

改革のK点むかい風よ吹け
不況風豪雪知ったことでない
生きざまを酒で洗っている命
住みなれて鍵を忘れている平和

米子市　白根ふみ

真心も器に盛って春の宴
待つ事に慣らされ女風になる
大声で笑って肚を読まれてる
花の宴散り際ばかり考える

米子市　木村春枝

贅沢を削り貧しさ馴れてきた
葬列を追いこしてゆくなみだ雨
七回忌好きだよ今もおばあちゃん
煩悩を背負いむかえる七回忌

鳥取県　山本正光

過信して化粧はぶけば笑われる
巻舌で誓い啖呵を切ってみる
公務員そろそろ尻に火がついた
口下手でたまに得する事もある

鳥取県　橋本多哥由

亭主関白妻のパワーに押されぎみ
徹夜の子辞書を枕に夢を見る
駄馬でいい老いても夢を追いかける
初春に小さな夢が走り出す

鳥取県　近藤春恵

スタートのおくれを神に試される
駆落ちがスタートだった金婚日
目をかけた孫に置き去りされる老い
村中で一軒だけが国旗立て

鳥取県　上田俊路

人生もいろいろワタシ中位
ふり出しに戻れず上がり見えぬまま
この人生世界史変えることもなく
この先も我が道気のむくままの道

鳥取県　垰寛子

宿命の苦と知りつつも愚痴が出る
しきたりを少し崩して豆をまく
蹴り上げた足がひきつり歳を知る
働いた手の皺山も谷もあり

鳥取県　村上信子

人情に溢れ貧乏しています
子供より親に聞かせる人情物
返答の一つにもある人情味
湯気の川これ不公平だなと思う

鳥取県　吉田孔美子

スポットを浴びて脳味噌真っ白く
何もかも自由になって不足言う
姑に仕え嫁に仕える世のならい
露天風呂湯気の向こうで安来節

鳥取県　太田幸枝

花梨酒でのどの痛みをやわらげる
別れぎわ何か度忘れ言いそびれ
選挙戦八方美人やりこなす
欠点は食いしんぼうでよく太り

鳥取県　権代康女

鳥取県　西川和子

にやにやと人の意見を聞き入れぬ
顔ぶれが変れば違う意見なり
したたかに生きよう先は見えている
憧れの君にも皺が目立ちだし

鳥取県　乾喜与志

妻逝って五十五年のさびしん坊
八巡目終えて巳年の惚けもよう
呆けるのもベテランになり面白い
惚けながらテクテク登る峠みち

鳥取県　津村八重子

しめかざり焼くトンドウの火の温さ
八十路生き色々あった過ぎし道
平和だなあふんわり盛った米の飯
つるつると胃の腑もおどるそばの味

鳥取県　国森武子

子も孫もみんな出てゆき雪の音
よもぎ摘む籠は出来たよ春よ来い
体中に知識つめこむ留守居番
久しぶり家にいる日は生きかえる

鳥取県　西原艶子

跡もなく涙を干した春の風
満月がきっと証言してくれる
雑草のただ一輪の花でいい
地図のない旅に迷路が多すぎる

松江市　佐野木みえ

風花が舞って別れが辛くなる
雪だるま二つ並んだ雛の宵
まな板の魚横目に包丁研ぐ
絵手紙のフキノトウから春が来る

松江市　安食友子

甘ったれが追いかけている玉の輿
夏みかん捨て子にされて頷いた
走る気にストップかける鼻濁音
めらめらと私語が燃えだす風の中

松江市　小川注湖

あいまいに焦点ぼかし共白髪
箸箱が大小並ぶ三世代
同窓会鼻たれどうしネクタイだ
満月を抱きしめひとり露天風呂

松江市　津川紫晃

温い輪でゆっくり小骨抜かれてる
平凡という幸せに酒があり
風下で春の匂いをじっと待つ
歯を磨く時は真面目な顔してる

出雲市　伊藤玲子

過去捲り書き直したい一頁
合格を告げる声から虹がたつ
庭下駄の先から春の声がする
いらいらをぶつけた山に嗤われる

出雲市(故)　板垣草丘

三十年昔話に馴染む句碑（緑之助句碑）
水鳥も鮒釣る人も今無風
空調の音を残して寝静まる
肥桶を軽くかついでいる構図

出雲市　富田蘭水

鬼は外隣より大きな声をする
私が鬼門か福が素通りする
塞翁が馬に私はかけている
充電期春の野望を秘めている

出雲市　吉岡きみえ

明日に向く跳躍のバネよく弾む
ひとりでもごちゃごちゃ物が多すぎる
友達の句にはわさびが効いている
凶器はなくても他人を殺す口

出雲市　久谷まこと

ストレスの溜まった影は背を丸め
事なかれ主義ではいつかうとまれる
幸せの彼岸は遠く視界ゼロ
七癖のまだその上に悪い癖

出雲市　板垣夢酔

杯へひらひら桜禁酒告げ
サクラ宴風も飲みたく仲間入り
渡り鳥来年またと一巡し
酔いどれと歌ってサクラ良い日和

出雲市　小玉満江

両足のしびれ気にして酒をのむ
おだてられその気になった舞扇
雪おこし雷様のふれ太鼓
新聞屋あんた若いとすすめられ

島根県　榊原秀子

大社詣りみな神妙な顔ばかり
わたしの鬼へ力一杯なげる豆
春を待つ心へほろり梅ほろり
半分は明日に預けておくリンゴ

島根県　伊藤寿美

東京へ受験に行った桃の花
鬼遣らい亡父と話したくなる
子がくれた旅のホテルのロゼワイン
トランペットが響く神戸の鎮魂歌

岡山市　井上柳五郎

もう乗らぬカブへ付けないメ飾り
あちこちの体調不良老い加速
つれづれに開くアルバム友と会い
なさけなさ文明の利器扱えず

岡山市　川端柳子

泣き顔では招待状が書けません
日本人形とフランス人形競わせる
チイチイパッパ大事なことは忘れます
駄馬の明日愉快な仲間にゆだねよう

家業励む茶髪にもある心意気
ぬかるんだ道で拾った処世術
手話一つひびかせ音のない世界
眼鏡また忘れた元に戻ってみる

岡山県　福原悦子

髪梳いて女は春に炎を放つ
人脈につかまりながら綱渡り
袴を脱いでひとりの北の窓
化け方を学び一日楽しまん

岡山県　山本玉恵

人間不信迷いばかりの中に居る
時流には素直に乗っていく積り
煩悩を捨てろ流せと神の声
衣食住足りて戦の国思う

岡山県　矢内寿恵子

定年後をたしかめに行く故郷の水
肩書きはなかったけれど歯が丈夫
ぼっくりを願い雪の日も鍛え
日曜大工短くなったのに合わせ

竹原市　三宅不朽

絵手紙がたまり柩が重くなる
あいまいな態度迷路が抜けられぬ
火を宥め風をなだめて来た花野
昭和史を繰れば還らぬ亡父に会い

美祢市　安平次弘道

（先月分）

遠慮してこない孫にもお年玉
薬運ぶナース女神のように見え
夫逝って部屋の広さが孤独呼ぶ
臨終に間に合わなかった苦い悔い

堺市　黒田真砂

第9回 鳥取県民文化祭主催事業
第26回　鳥取県川柳大会

と　き　5月26日（日）　午前10時開場・締切12時
ところ　米子コンベンションセンター「ビッグシップ」6階
ＪＲ米子駅下車徒歩3分　℡0859(35)8111
兼題と選者（各題2句、席題なし、開会13時20分、披講14時）

「待　つ」	谷口次男　選
「　野　」	森山盛桜　選
「まつり」	上田宣子　選
「大きい」	林　瑞枝　選
「　熱　」	小西雄々　選
「実　る」	小林由多香　選

表　彰　鳥取県知事賞他
会　費　2,000円（作品集、昼食呈）
欠席投句　1,000円（4月30日締切、用紙自由、作品集呈）
事務局（投句先）〒683-0105 米子市葭津1712-1
門脇かずお方　第26回鳥取県川柳大会
実行委員会宛　　0859(28)8078
主　催　鳥取県川柳作家協会　鳥取県
鳥取県文化団体連合会
後　援　米子市　新日本海新聞社

自選集

人生の折り返し点喜寿祝う
君と小蟹　灯台まさにハイヌーン
孫と行く春雪桃花赤ずきん（上巳節句）
惚けてきた妻に通じぬ四月馬鹿
恋文を候文で書いてみた

橘高薫風

過去の嘘隠す仮面が外せない
水に流した心算へ愚痴が胃に溜る
不器用な癖にこまごま口を出す
ウフフフと笑って妻の変化球
鼻の汗生真面目過ぎる自己主張

阿萬萬的

平均寿命ばかりが延びて少子国
ドングリの一歩抜け出るためあせる
鼻先へ人参駄馬の無我夢中
頭上注意　飛行機真上を飛んでいる
この世の栄華沈め海峡春の潮

石川侃流洞

美人の湯何処にも美人見当らず（ほの字の里）
山の中緑の中に梅開花（森やかの郷）
霊峰の恵み季を知る贅深し（本栖湖）
滾々と滔々と湯のけむり（鐘山温泉）
霊峰富士に抱かれ波しずか（富士五湖）

板尾岳人

虚言放言愚弄が集う永田町
NGO　ODAの記事で満ち
長口上　祝いの酒が冷めてくる
負けて勝つことを知ってる爪楊枝
自尊心捨てたら後に何がある

榎本吐来

雨の日は雨の音聞き茶一ぷく
石ぬれて石と語るも春の雨
山茶花が散るだけ散ってはかずいる
片雲の風にさそわれひとり旅
かけめぐる芭蕉のような夢見たい

越智一水

冷静になればあっさり解けた謎
背かれて人間不信深くなる
一徹な父が崩さぬマイペース
心ないひと言人を傷付ける
この坂も途中で休み年齢と知る

河井庸佑

ほどほどの夢で余生をふくらます
出鼻くじかれて味わう挫折感
学ぶほど浅学菲才が悔やまれる
乗り換えも今更出来ぬ夫婦舟
また一つ歳を貰って春が来る

川島諷云児

道問えばみんな振り向くランドセル（新入生）
ときめきの春へ桜が咲き誇る
四国路に春を彩る遍路笠
似顔絵を丸くまあるく描いておく
明日散る花懸命に媚を売る

木村あきら

極楽へ行く道を説く法話聞く
仏壇に花さし替えて独り棲む
頂上に佇み極楽の風を呼ぶ
九十余年とっても長い道だった
波風を立てないように気を配る

工藤吟笑

美しい女だ思わずふりかえる
辻曲るたんびに休む歳になり
機嫌よい笑い軽くて心地よい
春だ春だ電車もこころよく走る
電話機を思わず落す大ニュース

黒川紫香

満月を覗く児の椅子母の膝
師を越える鞭にも耐えた汗を積む
介護され昔の父権夢のよう
ストレスが脳と血管へと回る
黄泉の噂知ってた寺の風

小西雄々

豊作という作物の恩返し
酒の出る会は万障繰り合わす
富士山がくっきり見えて旅はずむ
予定表体が二つほしくなる
生真面目が隣におってやりにくい

小林由多香

旅人を好きで離れぬ駱駝の眼
土好きでだから裸のお付き合い
マフラーを貰ってからの長い道
スーパーで香りを自慢する苺
百円店で七福神が売れている

斉藤劦

母の愛少し異なる父の愛
其処其処で愛が異なる地球儀よ
幾つになっても忘れ得ぬのが母の愛
一生にチャンスは三度来ると言う
白寿まで届く梯子を買っておく

田口虹汀

父早世　足が痺れた経の数（学生時代回顧　5句）
売れるもの売り三遷の母に従き
計算尺くれた縁者を標とす
右脳が育たぬわけよ受験歴
冶金科の実習みやげ鉱山の唄

竹内紫錆

ネクタイも背広もナフタリン臭い
戦友が十指に欠けた住所録
ＩＴも葱もメードインチャイナ
血の騒ぐ地図がなかなか見つからぬ
表紙絵が塔誌に華を添えてくれ

玉置重人

冬抱いた炬燵の癖が背なにある
よく撮れた写真が何故か気に入らぬ
宿題と内職向かい合う夕べ
招き猫埃被って横を向き
水平線と話がしたい万歩計

月原宵明

無位無冠の父が待ってる春便り
じっくりと余生の夢を考える
大袈裟な話が好きな炬燵板
旅の恥置いてホテルの朝を発つ
約束を果たした朝のいい目覚め

恒松町紅

さあみんな起きて来なさい春の風
おばあちゃんの粗食が健康食の粋
金婚へ時効の愚痴をくり返す
もう一度念押しておくはずれくじ
いけまんなハハハ盃すぐに溶け

遠山可住

それからを考えながら手を洗う
長靴は雪が降る日を知っている
菩提樹の実を擦るのも信心か
悪人が集まる寺の奥の院
明日も生きる約束をして仕舞う

土橋螢

納豆の糸ぐるぐるとうまく切り
アカシアの季節小豆をやっと蒔き
春彼岸欠けた茶碗がまだ棚に
綿帽子またいいもんだ戻り寒
リヤカー引いておばさん花買うて

西村早苗

春が来た僕の残り火かきたてる
栄養士の子供の朝はコッペパン
別れ際のひと言妙に気にかかる
スミローの機能衰えまた転び
うまい具合に間隔おいて七五三

野田　素身郎

蕾固し無明長夜の闇の中
切々と雪の奏でる哀歌なり
徒然草の五頁ほどの停車駅
深爪をした日に届く黒い枠
今少し形見桜の尽きるまで

波多野　五楽庵

珍客を迎える用意花の里
さけも飲めずに芸なしで来た五十年
九十を以て貧乏閑なしが解ける
川柳の常道古い句をわたしは遺す
余生まだ負けぬ気でいる川柳人

藤井　明朗

葱坊主蝶を迷わす背くらべ
麦の芽はいじめにまけず天を向く
ひそひそと人事異動を語る隅
忘れたい傷が心の隅に棲む
物忘れだんだん命軽くなる

藤村　〆女

核の傘　自爆しそうで新世紀
タイミング良し携帯が呼んでいる
農機具もストレス溜めて愚図り出す
春や春　三寒四温救急車
大げさに騙されておく四月馬鹿

舟木　与根一

厄除けの心にしみる七福湯
厄除けを売るひいら木の手があつい
厄除けを仏にたのむ護摩供養
厄除けの巻ずし恵方に丸かじり
厄除けのぜんざい餅が温かい

芳地　裡村

運転すいすい法規苦手な美青年
大風呂敷好きな男で座を保つ
相思相愛二人に言葉などいらぬ
清濁併せ飲む彼は大物かも知れぬ
招待状人物考査だったとは

堀端　三男

冬眠をどこでしてたかホーホケキョ
乱れ咲き脇役果たすかすみ草
その時はその時うまい肉食べる
顔突っ込んだ以上男としての意地
そこは母娘口一ぱいに言うている

宮口　笛正

森下愛論

度忘れが続き孤独の影を引く
堪忍も忘れたままで黄昏れる
くつろいだ顔が揃えば金がいる
老いの恋春の苦味を一杯に
春や春私の影にドラマ置く

両川洋々

さようなら亡友よわたしも行く道だ
新世紀欠けているのは愛だろう
影法師君もリストラ恐いのか
泥縄の政治に明日が見えますか
千羽鶴このまま亡母の元へ翔べ

八木千代

艶やかゆるやかに老いふところに
結界とも知らずに何度でも跨ぐ
立つ鳥のあがき未練と思わない
対岸も此岸もたぶん似た景色
結界のあたり掃いてはいるのだが

八十田洞庵

剥落の石仏にも史実あり
せっかくの僕の夢みな獏が食う
芽の出ない椅子は軋んだ音がする
謎解きはせずとも愛ははぐくめる
ジンフィズ追憶のひと杖を曳く

野村太茂津

老い耄れた九官鳥が二度も鳴く
蘊蓄を傾け転げ方まで披露
柔道の受け身怪我なしアスファルト
愉快犯自己陶酔かも知れぬ
照れもせず妻に倖せありがとう

西田柳宏子

予約などした覚えない貧乏くじ
満五歳ママ似のおませに指図され
飼犬に定退散歩案内され
定退のそれから携帯持たされる
お互いに杖とも頼み合い夫婦

河内天笑

横浜を拓いて巨星燃え尽きる（菱田満秋氏を弔む）
二ン月の電話が耳にまだ残り（板垣草丘氏を弔む）
ど演歌を聞かされているおなかの児
元気ない膝叩いたりさすったり
サッチモを聴いて元気をとり戻す

原稿募集「私の健康法」

上記原稿は五月号掲載予定のところ、都合により七月号掲載とします。従って引続き同人の原稿を募ります。四百字詰原稿用紙一枚半～二枚（六百字～八百字）締切りは**五月十日**、本社事務所宛。ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。　**編集部**

板尾岳人選

人生の裏も天眼鏡が読み
吊り革に企業戦士も支えられ
手話の子が微笑みかける花畑
激動の昭和を生きた自負があり
冬眠の老い揺り起こす梅便り

横浜市　荒井広和

春一番五臓六腑を吹き抜ける
どん底で芯の強さが試される
言い勝って胃がきりきりと痛みだす
スペアーの財布を妻が持っている
気がつけばひとり迷路の中にいる

鳥取県　澤裕子

年齢はまだ偏差値に届かない
約束を忘れず芽吹くこぼれ種
一輪の梅が誘った車椅子
自分史の行間妻が見え隠れ
老眼鏡外すと皺のない鏡

岐阜市　平野あずま

風止んでやがては消える女の炎
一つずつ仮面取替え生きている
過去みんな許せば温い風が来る
肩書を外すと優しい父の顔
白状をせねば私が消えていく

岡山市　藤原忠志

坪庭のこんな処に小さい春
流行を追わない服で着飽きない
本心を見透す眼鏡妻は持ち
空耳に上手に聞かす妻の愚痴
未知の地へ憧れを抱く時刻表

京都府　前上英一

北の窓開けて風の子入れてやり
お日様が見守る馬の母子家庭
ワンルーム一輪挿しで春を呼び
とんでもない所へ出たぞ地下出口
ロケット弾撃ち込まれても第九条

東京都　井上つよし

歳が歳だけに夜中の救急車
灰皿が肩身のせまい思いする
言うてなんですが今度の嫁さんは
ホームシックにかかる異国のサクランボ
生じっか知ったか振りが仇となり

河内長野市　大西文次

閉店のセールとにかくとんで行く
名門の落ち目は見ないふりをする
くちびるを噛んで巻かれる長いもの
プライドの目が潤んでる殻の中
祭り上げられてめでたい紙風船

唐津市　坂本兵八郎

つき合いはこれからですと退職し
押し立てて親指小指物をいい
作品に動きがあると評価され
春雷に物の芽動き出している
雪見酒ゆっくり政治論じ合い

唐津市　岩崎實

空元気取り柄の内に入れておく
今日の幸母の寝言が笑ってる
別腹を言い訳にする甘い物
義理チョコと判っていてもうれしそう
赤シャツで不況と風邪と追い払う

横浜市　巌田かず枝

こうなると知らずに捺した保証印
ホラ話そうかそうかと聴いてやり
治るまで私はお茶を飲みません
諭吉より金へ傾く弥次郎兵衛
勧誘の笑顔約款には触れず

横浜市　北沢街湖

いい天気何か干さなきゃ損をする
冬木立　節がさぞかし痛むだろ
妻の居る方へ流れる煙草の輪
豆まきの声が聞こえぬ街になり
ひそひそと健康談議通夜の席

横浜市　金森徳三

饒舌が買われ司会を頼まれる
お楽にと言うが正座が性に合う
笑い皺苦労話は忘れてる
弱点を晒してからの身の軽さ
新聞は大盛りいつも読み残す

横浜市　秋元和可

幸せごっこキミもワタシも淋しがり
クリームをたっぷり塗って冬の陣
草も木も川もわたしも生きている
お雛さま飾り女を意識する
凡人に生まれ凡人で終る

横浜市　川島良子

不便さで存在示す母の留守
目覚しに指先だけが仕事する
心まで写してみたいレントゲン
過ぎたとて賞味期限は舌が決め
堂々とメーカーまでがニセ表示

横浜市　福田由美子

富士の機嫌伺いながら里帰り
愛誓い互いにピエロ演じ合い
離婚劇次のダイヤが待っている
昨日より今日の楷書が丸味帯び
リサイクル買ってドラマを重ね着る

横浜市　伊藤ふみ

ランドセル親の期待も背負わせる
紛争の火種に神が潜んでる
負けて勝つ夫婦喧嘩の落し場所
犬が食う程の喧嘩は知らん顔
スキャンダルだけが頼みの週刊誌

横浜市　吉田祐峰

ハードルは下げても夢は捨ててない
人間に戻り合掌しています
先の先味方欲しくて種を蒔く
過信した時パンドラのフタが開く
情けない自分日記の中に居る

神戸市　両川無限

仏壇も時代変わればインテリア
人生も一時停止を忘れずに
化粧して携帯電話する時代
使われぬ記念切手が泣いている
週刊誌見出しだけ見て読みました

神戸市　田中章子

ほどほどに生きて損せず得もせず
古稀過ぎてほっと息つく人生譜
それなりに燃えた日もある枯れ芒
時待てば花も咲きます実も結ぶ
日が暮れて闇にまぎれる今日の罪

姫路市　北条てる代

母の駅降りてこれから夫婦坂
ペイオフに義理人情の縄を解く
子離れの出来ぬ手足をもて余す
早鐘のように打つ胸シクラメン
許そうか許すまいかとのぼる湯気

鳥取県　福西茶子

紫の涙で語る母のこと
足腰をきたえて挑戦をうける
花ふぶき夢は一途なものである
黄昏れる摂理を大切につかう
むらさきの露へ托している懺悔

鳥取県　竹森富久江

証人になると記憶が悪くなる
ゼロ金利使える金が出てこない
リストラにハローワークが若くなる
山ほどの欠点だけど裏を見る
本気かを敢えて反対して試す

鳥取市　福永ひかり

嬉しさが膨らんでいるふきのとう
鼻唄も驚くほどのいい話
ときめきをくれる友あり梅の花
恋拾う歳ではないとやぶ椿
帽子編む指がいきいきしています

松江市　山根邦代

雪に咲く赤い椿に会いに行く
古漬けの高菜が旨い里の味
雑談の中で本音を聞いている
人生のヒントを柿の木に貰う
希望信じて鉛筆をまた削る

松江市　松本知恵子

魚たち寿し屋に集い海を恋う
南天もやっと笑って寒の入り
雪の日は梅の気持ちで春を待つ
手のひらの雪がとけてるだけのこと
ひと言でまわりを燃やす火種持つ

松江市　松浦登志子

ライバルに少しのスキを置く余裕
肩書を外して冗談軽く出る
石橋を叩き過ぎたと愚痴を言う
照準を少し外して義母へ愚痴
嫁がせてゆっくりお茶を飲むゆとり

和泉市　横山捷也

自衛隊諸君戦争知ってるか
わたくしの長所がわたし苛めてる
漬物があればよかった頃の酒
掛軸の絵に四季巡るわが家なり
宿敵と相手も思う目が合って

大阪市　尾崎黄紅

易易と相槌打たぬ首の意地
脇役で上手に愛を着せかける
価値観の違い知る日の隙間風
好きだよと言えない恋は白きまま
神の手が届いた命大切に（心臓手術後五年過ぎ）

大阪市　三浦千津子

春風を入れたい胸の窓開く
前向きに運んでいます足の裏
七坂を乗り越えてきた足の裏
細長う生きるカーブの線描く
耐えるのに馴れたたんぽぽ丸く咲き

吹田市　木下敏子

吹田市　須磨活恵

ぎしぎしと骨がもの言う日の寒さ
掌を翳せば透ける過去の傷
眠れぬ夜愚案ばかりが闇に浮く
疑心暗鬼　臆病になった女傘
春風に心の捻子もゆるみ出す

堺市　渡辺さだを

日本人麦飯食って出直さにゃ
雪見する揃いの浴衣うれしそう
嘘でいい女の涙絵にはなる
年の豆歳ゆく毎に減らしてる
ごはんです言えど猫しか起きてこず

東大阪市　田中美弥子

まだ六十虹追いかけて竹を踏む
意地悪な風に夫婦が煽られる
闇の底あなたの愛にうずくまる
いろいろとあり過ぎました珊瑚婚
わだかまり川に流した夫婦舟

愛媛県　山之内八重美

花遍路心の垢を消して行く
裏庭で春を見付けた蕗のとう
すれ違い残り香そっとおいてゆく
人生は曲りくねった幾山河
少年が勇気を出して譲る席

愛媛県　花岡順子

笛吹けば踊る男を飼っている
我慢した握りこぶしが開かない
錯覚を心の糧に生きている
健康へ胃の門限を決めている
ひたすらに走る勝とうが負けようが

松山市　高橋宏臣

嘘のない人と一緒に居る疲れ
居眠りをしてる間も歳をとり
老い二人時々喧嘩して平和
深追いは止めた地雷が埋めてある
七変化するパソコンに置いとかれ

高知市　小川てるみ

真実を言うて深まるわだかまり
私にも譲れぬ意地は持っている
人様に聞かすほどでもない話
ネジ一つ抜けて傾く屋台骨
振り返るチャンスをくれた松葉杖

今治市　塩路よしみ

ジンクスを軽く見すぎていたうかつ
燃えつきた愛に大空青すぎる
下弦の月物哀しげに研ぎすます
世辞一つ知らない父の漆刷毛
脇役の涙を見せぬカスミ草

人生を漬菜と決めず移住した
恋しさを波に揺らせる太平洋
真剣に取り組むボタン掛け直し
不況国ロダンの横で考える

アルゼンチン　松井美稚子

アフガンの子も眺めてるお月さん
年一度鰯が主座にまかり出る
合格の通知が春を連れてくる
死んでからまだ戒名で値踏みされ

松山市　古手川光

父が子に約束守る肩車
本物と思ったバラに刺が無い
ゆっくりと姿を変えて雲流れ
夜明けまでしとしと雨の愚痴を聞く

今治市　野村清美

いのちあるものに醜いものはない
比較するから思考力ついてくる
晴れやかがいいね心が丸くなる
無駄話の時間の中にある稔り

今治市　渡邊伊津志

金婚の二人で越えた浮き沈み
金婚の話題タブーは髪のこと
事ここに来ては涙も追いつかぬ
平凡な女で好きなのは牡丹

今治市　中村好恵

笑い出すまでの椿のおちょぼ口
思いきり泣いて心を軽くする
藁ぼっちの布団で小芋冬眠中
常識の軽さが目立つ永田町

愛媛県　黒田茂代

里山に昔を探す春の靴
幸せと思う角度は皆違い
恵まれて心はやせて行くばかり
影法師だけには言える胸の中

香川県　伊勢八重子

春風が人間不信を乗せて行く
夢百態夫婦茶碗に盛っておく
極楽の夢追い仁王の門くぐる
天性の陽気は母の血の流れ

香川県　原賢

明るみに出るまで止めぬ雪印
倒産が怒りを見せる叩き売り
素うどんでやっと落着く旅帰り
免許証と共に更新する余生

南国市　小原圭二

木犀の香りですよと窓をあけ
豆の蔓素直に伸びてからみつき
振り向いて見たとて既に八合目
かくし味ゆずらぬままで母は逝き

高知県　近森功

高知県　桑名孝雄

正月の西瓜に神の摂理問う
謙遜な方で話が進まない
倦怠期まだまだ若いから言える
美しい入れ歯の世辞は嘘だろう

札幌市　三浦強一

離農など知らず芽を出すチューリップ
離婚届開運印が押してある
千と千尋とわが家にもある神隠し
町内に日の丸がない建国日

青森県　福士トキ

喜寿の坂雪道踏んだ足がある
歳の数節分の豆手にあふれ
感謝する雪は田畑の洗濯屋
今年こそ来年こそに鬼笑う

秋田県　湊修水

地球儀を回せば飢える子の叫び
耐えることばかりで母の皺のかず
三分咲き情け知らずの花鋏
年毎に老いて桜の派手過ぎる

日立市　加藤権悟

絶対に尻尾は振らぬ父である
母さんの今日が始まる水の音
肩書の名刺が妥協をしたがらぬ
ハミングの妻が厨を離れない

東京都　清原悦子

結局は最後自分を信じ切る
校門の桜主役にされている
つまずいて私流の道を行く
人生に綺麗事だけ先走る

横浜市　平達也

人生の花に気付かず枯らす悔い
動物を植物にする医療ミス
案じつつ腹ふくらむほど飲む薬
梅に桃　桜嬉しい散歩道

横浜市　石原三郎

ほどほどが雪もお酒も喜ばれ
北風と争い負けて風邪を引き
心まで洗われそうな碧い空
歳だけは平等神に与えられ

横浜市　長島亜希子

いい話探すアンテナ張っておく
同じこと彼女が言えば受け入れる
夕焼けの富士撮る寒さ気にならぬ
量販店銀座に風を吹き入れる

横浜市　近藤道子

今日も無事日毎小さい母見舞う
神の意志生かされている母を抱く
冬鏡細くて白い髪を梳く
うたたかの命いとしむ桜咲く

青松も削って海へのびる街
急用を言い訳にする空財布
体型に触れぬがコツの痴話喧嘩
やじ馬の目を遮断する青シート

藤沢市　妹尾安子

信号が付いて萎れる手向け花
冬の陣人民製で身を守る
社名より資格をでかく書く名刺
鼻唄がオペラに変わるいい知らせ

川崎市　中村泰竜

血の比重思えば他人軽いこと
他人様は表面だけを褒めておく
寒中を梅は律儀に咲いてくれ
陽だまりにアンテナ張って猫となり

川崎市　塩沢ひで

どん底を知っているから今がある
下積みの奉仕にやっと陽が当たる
まだ生きていたいと思う崖っ淵
老いの足時の流れを駆けている

川崎市　小林久美子

神の目に止まり損ねたシャボン玉
ポイントを掴んでからの軽い足
歯が立たぬ相手を斜めから攻める
父の背に子には見せない山がある

逗子市　神戸みず帆

優しさを見せるチャンスだ妻は風邪
屋上に菜園　町を捨て切れず
マニアではないがユーロも持っている
偉いとは誰も誉めない家事をする

町田市　土田今日子

月給も値切られる世にした政治
大臣を応援したりけなしたり
子供より腹の立つのがまがる釘
農閑期だから中々つかまらぬ

新潟県　高野不二

バス中でケイタイかけて化粧して
できちゃった婚バージンロード気がひける
たらの芽を和えて食卓春になる
宝くじ極ごく小さい夢かなう

京都市　清水英旺

すり傷にてき面効いた祖母のつば
澄んだ目を信じ話にのってやる
国会は言った言わんの茶番劇
善人を演じた仮面ずれ落ちる

吹田市　二宮栄子

午の春何かいいことありそうな
生きている安心設計しています
春の雪気兼ねしながら帽子撫で
十年日記生きて去年は白いまま

吹田市　後藤志津香

出土品信じて楽し考古学
裸婦像へ時に愚かな血が騒ぎ
早く来い春急き立てて寒椿
凡夫にも哲学あって墓参り

吹田市　木村無禄

国会で大人の嘘が暴かれる
金貸すとビラとティシュで攻めて来る
誰にでも尾を振っているお人よし
長電話　話の種も底をつき

高槻市　乙倉武史

朝市にホテルのロビー早変り
リハビリの一歩なかなか踏み出せず
禁煙の誓いうっかり火をつける
水門の開閉見張るムツゴロウ

箕面市　寺井柳童

愚痴を聞く徳利疲れて横になる
妻の愚痴聞く耳胼胝が蓋をする
父さんの音痴が響く仕舞風呂
匙加減レシピに載らぬ母の味

箕面市　北川ヤギエ

ご亭主をさしおき花に暖をやり
あべこべでうまくいってる夫婦仲
処世訓ひとつ残して古希の坂
リストラで鼻毛も伸びる朝寝坊

富田林市　稲川惠勇

寒いこと言い訳にして冬太り
春の風老女も脱皮したくなり
米を研ぐ快感忘れ無洗米
不景気も身丈に合うた暮らし方

柏原市　永浜加津子

山盛りの飯平らげた反抗期
呼び捨てにされてはじめて一人前
入試にもデフレの風が吹いている
日曜の床屋通いも定年に

豊中市　藤井則彦

丸々と太って骨が哭いている
粗大ゴミと妻がいうからゴミで居る
錆かけた愛を研いて生き延びる
満ち足りて目覚めに旨い熱いお茶

寝屋川市　岡本勲

不器用の直しようなく昏れてゆく
若き日の写真哀しく美しき
メガネ屋でちょっとかしこい顔をする
飽食の中で炉心が溶けている

交野市　田岡九好

リストラも溢れ木枯し吹き荒れる
結局は国民負担痛み分け
うっすらと雪をかぶったボケの花
アリバイのない日が続くひとり者

八尾市　與田明

投げた輪がはずれて風と散った恋
老いの春さくらさくらと会いました
その先が読めず梯子の下に居る
面白い悪口だから聞いている

八尾市　田中トシエ

人の揺れそのまま映す水鏡
花結び母の生き方ほどき方
百態を映す鏡がよく笑う
高齢化福祉の傘が重くなる

羽曳野市　川口信子

絵馬重し就職願い混じってる
花形の輸出産業プロ野球
海老で鯛上手に釣って孫帰り
更迭の筋が通らぬ痛み分け

羽曳野市　永田彰司

桜吹雪日本の春に酔いしれる
花の冷え朝の煎茶が身にしみる
重い腰上げさせました花だより
スニーカーリュックも買って花を追い

羽曳野市　福田悦子

歯車が一つ合わない事もいい
春いいな路地の草木も芽ぶくから
太陽に励まされつつ春を着る
赤い花こっちを向いて咲いてくれ

藤井寺市　伊藤アヤ子

春色のセーターを編む外は雪
無人駅今年限りの梅が咲く
小春日に逢いたい人がある鏡
猫にだけそっと秘密をうちあける

藤井寺市　若松雅枝

しあわせをもうすこしだけちょうだい
真っ青の空を見上げる一人旅
六掛けの暮らしで今日も暮れてゆき
針ほどの噂が風に乗って来る

藤井寺市　西村栄一

観梅に行けばメジロの戯れて
福豆を鬼と一緒に食べている
神様がひまになったら願い事
老梅が咲いて先祖と語り合う

藤井寺市　増井ヨシ枝

牛だって狐狸に負けず化け
バイキング無芸大食独壇場
馬の足いつか主役を夢見てる
カン鈍く妻の反乱気づかない

大阪市　中村忠敬

点滴に今日も生かされ陽が昇る
病んでみて人の心のうら表
やっと癒え懲りずに呑んでいるお酒
言い訳を遠くに聞いている電話

大阪市　小泉ひさ乃

大阪市　岩崎公誠

マイナスの疲労が重い愚痴を聞く
心電図揺れてるようだまだ強気
ＩＴの底の浅さで座礁する
笑いへと焦点を決め狂言師

大阪市　大川道子

姿見に伺い立てるダイエット
いたわりの言葉のうらにある本音
仕事する気はないらしい長い爪
下町の人情鬼の目に涙

泉佐野市　稲葉洋

散り方は釈迦に任せて今日を咲く
生きる知恵老いの歩幅をわきまえる
悔いばかり積んできたよな老いの貨車
青だけが老いの足取りよく承知

河内長野市　木太久正一

トンネルの向うに明かりまだ見えぬ
不手際で災難に逢う牛と人
今日からは心新たに喜寿生きる
スマイルの出来る間は大丈夫

河内長野市　山岡冨美子

旅鞄一期一会の風の中
百均で軽いジョークを買ってくる
赤とんぼ優しいひとの背に止まる
ゼロからの出発だから無限大

河内長野市　村上直樹

うっかりと誘いに乗ったつくしん坊
不況風とんと気にせず蟻の列
耐えた過去すっぱり捨てて咲くすみれ
それなりに天下睥睨鬼やんま

大阪府　前田忠子

秘境の湯月と私と二人きり
歳かしら急に命が惜しくなり
逃げたいと思うほどでもない浮世
気軽うにお入りやすと買わされる

大阪府　小栢こずえ

落葉にも落葉のいのち土になる
一筆に残しておきたい雪景色
薬漬け判っているが生きるため
自然食閑人だけに出来る技

兵庫県　安達厚

幸せは食べたいものを食べている
この人と出会って今日の僕がある
幸せはコタツにお茶と笑い声
用心に用心してて風邪を引く

兵庫県　徳平毬子

午年の夫と駈けましょ二〇〇二年
名湯に心預けて冬景色
小吉を二人で結ぶ厄の年
虚も実も映し流れる川の水

尼崎市　軸丸勝巳

金婚のルーツ卓袱台ひとつから
あと何歩二人三脚残る道
寒牡丹しゃれた菰屋にひそと住む
大寒に衣貸したいさるすべり

伊丹市　延寿庵野靄

頑固さをふあっと溶かすプレゼント
幻想の中で女は火種抱く
ギアーロー樹氷飛び込む冬の地図
一徹の父の頑固が溶ける酒

神戸市　山口光久

満腹になると世間が見え難い
恋は盲目あらゆる策も効き目なし
今日のこと今日片付けてよい明日
挫けるな凡は凡なり味がある

神戸市　伊勢田毅

年金の暮しに重い奉加帳
髪のない頭に帽子よく似合う
ラベル見て故郷に近い肉を買う
虎視眈眈ロボット僕の椅子狙う

篠山市　円増純子

お隣の芝生がやけに青く見え
手作りの心いただくごま豆腐
激論をとことん交わすのも男
好きなことさせてもらっている平和

奈良県　江波正純

しがらみという名の生きているあかし
アリバイはあなたの顔にかいてある
年金のついた浪人気がね顔
これこれと子犬のようにしかられる

和歌山市　上地登美代

春夏秋冬すべて愛する歳になる
アフガンのまあるい月を信じよう
羅針盤乱れクジラが迷い込む
行動に移すと解けて行く思案

和歌山市　根田美子

耳遠い母も一緒に晩ご飯
お銚子のお代わりは無し妻の愛
風邪の神わたしを愛し離さない
愛なんてただ真心が欲しいだけ

和歌山市　土屋起世子

春が来て昨日の服が地味になる
武器になる涙は見せぬ妻の座
荒れた手の中に女の武器がある
お節介黙ってさせる親孝行

和歌山市　武本碧

欲ればチャンスの蜘蛛の糸切れる
星月夜愛の深さを計りかね
一切の雑音消して馬の耳
たそがれの道で出合った向かい風

飯盒に軍の話語らせる
逃げ道がないと知ってるコップ酒
交替のない人生をただ生きる
嘶きが走り野仏目をさます

和歌山市　永廣昇太郎

花吹雪詩人の視野で地に止まり
雑言や奈落へ誘う風ばかり
ひとを討つ貧者の影のつづくはて
疑心暗鬼弱者が抱いて胸を病む

田辺市　大峠可動

散り際をかざる女の美学かも
取り敢えず意欲はみせる春の鬱
その後など誰にも予測出来ぬもの
目から鱗母に窮地を救われる

和歌山県　中村君枝

良心のこわれる音が谺する
良心のピースが欠けているパズル
肩書きを返して試される器
気を貰うつもり岡本太郎展

岡山市　大森純子

味噌汁のにおいで朝を起こされる
雑草はそっと誘って咲いて散り
病気して我が内臓の位置を知り
点滴のポタリポタリに助けられ

岡山市　清水金太郎

イヤリングつけると服も派手を着る
バレンタイン贈るチョコにもある打算
話の輪入れず今日も毛糸編む
節分の鬼がおなかであばれだす

倉敷市　撰喜子

回り道ばっかりだった禿びた靴
保険屋が老後の安心売りに来る
減反の土からもれる炎の吐息
お互いの癖にも馴れた夫婦独楽

岡山県　国米きくゑ

仏さま拝みゆっくり歳をとる
如月の淡雪確かと春を積む
ぴったりの予定うれしい風になる
華やいでごらんと窓のシクラメン

鳥取市　山宮愛恵

痛みどめ切れて改革待っている
雪の花人恋しくて紅をさす
もう少し忘れたくない寒椿
雑草もすくすくのびて桜草

鳥取市　宮脇道子

雑踏を春の香りとすれ違う
春はあけぼの電話が鳴って切れていく
災いをみんな鬼門のせいにする
冬季五輪の胸が痛んだ星条旗

鳥取市　森美智代

松葉でも枯れて死ぬまで二人連れ
神も仏も地球の悪事困りはて
安堵して落ち着く城の有難さ
神仏に無事を祈って旅に出る

鳥取市　山口千代子

生きがいを増やし余生が忙しい
鉛筆の芯は主張を歪めない
不器用な舌でお世辞が言えません
ライバルの握手へ真意見え隠れ

鳥取市　永原昌鼓

人間の弱味を知って円くなり
価値観の違う夫婦で味があり
幸せは自分でつくり生きるバネ
人生はスローテンポの泣き笑い

鳥取市　岡田信恵

蜘蛛の糸私もきっと群れに居る
群れている鴉お前も孤独かい
仕分けしたニュース我が家に届きます
春の海冬の嵐を知らぬふり

鳥取市　横田春名

立春が過ぎて来そうで来ない春
君来給え春の足音聞えるよ
君の死を天も悼むか雪しきり（悼む湯谷明彦さん）
ご安心分散するほど貯めてなし

鳥取市　近藤秋星

不器用が笑ってすます浅い知恵
グローバル中国産の豆を撒く
野に育ち米一つぶに感謝する
健康をうれしく思う野良仕事

倉吉市　木下智子

不況風椅子の下まで冷えて来る
朝まだきお寺の鐘の優しかり
雪印明日を無くした偽装肉
豆まきに歳の数だけ食べるくせ

倉吉市　前田喜美子

たくさんの馬力をもらう年賀状
今日も雪明日があるさと積み残し
八起き目にやっとつかんだ満足感
立春の辻を曲がれば杉花粉

倉吉市　大森孝恵

髪洗う悲しみ全部流すため
わたくしのハートは今も燃えている
泣くことを恐れて意地を張っている
働けるうちにお金はためている

倉吉市　森川あらた

母さんの毒舌パワー全開だ
歌舞伎よりどたばた喜劇すきである
一日のドラマみとどけ陽は沈む
沈まないように浮輪をつけている

鳥取県　前坂美佐枝

じゃじゃ馬が手綱とられて嫁にゆき
香水の匂う襟足どちらまで
行ったきり挨拶のない寒い風
褒められてから叱る躾が実をむすぶ

鳥取県　鈴木一弘

無器用で毎年歳をとっている
賞味期限切れてもこころ失わぬ
うれしさを素直に男出し切れぬ
親切も過ぎてときどき煮こぼれる

鳥取県　鳥羽直市

突然のおいしい話眠られず
春雨にそろそろぬれて見る風情
いつまでも愚痴言いやすい間柄
ストレスが化粧ののりの邪魔をする

鳥取県　鳥羽玲子

節分に心の鬼も追い出そう
人間が天狗に化けちゃ駄目ですよ
腹を立て損の自分に気付かない
腹を立て良いことなんか何も無い

鳥取県　奥田保子

のびる芽に大樹になれと望みかけ
どしゃ降りの人生だった母の背な
少し位不足があって丁度いい
真っすぐに歩いた道に自負がある

鳥取県　西垣美知子

みよちゃんと指切りしたがまだひとり
雪が降る何の掟もないままに
ピエロにはピエロになれる化粧する
カラスほど知恵がまわれば出世する

鳥取県　山下節子

元気ならいいやいいやと痩せ我慢
お洒落する燃える火種のある限り
核心に触れると徳利持ちすすめ
この世では銭が一番面白い

鳥取県　西沖彰雄

拘泥も愚痴もさらりと過去の川
腰曲げて雪の重さに耐える竹
火の車日本列島駆け巡る
毒味する虫も飼ってる無農薬

鳥取県　竹信照彦

充電をしながら母が生きている
受け入れる溜息胸につきささる
どうしょう対岸の火事気にかかる
お日柄が好いから笑う墓まいり

鳥取県　平尾菜美

子の人生好きにしろとは割り切れぬ
ポンコツで馬力はないが使いよう
勝ち馬へ乗って上手に世を渡る
万歩計いつもの人と擦れ違う

鳥取県　細田裕子

アフガンのトップに通じない平和
父よりも煙たい母へ言う無心
準備した服に合わない今日の空
カロリーのこだわり忘れさせる餅

鳥取県　河本晴子

神様の辞令で痴呆の姑と住む
神様がまだまだ姑を見よと言う
道端の花に見とれるゆとり持つ
野に咲いた花も陽気な春の午後

鳥取県　橋谷静江

相槌をうてば延々続く愚痴
身内より近い他人の手にすがる
しつけ糸ほどかぬままで嫁に出す
約束を果たせぬままに花手向け

松江市　三島淞丘

文庫本山ほど積んで高いびき
冷蔵庫に材料だけはつめてあり
ラーメンが好きです妻の誕生日
運不運お茶を入れましょ風の彩

島根県　福間博利

大空に夢を一杯描いてみる
後一つ掴み切れない私の手
新年の空に大きな夢泳ぐ
窓開けてあなたの全て迎え入れ

島根県　毛利幸

あきれてもうかつに本音など言わぬ
考えて考えすぎて義理を欠く
平均寿命越えたら坂がきつくなる
新世紀亀より先を泳がねば

島根県　持田多輝子

春の陽を受けてまばゆい初鏡
この土地に住んで根を張り枝を張り
ひらがなの便り優しい人だろう
菰囲い少し妬けます寒牡丹

島根県　武島ちよえ

明日がある明日があると言うけれど
花鋏母の昔を知りたがる
会いたさに雛を飾って晴れる胸
春ですねわたしの蕾はじけそう

府中市　馬場利子

積ん読に初版の好きな蔵書印
厨での夫権手古摺る癒えた妻
歩くしかない自分で決めた回り道
レトルトに馴れて侘しい古希の舌

北九州市　岡田幸生

健康のよろこび喜寿の春を舞う
老いの意地捨てて気軽な夫婦坂
春が来て老いの溜息駄斗袋
傷心を癒やすお酒のほろ苦さ

宇部市　高山清子

流通のない牛肉を買うつもり
糸切れた風船縮むに違いなし
待ち時間短くなって患者減る

串間市　高畑滝

花を買いやさしい心の糧とする
今はじっと聞き役になる旅談義
来る春は優しい風よ吹いてくれ

高知県　貞岡佐紀子

皺いくつ生きた証と胸を張り
思い出が陽炎のよう古日記
二　三日ぐっと耐えて忘れよう

高知県　百田幸

貧しいが心の芯は温かい
信頼を失う速さ知る遅さ
年金も手足を出して後下がり

香川県　松村輝夫

雪降って人の眼鏡に色ができ
三寒のあとの四温でしわが伸び
私の味はグラムで出しきれず

愛媛県　宮本末子

バーゲンの豆腐へ妻の針供養
子が巣立ち節分の日の鬼が消え
フライトがやがて夜空の星に溶け

愛媛県　安野案山子

幸福度友の病に学ぶもの
負けもいいやさしくつつむ君がいて
葱ぬたが出れば祝膳終りです

日高市　根岸方子

めでたさは介護を受けぬ長寿策
ほどほどで手を打つ僕の処世術
干されても太陽つかむ軍手です

秋田県　秋野宏

勝者奮い敗者は砂に手を着けて
起きぬけの毛布きのうが襞に棲む
女帝論　女雛の視線高くさせ

東京都　やまぐち珠美

古雛の口もと春を呼びよせる
秒針がわきたつ胸の鼓動押す
胸の中いっ気にのべて悔いている

野田市　那賀島雅子

医療費の値上げする案尋ねられ
読みかじり知識全開して説明
豆まきに赤鬼青鬼逃げ回り

横浜市　豊田羊子

漬物と言えばキムチをすすめられ
冬晴れにウォーキングする幸せを
少子化に教室が空き老い学ぶ

横浜市　山梨雅子

まといつく過去をふり捨て坂のぼる
横浜市　鈴江純子

昇進へひげ蓄えて勝負する
窮屈は服が縮んだ事にする
横浜市　布山嘉信

暖かい寒に梅花が惑わされ
ホームレス少年達に身構える
負け将棋筋はいいよと褒められる
横浜市　芦田鈴美

齧るだけ齧っておいて意見する
誘い出し飲ませて先に酔いつぶれ
見えすぎる眼鏡に思考乱される
横浜市　三村八重子

着ぶくれて砂丘の雪の点となる
ターゲット避けて近場の風に乗り
お愛想のよさに思わず身がまえる
横浜市　生坂サト子

白鳥に遠いと知った頃の恋
ほこ先にふいを突かれて己知る
伸び盛り服大き目に期待され
川崎市　浦野昭志

寒中に咲く水仙に母の影
駅弁を買う気にさせる国訛
花吹雪降らせて江戸を見せてくれ
川崎市　大島三四朗

テロ退治してるほうもテロの影
味のある空気で暮す老い二人
ご近所に聞いてもらうと窓あける
静岡市　中西雅

八十八やさしい杖になりたがり
無雑作に生きざま話す歳となり
消しゴムを気軽に使うおえら方
富山市　松見たえ

深追いは二の足踏んで自己管理
両親を裏切り選ぶ恋の道
豊かさに胡坐をかいた不況風
京都市　三宅満子

夫婦ゲンカ負けたふりして引いておく
馬鹿がつくどうしょうもないお人好し
お惣菜湯気も一緒にお裾分け
綾部市　藤田芳郎

一億の国に一億ある主張
パソコンも一男二女も反抗期
惚けるまい妻もヨイショと立ち上がる
草津市　久保和友

旅みやげどれもが耐えた氷点下
美しいカードでローンなど忘れ
太陽のめぐみをあがる湯気で知り

時々は必要とされおばあちゃん
冬の膳トマト一つが皿飾る
若き日の苦労話を子に聞かせ

大阪府　畑中節子

直向きに春の幕開けフキノトウ
悔し泣き女武器とはなお悔し
消費者を忘れてしまった雪印

大阪府　高木道子

太陽の恵みでとける霜柱
なぜかしらヨイショと声を掛けて立つ
いつまでも欲と古着は捨てられず

大阪府　東文江

春一番老いの背中を震えさす
菜の花が春風に揺れ愛しくて
餅にお湯桜尽くしの春の宵

大阪府　藤井郁代

アイバンク登録している男振り
涙粒喜怒哀楽に付いてくる
茎立って野菜作りの自負少し

大阪府　桑田ゆきの

里帰り元気な母を見て安堵
大阪城　人力だけですごい技
自家野菜有機肥料で虫も飼い

大阪府　野田栄呼

愛一途あわせあわせて五十年
ホンワカと人柄にじむ春一番
ながら族好きだと今朝もラジオ聞き

大阪府　大屋敷婦美子

田舎道きけば声する柿すだれ
きっちりと三食明日を疑わず
年越した本音を聞こうシクラメン

大阪市　星野きらり

痩せ蟹が立派に見えた膳の上
ゼロ歳が自己主張して振り回す
曲がること知らぬ縫い針折れました

大阪市　伊藤博仁

似合うよと褒めためがね愚痴の種
見もしないチラシに資源思いやる
無料パス時間かかるが遠まわり

大阪市　池上清治

初姿鏡の前で背を伸ばし
長電話終った後の空しさよ
ワンワンと言葉少なく犬哀れ

大阪市　辻本登季子

善人でいこうときめる病み上がり
しあわせを計るメジャーは他人のこと
世話好きの嫁のメールで仕切られて

大阪市　浦田綏子

就職もよろしく絵馬で神頼み
太子像どれも見飽きぬ顔　形
法隆寺太子只今外出中

大阪市　平井露芳

梅の香や古い罪まで目を覚ます
書きかけの手紙をおけば雪しきり
濃いコーヒー微妙な誘い断って

大阪市　中川千都子

神様の手綱さばきで道きまり
この坂の向こう見えぬが登るのみ
六十路坂笑顔で棘も踏みくだく

大阪市　小川恵美代

わだつみの語り部記憶する風化
平凡に生きた人生茶が旨い
むらっ気が天下取る気で吐く気炎

羽曳野市　山本たけし

免許証本人よりも信用され
なんのため　問われて困る写経かな
半眼でいられず眠る座禅会

和泉市　小坂凡英

古里もたまに行けば清い土地
あか御飯いただき歳を考える
枯葉散る送迎バスの独り言

泉佐野市　大工静子

この後の百年歳月予知できず
百年を黙って耐えた石握る
耐えて来た世紀に自信新世紀

門真市　矢阪英雄

音もなく降る雪　音を吸いながら
世襲制蛍雪の功報われず
塵芥全て包んで銀世界

高槻市　大崎侑子

父さんに似て来たなあと鏡拭く
窓際の椅子アドリブで無事鎮座
憂うこと止めあれからの意地っ張り

高槻市　執行稲子

大吉と今年始めの夢合わせ
寒空にひっそりと待つ占い師
雪印積もる不信に凍りつく

高槻市　安田忠子

竜頭蛇尾どうせと思う新年度
徒手空拳戦後の労苦木阿弥に
故事由来学んで危機を乗り切るか

堺市　梶本哲平

古希祝い卒寿へ励む万歩計
食べるだけ食べて秤に乗る命
負け癖がついて女房に逆らわず

堺市　荻野像山

鬼は外なめられぬようたたきつけ
堺市　大橋　錦

この頃は夫の小言馬耳東風
人間は金にも病気にも弱い
藤井寺市　吉田　喜代子

福の神がどう違えてか御来宅
寒かろうたんと赤い実召し上がれ
ライバルがニコニコしてる要注意
河内長野市　杉谷　カズエ

一寸した事をおしゃれと人の言う
目が赤い　朝の鏡に思う節
肩の荷が下りたと思う親不孝
岸和田市　亀井　皎月

花見酒明日のことなど考えぬ
亡父の歳越えてそろそろ秋の風
例えばの話が本音のぞかせる
東大阪市　今岡　貞人

辛抱の袋だんだん重くなる
改革の笛に官僚踊らない
何気ない会話の中で拾う知恵
東大阪市　笠井　欣子

百円の傘でも欲しい俄雨
無駄遣いしに行く時の軽い足
充実の一日泡で顔包む
大東市　南原　正和

新世帯大鍋小鍋勢揃い
風神もマスク着けたい寒気団
寒風のそうめん干しに身が締まる
枚方市　二宮　紫鳳

寒風にたわむれて咲く野水仙
紅梅も白梅も咲き夫婦旅
笑い声絶えぬ家庭に鬼は外
枚方市　荘司　弘之

父の夢見事引き継ぐ栃東
無言でも父居るだけで張りつめる
一本のミスで女神がつむじ曲げ
枚方市　大昇　隆広

弱い人の弱点がじんと沁みる日や
人恋しどこかにはある情求め
里帰り家の匂いが凝り溶かす
枚方市　小川　良吉

アフガンの復興なるか芽ぶく春
酒飲めば先の先まで読める歳
距離おけば人も景色も好く見える
八尾市　山本　宏至

笑い声少しこぼれる七回忌
妻が病むさするだけしか出来ないが
あきらめて歩くとバスが行き過ぎる

同窓会愚痴をこぼしてさようなら
ふうふうと鍋の豆腐が踊ってる
五階から富士を眺めて大あくび

八尾市　高橋明子

ストレスをオゾンで洗う登山帽
飴玉が溶けてやる気が湧いてくる
親の夢屋根より高い鯉のぼり

八尾市　松葉君江

恋人の諭吉を寝かしつけている
アリバイの証明猫の手も借りる
箒目を律儀に神の庭にする

八尾市　平川幸枝

神様もまたかと思う受験絵馬
私にも貝になりたい時もある
落ち込んで今日は早よ寝る明日がある

八尾市　中島春江

染める陽の白壁明日へ契らせる
諦めに未練が絡む自尊心
出合い道もう通らない曲り角

兵庫県　岩本美緒子

丁寧な返事に和む知らぬ町
球根も土にだかれて春を待つ
近況を聞き撫ぜられている墓石

兵庫県　黒崎美沙子

責められぬ真面目な人のやったミス
人測るものさし別にして平和
いやなことやってるうちに好きになり

神戸市　木村忠義

角たてず花を持たせてくれた姑
捗らぬまさかのときの身の整理
命また拾うて試歩の河川敷

尼崎市　桑原東園

春駒の勢いに乗る年男
二次会はみんな社長の顔となり
常識と理性動かす下心

尼崎市　河津正治

毎月が日曜となり帽子選る
思い出す欠食の子の日向ぼこ
老いらくは眼鏡外して逢うもよし

尼崎市　山田耕治

救急車の中で気がつく生きて居た
昨日魔女　今日は仏に紛う妻
退院の妻に厨を褒められる

尼崎市　尾宮弘治

八十歳それでもけんかの種つきず
お互いによくもここまで金婚式
里帰りおらがの村にも貸家あり

宝塚市　飯西ミサヲ

セーターの色濃い順に仕舞う春
衣更えモデルチェンジをする寝間着
幸せな三食たべている無職

川西市　井本清山

読むつもり棚に溜まって陽の目見ぬ
カラオケへネクタイで来る髭紳士
良い悪い自分の都合親のエゴ

姫路市　服部一典

立ち話犬はそっぽを向いて立つ
手ごろ旅丸い顔浮く蟹の宿
深呼吸夜明けの大気一人じめ

篠山市　谷田多美子

碁盤まで貧乏揺すり攻めてくる
老後まで安心で釣るコマーシャル
三方が一両損の浪花節

奈良市　田中賢治

車間距離ほどよくとってる嫁姑
あだ花と知るもときめき抱いて待つ
あご紐に男の顔が燃えている

奈良市　乾春雄

ハートだけ盗み抜け殻置いてある
互角なら肩の力を抜けば勝つ
不揃いのりんご笑顔がチャーミング

生駒市　飛永ふりこ

悪い癖あいまい続く日本人
餌で釣る人のつながり続かない
介護には保険と共に思いやり

生駒市　小西稔

満ちてくる海へ結び目確かめる
住みついたここが運命変えた場所
ご先祖さまだ農作業出来てます

和歌山県　森下順子

容赦せず写真は歳を掘り起こす
ときめきをはなさぬように抱くやる気
逝くまでは意識をしたい砂時計

和歌山県　村中悦男

夢ロマン七十路なおも追い続け
ホワイトデー義理チョコも入れ予算組み
目的地往きは遠いと足が言う

和歌山市　橋爪佐一

よく見れば親の躾が良く判り
個性あり伸ばして欲しいそのままで
出番ない何処でお過ごし二千円

和歌山市　宮本三喜夫

鳥鍋に家族の愛も入ってる
雪便り聞いて南の花便り
今年こそテロも戦火もない望み

和歌山市　前岡健三郎

片思い本音くすぶる胸の奥
老い仕度しながら翼拡げてる
スーパーで毎日同じ思案する

和歌山市　吉田比佐子

毎日の心の旅路青い空
器替え一輪生けて僧を待つ
人生の鈍行に乗り一人旅

和歌山市　松尾和香

身も心も乾燥しない服を着る
歳の数以上に豆を口に入れ
観梅へ足腰カイロ供を連れ

和歌山市　今一歩

一歩引き二歩押す術を心得る
賞味期限永久ですとチョコレート
水仙がコーラスしてる早春賦

海南市　堂上泰子

星粒を金平糖にして食べる
豆まきのとどかぬとこに鬼がいる
蕾にも話しておきたい四季のこと

鳥取県　松川行男

気にしてる皺より笑顔素敵です
若者がソルトレークの宙を舞う
住職が逝かれ淋しい寺の門

鳥取県　岩崎和子

妻の愚痴ゲーム好きには聞こえない
税金の行方しっかり見ておこう
老いた身も化粧した顔見違える

鳥取県　岡村孝明

冬抜けて気持緑に切り変える
満開の花に小さな幸せを
平等に世界を照らす月拝む

鳥取県　山岡久枝

いい事もあって人生止められぬ
豆まきに懲りない鬼が居て困る
気にするな肥っていても可愛いよ

鳥取県　平木公子

高すぎる夢の梯子はよく落ちる
老妻が座り直した騒ぐ胸
花束にならぬ道辺の鬼あざみ

鳥取県　平井栄翁

わが家にも好きな位置あり私の座
迷い箸してはいられぬライフワーク
食べ残し出して昼食間に合わせ

鳥取県　池澤大鯰

最敬礼謝る時の姿勢です
涙より笑顔女の曲り角
命名へいっぱいの夢託します

鳥取県　吉田弘子

百まではボケぬリハビリ受けに行く
夫の背を盾の人生子等育つ
いたわりも皮肉に響く世相です
言い訳をよどみもせずに言える祖父
訳知らぬままに行列入りこむ
百円市今日の目玉は葱の束
福も外鬼と仲良く世直しよ
正義通だって時には魔物抱く
老骨にいざ腕まくり農守る
飢餓の子を戦後日本と重ね見る
どんぐりの兄弟おなじお人好し
磁気のドアぴたっとくっつく若夫婦
失恋がいっぱい飲んで晴れてゆく
居酒屋に弱い男が詰まってる
酒を借り弱い男が威張ってる
スランプの言い訳ばかり落ち椿
もう少し若返れたら乗る話
生きているあかし現況届書く

鳥取市　河田　のり代
鳥取市　西尾　敬之介
鳥取市　渡部　伯坊
鳥取市　谷岡　清子
鳥取市　田村　邦昭
鳥取市　録沢　風花

定年まで安心出来ぬ椅子に掛け
頬ずりし好き好き髭でいやがれ
日向ぼこうっとり何時か雲が出る
野苺が散歩の径で声かける
どの寺ももうけています観光地
笑顔には鉄の扉もするり開く
〇〇派お腰につけたきびだんご
幾度か寝返り打ってもとの鞘
面の下静から動へ散る火花
旅に出る男は皆妻まかせ
ふっくらと煮上がる豆と性が合う
懐は痛いが嬉し祝う春
雪の下蕗の薹だよ春はそこ
素直に句を読みどこかが惚けている
目が覚めて生きてる証　頑張るぞ
老人にされると妙に腹が立つ
気の弱い人とは見えぬ酒の席
兎も角も賞味期限を重視され

倉吉市　西脇　日出子
倉吉市　牧田　賀寿恵
米子市　猪森　スミヱ
米子市　小塩　智加恵
鳥取県　松本　聖子
島根県　菅田　かつ子

出雲市　加藤スズコ

いつも夢詰めて余生の玉手箱
酒愛し陽気な父の笑い皺
来た道を語り繋いで酒を酌む

出雲市　栂ミツエ

甘酒を一口飲めば唄が出る
どことなく春が舞ってる花つぼみ
道に咲く花のやさしさ手にふれる

出雲市　川島和歌子

晩酌の親子の会話丸くなる
気が散って大事な焦点見失ない
霜柱蹴って治らぬ腹の虫

出雲市　荒木英子

冷える夜は熱燗にして意気が合い
咲く花も春をしきりと待っている
風花が舞う中天にまるい月

益田市　岡田たけを

盗み酒妻の鼻孔に見破られ
寒鮒を釣りに小川へ着脹れる
嫁さんが帰るころには犬が鳴く

安来市　原煩悩児

黒毛和牛消えて久しい過疎の村
丸という無限の思想赤ちゃんに
初詣で賽銭箱を覗き込む

岡山県　土居ひでの

おいしさを陽だまりに乗せ老いの春
ベテランのタイトルを待つ恐妻家
どの波も乗り越えて来た母娘星

倉敷市　家守政子

豆グツグツ鬱とストレス入れて煮る
倉持ちもねじり鉢巻鍬を振る
ペイオフと無縁の私ノラになる

広島県　福島万年

ミサイルもヘリも無いから自爆テロ
目覚めれば今朝も生きてた妻もいた
大臣の名札を変えた伏魔殿

因島市　村上和輝

それでいい　もともと孤独好きな人
裕次郎の墓の近くに眠る兄
七回忌姉も弟も杖ひいて

竹原市　正畑半覚

轍より小鳥の声で目が覚める
自由あり寂しさもあり一人旅
雲が行くなんの苦労もないように

府中市　岩本雅代

雲行きに急かされ迷う亀の汗
潮騒と妻の小言は子守唄
もつれ糸解け口探す旅に出る

エッセー

松江城と桜

小川注湖

私たちに春を知らせる花は何と言っても桜であろう。桜は各地の句会で兼題に取り上げられるなど日本人の心を捉えている。本誌平成十三年四月号に「ご当地桜自慢」が特集された。各地の桜の風情や思いが伝わってくる、いずれも素晴らしい桜名所である。

そこへ当松江城の桜も一枚加えていただこう。松江城の正面に立ち止まり、石組み堅牢な入口から五層各階に張り出した黒い大瓦の屋根を天守閣の鯱までゆっくりと見上げ、桜の花びらが静かに額に舞い落ちてきたのを払い、また歩き始めた。

城山の桜は花の形や花付が他所よりも見事に思える。梅の花が終わって、まだ肌寒い風の中を、城山に春の息吹きを探しに歩いたとき、城山公園管理の職員三人が一組で、キラキラ光るビニールテープを桜の枝々に張り巡らしている作業に出会いしばらく眺めた。

「鳥が花芽をついばむので、防ぐために早めにやっている。花見前には取り除きます」という。枝を痛めないように大変に手間のかかる仕事のようであったが、そのおかげで今花びらのふくよかで、色艶のよい豊麗さを眺めることができる。ぼんぼりの間をたくさんな人々とすれ違い、花の傘の下をくぐり、下段の二之丸櫓跡に下った。もう一度天守閣を振り返って見た。春爛漫に彩る桜花の広く拡がった梢の、その上に高さ三十米の天守閣は光り輝きそびえ立っている。

芥川龍之介が大正四年夏松江を尋ねたとき発表した「松江印象記」の中に「自分の心を捉えたものは松江城の天守閣であった。明治の新政府は封建時代を表象する建築物である中世の城楼を何の容赦もなく破壊した。…後世に伝えたいと思う天守閣の数は全国で僅かに十指を数えるしかない。その一つに此の松江城の天守閣を数える事を松江の人々の為に祝したい。…濠の水に白壁が影を落としている。あの天守閣の高い屋根瓦が何時までも地に落ちないように祈りたいと思う」という一節が鮮烈な絵巻のように眼前に展開していた。

戦中、城は管理、修理が出来ず倒壊さえ心配されるほどに傷んでいたが、戦後、全面大解体修理し、戦国の武将堀尾吉晴の築城当時の荘重雄大な姿に復元された。こうして松江のシンボルとして城山の形づくる目の前の風景の中に戦国時代から時の移ろいを語り伝える。「絢爛と城に歴史の桜舞う　注湖」。

また城を映した堀川には、多くの木橋があり、苔むす長い石垣、水面まで垂れ下がって延びる太い古木のつくる緑、古木の枝にひなたぼっこの亀の親子、ときどき鯉や鮒が水面にポチャと跳ねる水音に広がる波紋。この恵まれた城山堀川水景を船でめぐるというアイデアが実現した。私は堀川めぐりの船に乗って、陸から見慣れている松江の水景と船の上から眺め、ゆっくりと変わってゆく風景の趣にしばし感嘆し黙して目を見張る。

堀川遊覧船が平成九年七月の就航以来五年で、百二十五万人を超える観光客に古都松江を楽しんでもらった。これは堀川遊覧船発想の大ヒットだった。「船頭さん古城と客を結ぶ舵　注湖」。船上から桜や松の梢の上に絵巻物にも見まがう松江城の天守閣を見上げ、コンクリート造りでないことに計り知れない誇りを持っている。もう「天守閣の高い屋根瓦が地に落ちるようなことはない」と松江市民の私は思う。そして川柳塔同人、誌友の皆さんに荘重雄大な松江城と美麗優美な宍道湖の夕日をご紹介したい。

麻生路郎物語 (4)

—つつましき川柳結婚—

東野大八

路郎が上京したのは明治四十四年八月十五日である。ときに二十四歳。勤め先は学校の友人の生家である樋口金屏風店であった。もっともその東京生活も足かけ三年で終る。

このころの柳友で最も親しかったのは、浅井五葉である。路郎より六つ齢上で銀行員だけに、如才なく世事に長けた人柄が、学生路郎にとっては、からめてから肌のぬくみを感じさせたのであろう。

—糠袋いわくあんたはお妾か
—行倒れ成程という姿にて
—大仏の鐘杉を抜け杉を抜け

といったいわゆる五葉調が仲間内でも評判の好作家だった。

「彼と初めて顔を合わせたのは、明治三十九年夏、平野町五二楼楼上の川柳大会で隣り合わせてからである。私の市岡町時代（上京直前ごろ）は、五葉君は市岡中学前に住んでいたので、気軽く行き来しあった。上京してからも毎日のように通信しあったものだ。彼の虫メガネでみるような細字が懐しい」

「矢車に出句をすすめたのも五葉君で、おかげで東上した際、矢車の荷十君の世話で下谷の下宿屋に落付くことができた。そこの息子が一時川柳を作った高野京雨だった。京雨は三太郎君の従兄弟だともきいた」（山雨楼メモ）

その「矢車」も路郎の東上した年十一月に廃刊。このとき「滑稽文学」（読売洲而笑子）もこの年七月に廃刊し、東京の柳誌は完全にその姿を消滅させてしまっていた。「矢車」廃刊のころは、青明、五葉、半文銭、水府、緑天、地神佐竹、路郎が主力同人で、いわば大阪の柳人が東京で柳誌を出しているような形になっていた。若い路郎にとってこんな東京の空は、ひどく侘びしいものに思われたことにちがいない。在京中、折をみては大阪へ馳せ帰っていたようだ。図らずもこの帰阪の一ときに、運命的な河盛よしの（のちの麻生葭乃）との出会いとなるのである。

「葭乃さんは大正元年ごろ、当百庵の句会に父君河盛芦村氏とともに姿をみせられ、当時の若き川柳仲間に相当な渦をまき起していたものであった。当時、葭乃さんは二十歳、まだ肩揚げもとれていなかった。おさげ髪にしたり、桃割に結ったりしていたが、みるからにミッション風の地味な女の子だった。若い連中は作句どころでなかったらしく相当な悩まされ方であった。父君つきっきりでさりとてどうしようもなかった」（昭和六年五月号〝むさしの〟「大阪だより」）

「大正元年路郎は東京からひょっこりと大阪に戻ってきて、当百さんの二階で開かれている小集句会へ突然に姿を現わしたのです。

出席の皆さんとは顔なじみのようでした。この時が私との最初の出会いでもあったのです。当時、当百居での小集句会のメンバーは十人足らずで、俳人鬼史柳号柳珍堂という川柳のうまい作家も出席されていました。そのほかに浅井五葉、木村半文銭、川上日車、岸本水府、藤村青明、蚊象さんもおられたか、覚えていません。まだ俳人で宗右衛門町のお茶屋の主人だった藤原遊魚さんも時々見えていました」（葭乃書簡）

「はじめて彼と出会ったときの印象ですが一口に申しますと、まるで〝おじさま〟みた

いな感じで、齢より相当に老けて見えました。父芦村に、私を妻にと申し込んだのは、初対面からしばらく経ってからだと思います。

私の条件としては、父と一緒に暮らすことができれば、お受けしてもよい、ということでした。娘一人、親といえばすでに母はなくこの父だけでしたから、父と離れて暮らすことは当時なんとしても厭だったし、若い私としては考えられない事でした」

昨年、生駒市で直接筆者が訊いた、これが彼女の結婚当時の感想であった。

結婚式は大正二年四月九日、西田当百夫妻の媒酌で、河盛芦村、よしのの親子二人で暮らしていた靱南通りの家で、日ごろ顔なじみの当百家に出入りする川柳人や、双方のわずかな縁故者を招いてつつましく挙式されたのである。新郎新婦の新居となったのもこの家だった。

この路郎が句会の女王（クイン）を射止めたということは、その時点でかなりのやっかみやそねみが当然のように発生している。その根拠もない憶測の中に、路郎が水府と、葭乃に〝恋のサヤ当て〟を演じ、結局路郎がライバルの水府を蹴落し、恋の勝利者となったというデマがとび交ったことである。このデマは愕いたことに、今なお旧柳人の間では、伝説的の話題として生きながらえていることである。そこで筆者は、この点についての真相を生駒市のご当人に訊してみた。直ちにつぎの如き返書が到着した。

お訊ねのデマの震源地について、私の知っている範囲のことを申上げます。それは遠い遠い昔のことですので、私にもハッキリはしていません。

たしか北方の地方柳誌〝猫柳〟だったと思いますが、もしまちがっていたら、他の柳誌であるかも知れません。調べてみないとわかりません。とにかくこの柳誌の消息欄（川柳塔からいえば柳界展望のようなところ）に二、三行ほどの記事が掲載されたことがありました。

何が書いてあったか、私は馴れぬ家の仕事で忙しくしていましたから読む暇とてなく、くわしいことはわかりません。或日水府さんはその柳誌を持って私たちの新居（靱南通り）へ来られました。そして問題の記事のあるページを路郎に見せながら

「これどう思います。僕はこれをみて第一今後ここの家とはどうなるのかと思うと心配になったので、やってきたのです」

とさも困ったように前額部の髪の毛を、右手の親指と人さし指でつまみました。これは水府さんが困った時に必ずする仕草なのです。

「僕どんな冗談を言うたか知らんけど……」

と水府さんは、そう言葉をつぎました。

「こっちは教育者の娘なのだ、これは困る—これは訴えよう」

と路郎はムッとして言いました。

「そんなむつかしい事はやめときまひょうや、僕が辛抱しといたらええのやから……」

と水府さんは答えました。

実のところ、当時の私としては水府さんとは、句会のときに顔を会わすだけで、別に個人的おつきあいをしたことは勿論ないのです。ですから私自身、この二人のやりとりをそばできながら、路郎さんがそんな大仰なことを言うのに、内心おかしく思ったぐらいです。

こんな遠い昔のことが、今だに私の知らぬ人達の間で尾をひいているのかと思うと不思議でなりません。

その後のことですが、水府さんの結婚式の日は、花嫁さんの中宿を私方でいたしたぐらいです。お互いに住居は近かったものですから、絶えず行き来をしていました。水府さんのお母様もまだご健在でしたから、私はご近所づきあいをいたしました。路郎も水府さんとは川柳人のお友達でありました。半文銭さんのお宅も半丁たらずのところにあったのでした。

告訴する、いや、やめときましょうという路郎と水府さんのやりとりには、よくこのふたりの男性の性格がでています。路郎と水府さんとは、性格的には何もかも反対でした。水府さんは人が不快に思うようなことは、

直接自分の口から言うことは避けていられました。それに反して路郎は、正しいと思った事はきらわれようがどうしようがズバズバといいにくい事を主張するので、誤解もされ易く、多くの敵を持っていました。強い味方もありましたが、それはごく少数であったでしょう。従って柳誌の運営につきましても、主義主張を異にしていました。そんなわけで、仲の良い柳友でありましても、ことごとに提携しにくい点があったのです。第三者の眼からみれば、互いに反目せねばならぬ感情のもつれがあるかのように邪推されていたかもしれません。私から申しあげる事はこれぐらいしかありません。

結婚後三年目のことになるが、山雨楼メモにつぎの路郎夫妻の句会報が記されている。(結婚とともによしのは直ちに柳号を葭乃とした)年代順からはみ出るが紹介しよう。

「番傘の大正五年八月号を見ると、麻生夫妻に一頁を提供し、優遇している。そこでは葭乃・路郎と並べお睦じいところをみせている。その中の主なる句を紹介しよう。

—罪の値は汗なりと鍬をとり　葭乃
—アダムエバ猿股という知恵がつき　同
—基督は今日も手品を一つやり　路郎
—私生児だのに聖霊にしてしまい　同
—サロメにも困るとヨハネ堅いこと　同

まだ路郎調は完成していないが、進むべき道が番傘とは異っているのがほのみえる。

このころから路郎は〝番傘〟から遠ざかり〝土団子〟や〝雪〟が生れた。〝川柳雑誌〟の創刊はそれからずっと後のことである」

(昭和六年三月号〝むさしの〟川柳雑誌の句・近藤飴ん坊)

基督の句が出ているので、ここで路郎夫妻の洗礼名をあげておこう。路郎のクリスチャンネームはヨハネ。葭乃はルツである。路郎が図らずもこのようなイエスの輪環の下についたのはもとより花嫁の影響である。

葭乃は奈良県立桜井高女の二年から大阪に移り、大阪私立相愛高女に転校し、ここを卒業後、大阪川口町にあったプール女学校の英語専修課に学んだ。相愛高女は、御堂さんが設立した仏教学校だが仏教色はうすい。生徒は島之内や本町の問屋すじの娘さんが多かった。それだけにちと贅沢なエリート女学校であった。一方、プール女学校のスペシャルクラスは、生徒が五、六人だが教師は外人でカナダやロンドンの宣教師格の人たちが入れかわりたちかわり教壇に立つという風で、修道院なみの教育ぶりであった。毎朝三十分は礼拝、半時間はバイブルクラスで、毎日聖句を一句ずつ暗誦させられていて「あの人はハンサムだなあ」と心に思うだけでも姦淫罪を犯しているのだと訓育された。「人右の頬を打たば、左の頬もこれに向けよ」と無抵抗主義を教えこまれた。このため、腹立たしさも、人を疑うことも知らずに青春期を過ごした。と述懐のあとに——。

「学生時代には毎日曜日にかかさず京町堀の聖台会へ行っていましたが、結婚後は俗事におわれてひまのない生活でしたから、教会へは次第に足が遠くなりました。今はその教会も戦禍でどこへ行ったかも知らずに過ごしています」(葭乃書簡)

仏門を経てクリスチャンに、神仏への奉仕を誓ったはずのこの妻にやがて思いもかけぬ川柳人としての洗礼?が生涯のものとしてその身を押し包んでしまうことになるのである。

ツルゲーネフの「女の一生」や、チエホフの「可愛い女」にも似た葭乃の〝女の一生〟は、路郎という型破りの男性を夫と定めたことによって、はからざる運命の波濤に翻弄されることになる。麻生路郎・葭乃夫妻のその人生への門出は、まるで十字架の刑柱を重たく背負ってゴルゴタの丘に向うあの聖画にも似ていよう。そのキリストの頭髪をからみつけたその刑冠—それこそが川柳そのものなのである。ともあれ、本名河盛よしの—その前世もまた数奇をきわめた家門のドラマがそこにあったのである。

愛染帖

波多野五楽庵選

身の内にあかい蛍を飼い続け　和歌山市　福井　桂香
ハンカチに今落丁の本つつむ　和歌山市　木本　朱夏
人の世を泳ぎ疲れた時刻表　富田林市　池　森子
ワインほろほろ今夜も鳥になれそうだ　米子市　政岡日枝子
ゴルゴタの丘までつづく罪の嵩　弘前市　高瀬　霜石
寒暖の時をつないだこぼれ梅　京都府　丹後屋　肇
目の中の言葉が一人歩きする　西宮市　奥田みつ子
不協和音　私の弦が弾まない
湯豆腐と妻と三人暮らしなり
いないないばあでみまかりたいものだ
垂れ落ちる氷柱の音を聞く周忌
南溟に後ろめたさの生き残り

雪に目が眩んでお辞儀ばかりする　鳥取県　土橋　螢
夢だからそんなに急ぐことはない　出雲市　園山多賀子
終の駅飾る言葉が探せない
横槍が入ると消える道しるべ　松江市　津川　紫晃
逃げ道に消しゴムひとつ置いておく　弘前市　高橋　岳水
切り取り線少し悩んだ跡がある　堺　市　和田つづや
やさしさに触れて心が傾斜する
暮色背に今日の誤算が疼き出す　枚方市　海老池　洋
暫くは愁いに浸る春の暮れ　米子市　白根　ふみ
ぎこちなく飛んでる夜のシャボン玉　米子市　林　瑞枝
辻褄を合わせるために切る尻尾
凡凡が好き洗濯機炊飯器　横浜市　豊田　羊子
冬日和今日再診を逃しては　海南市　三宅　保州
雪白くわたしの罪が深くなる　西宮市　奥田みつ子
受け継いだ情けを亡父へと送る
デリケートな山から蝦蟇の子が産まれ
麻痺の手を繕う糸が欲しくなり
最寄りの駅前に最寄りの医者がある
今日もまた自分に勝てぬまま眠る

ためらい傷が疼いています冬の章　吹田市　山本希久子
神様がイブを創った深い訳　米子市　鷲見　正子
豆乳の湯葉に優しい京の私語　弘前市　櫻庭　順風
雑巾を洗って芝居続けよう　松原市　小池しげお
レクイエム誰かが忍び幕を引く　東京都　播本　充子
風花にふわりとのっていい話　鳥取県　さえきやえ
春一番と出会ったらしい曲り角　寝屋川市　森　茜
七十歳破れた羽根を縫ってます　横浜市　近藤　道子
断り状すとんと書いて春を待つ　弘前市　宮崎ヒサ子
出来るなら空気のような妻がいい　愛媛県　中居　善信
楷書より草書の女でいたいもの　寝屋川市　太田とし子
おかげさまに口説きを全部ふくませる　弘前市　一戸　ツネ
扁平足でいつもしんがり守り切る　鳥取県　岩崎みさ江
風の音火の音女燃えつづけ　岡山県　矢内寿恵子
切り札を抱いて正座を崩さない　日立市　加藤　権悟

弘前市　斉藤　ゐゐ

逆光を好きでたまらぬ蜘蛛の糸

青森県　西谷　大吾

急がねば命の芯が燃え尽きる

和歌山市　吉村さち子

切れ味が鈍くて肩が凝ってくる

美祢市　安平次弘道

不揃いのリンゴ交替させますか

横浜市　秋元　和可

武器になるならば涙は溜めておく

横浜市　三村八重子

分ほどの目線で虹を追っかける

出雲市　石倉美佐子

ペンシルを尖らせ一日暮れそうだ

倉敷市　小野　克枝

思い出を丹念に貼る女の手

弘前市　中山　雅城

菜の花を生けて水盤歌いだす

岡山県　富坂　志重

生きのびて手負いの傷が増えていく

大阪市　三浦千津子

風ヒュル・ル別れの序曲かも知れぬ

松原市　玉置　重人

きっちりと帰るブーメランも猫も

綾部市　藤田　芳郎

不器用に生きて賞罰欄の白

香川県　木村あきら

一枚の舌を大事にして生きる

大阪市　小林　周信

シンプルな男に見えぬ喉仏

倉吉市　野口　節子

夕焼けを溶かして亡母の絵をかこう

和歌山市　楠見　章子

帽子掛けへのへのもへの泣きやすし

米子市　青戸　田鶴

椿ひらひらいつでも落花するかたち

堺　市　山本　半銭

鏡には正面だけを見せておく

大阪市　前　たもつ

目をつむるとわが故里は雪景色

奈良市　乾　春雄

昭和史の七つ釦も錆びて来た

横浜市　芦田　鈴美

輪の中の無口がまとめ役になり

和歌山市　青枝　鉄治

いい地酒あると左遷を宥められ

大阪市　町田　達子

痩身を自動とびらが無視をする

鳥取県　鈴木　公弘

鬼は外こころに熱いものを抱く

和歌山県　中後　清史

年の功まずは言いたいだけ言わせ

弘前市　相馬　銀波

冷や酒の器言い訳浮く夜長

八尾市　村上ミツ子

どっこいしょ言うてるうちに電話切れ

鳥取県　石谷美恵子

口裏を合わせ失意を慰める

寝屋川市　江口　度

四捨五入すればアリバイ見えてくる

尼崎市　田辺　鹿太

左遷地の酒にのまれる影法師

鳥取県　西沖　彰雄

気のきいた言葉以上の笑い顔

羽曳野市　酒井　一壺

幸福が続くと先が怖くなり

弘前市　福士　慕情

死ぬことを何時も忘れて生きている

西宮市　門谷たず子

笑えないコントが詰まる第五章

大阪市　神夏磯典子

大船に乗って案外よく揺れる

和歌山市　西山　幸

正解は旅の終わりにあるはずだ

倉吉市　山中　康子

やせ我慢秘めて炎を呼びおこす

富田林市　大橋　鐘造

惜しまれて死にたいなどと思わない

川崎市　和泉あかり

駄馬の背の余生に火打ち石が鳴る

唐津市　井上　勝視

つくづくと無力を悟る手暗がり

和歌山市　上地登美代

一言で心が春の絵に変わる

八尾市　宮崎シマ子

慎ましい暮し戦を知っている

黒石市　相馬　一花

自画像は少し美人に描いておく

西宮市　緒方美津子

古里にまだ顔パスの店がある

豊中市　田中　正坊
触るまで造花と分らない造花

横浜市　川島　良子
女の涙に賞味期限はありますか

札幌市　三浦　強一
母と娘の絆へ長い糸電話

鳥取県　上田　俊路
散り際は生れた星の下がいい

大阪府　澤田　和重
幸せでないから作り笑いする

愛媛県　黒田　茂代
沈黙の偽装でマグマ抱いている

吹田市　石原　靖巳
句読点打てないままに日が暮れる

西宮市　西口いわゑ
夫婦とやいつもどこかで妥協する

鳥取市　岸本　孝子
あの人が来たから口を閉じておく

和歌山市　古久保和子
ミシン目を外れてわがままな切手

弘前市　岡本　花匠
世渡りの馬鹿にもなれぬお人好し

大阪市　板東　倫子
凍てついた街に淋しき人眠る

吹田市　早川　棲世
耳もとで壮時の軍歌鳴る老後

鳥取市　夏目　健一
呑むほどに偉い器が欠けてくる

鳥取県　吉田孔美子
しぶとさのB面に意が固まらぬ

高槻市　江原　秀夫
福はうち鬼は仏の面でくる

藤井寺市　高田美代子
泣くだけは泣いたモナリザの微笑

鳥取市　岸本　宏章
馬車馬のたとえが子等に通じない

横浜市故　菱田　満州
七十を過ぎても解けぬ玉手箱

川崎市　小林久美子
壇上の声が半分子守唄

倉敷市　井上　富子
無駄にした時間のつけが追ってくる

砂川市　大橋　政良
煮え切らぬ言葉の裏を炙り出す

逗子市　神戸みず帆
目の奥へ照る日曇る日畳み込む

横浜市　清水　潮華
回れ右勇気へ熱が高くなる

羽曳野市　吉川　寿美
プライドが邪魔して描けぬかぼちゃの絵

河内長野市　植村　喜代
泣かされた分だけ強くなりました

宇部市　平田　実男
ブランドで倖せごっこしています

富田林市　藤田　泰子
もう誰も石さえ投げて来てくれぬ

岡山県　福原　悦子
建前と本音の溝は埋らない

箕面市　出口セツ子
パソコンも夫も操作できません

大和高田市　鍛原　千里
爪を噛む夜は心が寒いから

姫路市　古川　奮水
胃も腸も覗かれドックから逃げる

大阪市　川原　章久
前掛けで座るとリンゴ喋り出す

倉吉市　牧野　芳光
三日間じらしただけの愛ですか

藤井寺市　太田扶美代
握手して別れたなんてきっと嘘

竹原市　正畑　半覚
恩返しそろそろせぬと間に合わぬ

八尾市　高杉　千歩
春や春さてこれからの処世術

羽曳野市　徳山みつこ
笑いとばす勇気私はまだ持てぬ

和歌山市　武本　碧
子を探す地図になかった父の道

鳥取県　土橋　睦子
五十年父権は妻に握られる

米子市　木村　春枝
犬の餌炊いて一日終りとす

香芝市　大内　朝子
追うものがあって人生ゆたかなり

富田林市　中井　アキ
気がつけばライバルが居る真正面

鳥取市　福田　登美
振り向かぬ意地をほんとは悔いている

唐津市　市丸　晴翠
酌ぐ酒に本音ほろりとこぼれ出る

誹風柳多留二四篇研究 40

粕谷長生・山田昭夫
伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・橋本秀信
清博美・佐藤要人

306 **わるくふりますとぶらりと角力取**

粕谷 相撲は屋外興行のため、雨天中止が慣例だったようである。「ブラリ」は、暇を持て余しているとも、散歩とも取れる。

句意は、少しの雨でも降ると中止となるので「悪く降ります」と相撲取りのセリフ。

永ィあめ大ィなおとこてれて居る 安七梅1

伊吹 賛。相撲興行を楽しみにしていたファンにでも言っているのであろうか。

橋本 直訳すれば「(力士にとっては)悪い雨が降ります」とぶらりやってきた、となる。故に伊吹説に近い。『川柳江戸歌舞伎』には、「雨天続きで大きな胴体を持て余した力士連に見舞はれた御贔屓筋の旦那株」とある。

清 『川柳江戸歌舞伎』の説明でよいのではないか。「悪く降ります」は挨拶の言葉であろう。

佐藤 同右。

307 **せいろうか度々においよんてそこがぬけ**

粕谷 「江島・生島」。本句は歌舞伎から取材したものだろう。

句は、生島新五郎は蒸篭を利用して大奥へ入り込んだが、何回も同じ蒸篭を使ったので、終いには底が抜けた、というもの。

せいろうのそこかぬけたらひよんなもの 安八松1

せいろうがぶつこわれるとこさいにげ 安七義5

いけねへ事そのせいろうまちおろう 天二義3

小栗 蒸籠の底が抜けるというのは、芝居か何かにあるのだろうか。物理的に底が抜けるというのは一向に面白くない。辞書にはないが、「底が抜ける」というのは「露見する」というような意味ではないか。

清 小栗説賛。「底が抜ける」を物理的な意に解しては、作者に申し訳ない。蒸籠に対する掛詩であり、露見する意。

佐藤 同右。

308 **中の丁立はだかって年始なり**

粕谷 正月二日、遊女の年礼の句。

『青楼年中行事』(上)「二日は契情の年礼とて、初衣装の綺羅をかざり、中の町を勤むるを道中といふ云々」。

最初は吉原へ来た客同士の年礼のことと考えていたが『川柳吉原風俗絵図』に、遊女の年礼の説明で本句他を引用して「……また中には入らず、門口での挨拶なので云々」とある。

句は、正月二日は遊女の仕事始め。仲ノ町まで出てきて、茶屋などの門口で新年の挨拶をしている光景をそのまま描写したもの。

一軒の札てふさかる中の町　拾八30

橋本　賛。『青楼年中行事』に絵がある。

清　同。

佐藤　賛。

309　**月々に替る上野の札のつじ**

粕谷　上野両大師遷座の句。

句は、両大師は、一月毎に安置する場所が変わるから、場所を案内する札の内容も、毎月変更しなければならない、というもの。

両大師三十日かぎりに店をたち　明二義5

両大師晦日がわりの坊主持　六二34

執事札て道引給ふ両大師　一二10

小栗　「札の辻」は、「官の制札を立てておいた辻」（『日国』）のことで、現在でも三田に地名として残る。

従って句意は、「札の辻」は本来一定の所に立っているものだが、上野の両大師のそれは毎月変るという意味。「場所を案内する札の内容」というか、要するに、執事が、当番の宿坊を知らせるために、その坊の前に札を立てたのだろう。

橋本　同右。執事札の句。『江戸名所図会』（角川版）の脚注に「（前略）順番に宿坊を巡った。その所在地を明示するために『両大師』なる金札を立てた」とある。

清　同。礎稿、肝心の「札の辻」の説明をしていないが、この句の生命が「札の辻」にあることを理解すべし。

佐藤　同右。

310　**ゑゝしまいそれつりよこせ〳〵**

粕谷　「大一座」の句と推測する。「仕舞い」は「前もって遊女を買い切る約束をする」意があるので「良い仕舞い」ならば遊女全てを買い切った、つまり「惣仕舞」と考えたが、いかがであろう。

山田　例年になく年末の支払が出来、「そら釣銭をよこせ〳〵」と掛取人に言っている図。その得意や思いやるべし。

掛とりへ小辰で払ういい仕廻い　田草一4

清　右同。

大穴を大半ふさぐよい仕舞い　天五亀2

掛取の笑顔は右之通也　一六29

「右之通」は、「右之通受取申候也」で領収書に記載する文言。

佐藤　山田説のとおり。

311　**きたァないなりておはぐろ売に来ル**

粕谷　「お歯黒」の液は自分で作るものであって、買うのはわずかに五倍子粉くらいなものである。それを吉原では「お歯黒」の液を売っていたのである。液を買って使うのは遊女。「汚い形」とは、そのわずかな利を得ようとしてその日暮しの人が売ったことをいうが、お歯黒の液を大量に作れば汚れるので、その意も含んでいよう。

おはぐろを禿びやく衣てかいに来る　安七信1

壱文がこほさぬやうにかぶろかひ　安七亀3

橋本　原句、勝句刷は「買い」だが、「売り」に変っているので、お歯黒売りの風体を詠んだものか。

清　吉原は万端華美の世界、そこへ商売の衣装で来れば、「きたァない」という表現になるか。

佐藤　「売に来る」で解釈すれば、清説の通りと思う。

何れにしても青楼の句として解したい。「買いに来る」は、禿の起き抜けの寝巻姿、「売に来る」は薄汚い婆さんとしておく。豊国の『絵本時世粧』に吉原の河岸見世を行くおはぐろ売の婆さんが描かれている。

女性コーナー

前香の花

宮西弥生選

鉛筆の倒れた方にある答
花手桶やがては無縁墓となる
割り切って洗濯に出す白い足袋
そろそろと歩いてるから横へ行く
散って咲いて誰かのためにまた散って
深い闇心の刺はいつ抜ける
紙おむつの特価ときどき目に入る
見て欲しいから覗くなと書いてある
転んでみて人間だったと気が付く
本当の握手の邪魔をする指輪
お伽噺のある一人の山歩き
私にも武器の一つや二つある
正面を向くとあなたの良い笑顔
間引き菜がピーナッツ和えになる答
こんな芽が冬の重さに耐えている
それなりの望みは捨てぬ紙の鶴
その時はその時の画をさりげなく
輝いた頃を知る服捨てられぬ
寂しさは叱ってくれる人の減り

吹田市　山本希久子
鳥取県　岩崎みさ江
東京都　播本　充子
芦屋市　黒田　能子
大和高田市　鍛原　千里
倉敷市　小野　克枝
大阪市　神夏磯典子
和歌山市　福本　英子
大阪市　川久保睦子
橿原市　居谷真理子
米子市　林　瑞枝
横浜市　川島　良子
富田林市　中井　アキ
米子市　政岡日枝子
和歌山市　吉村さち子
尼崎市　長浜　澄子
藤井寺市　高田美代子
横浜市　鈴江　純子
寝屋川市　堀江　光子

美しく落ちたし椿そう願う
人それぞれ南瓜はリンゴにはなれぬ
風無情残り時間を急きたてる
おとなりが入院じっとしておれぬ
楽しさを友と分け合う手塩皿
美しい方へ傾く昼電車
わたしから何か奪って潮が引く
柔軟な右脳奔放なる絵筆
現実は一合の米研いでいる
今日の恥二つ三つ浮くしまい風呂
エネルギー秘めて女の活火山
運勢が何時も我慢を強いてくる
元気かいダンボールから里の味
体力に応じた亀の歩を守り
雪吊りのてっぺんから来る春の音
この先は言わずにおこう梅匂う
雨垂れの音に放心するときも
少しだけ勝ったと思う露天風呂
財布にはうれしい値下げだとしても
くだり坂半ばおんなの現住所
わたくしのエリアに朗報が混じる
男と女別の思いで月をみる
銃口や浅い平和が試される
ひらき直ると少し心が軽くなる
人生は小舟風向き気にかかる

藤井寺市　鴨谷瑠美子
西宮市　奥田みつ子
岡山県　矢内寿恵子
鳥取県　さえきやえ
和歌山市　武本　碧
八尾市　髙杉　千歩
熊本市　永田　俊子
倉敷市　井上　富子
和歌山市　西山　幸
羽曳野市　西村りつえ
八尾市　宮崎シマ子
米子市　小塩智加恵
出雲市　伊藤　玲子
東京都　後藤　早智
弘前市　宮崎ヒサ子
鳥取県　石谷美恵子
横浜市　保田　絹子
東大阪市　北村　賢子
寝屋川市　森　茜
米子市　白根　ふみ
藤井寺市　太田扶美代
西宮市　西口いわゑ
横浜市　近藤　道子
米子市　青戸　田鶴
鳥取市　永原　昌鼓

処方箋心変わりは赦される
医療ミスハンカチ被す布被す
ゆりかごが届いてノラにもうなれぬ
降ってきた悲劇 喜劇にして生きる
屋根普請大工いちにち咳こぼす
穏やかな心になって負けている
亡母想う海の深さを知らずして
保健室ならこころ開いてくれる
もう少し賢くなろう目を洗い
白魚の指無器用は許されよ
難聴が自分一人の時をくれ
母のはがき元気という字細くなり
日の丸の赤を真紅に染め直せ
干し大根風の言い訳寒く聞く
ごくろう様親が子に言う塾通い
黄昏れてトンネルの出口が見えぬ
毒針のおかげで脳が目を覚ます
老木二本支え合ってる急勾配
この嘘は永久保存するつもり
賞味期限切れてからでも遅くない
沈丁花も一輪春をくれました
あなたに尽して不自由ありません
掃除機に吸われ福豆唄いだす
肩の力抜いて楽しい事をする
箱庭に溢れる喜劇くり返す

和歌山市　桜井　千秀
和歌山市　福井　桂香
米子市　鷲見　正子
香芝市　大内　朝子
和歌山市　楠見　章子
三田市　久保田千代
松江市　川本　畔
堺　市　志田　千代
鳥取県　西原　艶子
富田林市　藤田　泰子
和歌山市　土屋起世子
奈良県　渡辺　富子
大阪市　板東　倫子
八尾市　井尻　民
横浜市　福田由美子
倉敷市　家守　政子
倉吉市　野口　節子
東大阪市　田中美弥子
八尾市　生嶋ますみ
八尾市　村上ミツ子
大阪市　町田　達子
鳥取県　吉田孔美子
川崎市　和泉あかり
鳥取県　土橋　睦子
鳥取市　徳田ひろこ

耳よりな話宇宙から届く
喜怒哀楽女一生米を研ぐ
これからが勝負女の爪を研ぐ
是非の問い少し歩いて消してくる
スイッチをこまめに切っているくらし
今さらと思う歯磨き念を入れ
反省を促すようにレモン風呂
風も凪ぐ傍観者と決めてから
本能をひた隠しするバラの刺
揺れ動く心の隙間うめて春
リストラで開いた店の運不運
会者定離願いは一つ爽やかに
遺言に書こう至らぬ母でした
この位好きと両手を丸くする
透明になれたかレモン一雫
段差ない三社めぐりのバスツアー

鳥取市　録沢　風花
今治市　塩路よしみ
鳥取県　小谷はるみ
西宮市　牧渕富喜子
堺　市　桜沢　千世
横浜市　秋元　和可
寝屋川市　籠島　恵子
大阪市　星野きらり
出雲市　園山多賀子
和歌山市　松原　寿子
横浜市　田中　笑子
大阪市　本間満津子
寝屋川市　岸野あやめ
寝屋川市　平松かすみ
西宮市　門谷たず子
大阪市　津守　柳伸

希久子さんの句―考えても、悩んでも解決のない迷いを人間は背負っている。年齢のおかげで落ち込む事はない。明日の風まかせで軽く行こう。間違っても人間だもの。**みさ江さんの句**―「去る人日々に疎し」故人を偲ぶ祈りも、年々歳々、人同じからず。きれいに割り切って流されねばならないときもある。**充子さん句**―たかが足袋といえども和服の生命。見えないところの神経の届きに頭が下がるおもい。**能子さんの句**―スロータイプは無駄もあるが、意外に何でもよく知っている。昨今の高齢者は優雅でお金持ちもある。ゆっくり、ゆっくり、安くて良いものを物色しているのである。

バッグ

野坂　なみ選

札束を入れるバッグを持ってゆく　螢
おばんとは言わせたくないデイパック　早智
お土産を期してバッグを囲む子ら　順風
通学のバッグ漫画を忘れない　あずま
セールスのバッグに詰めてあるお世辞　正剣
バッグよりリュックを選ぶ母の肩　英子
七人の敵とまみえているバッグ　清史
見る人が見れば一目で偽シャネル　あやめ
搭乗のバッグ探知で待たされる　慕情
団欒を護ってくれたエアバッグ　純子
ブランドのバッグのローンつらくなる　東吉
愛いっぱい詰めたバッグの色は赤　正雄
着メロがバッグの中で騒いでいる　和枝
ブランドのバッグを持って河内弁　一壺
ハローワークバッグの中のにぎり飯　柳弘
単身赴任バッグに家族詰めている　健一
放さない中身気になる頭陀袋　(保)絹子
闇魔さまへ頭陀袋から付け届け　ツネ
持つ人が持てばバッグも高価めく　さち子
アロハの風も詰めて帰った旅鞄　俶子
家計簿に妻のバッグはのってない　一風
躁と鬱バッグにつめたひとり旅　寿美
リストラのバッグいっきにくたびれる　千里
秀才はバッグの中を覗かせず　たもつ
プライドにバッグの口が締まらない　洛酔
先輩がサンドバッグに見えてきた　万年
父のバッグ妻の重さと子の重さ　富子
定年の今日から所在無いバッグ　充子
トメの名の信玄袋家宝です　四郎
バッグ代りクロネコヤマト後や先　勝視
いそいそと罪入れ替えに持つバッグ　哲男
家出にも使ったことのあるバッグ　保州
春の風春のバッグに詰めかえる　あずき
十人の女に十のバッグあり　ちかし
古バッグ捨てて出発点にする　扶美代
ばあさんの全財産と言うバッグ　妻子
個性あるバッグで美しく老いる　日枝子
佳
バッグから離婚届が顔を出す　霜石
娘のバッグ覗いてからの不眠症　重人
外務省のバッグを開けたのは真紀子　妻子
逢いにゆく手のぬくもりを知るバッグ　朝子
お婆ちゃん手提げ袋が危いよ　(禍)輝夫
人
旅立つ日バッグに詰めるありがとう　芳郎
地
ルイ・ヴィトン同士目線を合わさない　霜石
天
念仏が聞こえる　私のバッグ　政岡日枝子
軸
幸せを袋につめて返し縫い

もう

増田　紗弓選

もう切るねから始まった長電話　純子
もう一度だまされてやる母の慈悲　あずま
ランドセル放る音してもう居ない　あらた
風評はもうたくさんと牛は言い　(九)
もう一度咲かせてみましょ胡蝶蘭　美弥子
嫌な顔もう知っているコンパクト　ひかる
もうとまだ使い分ける紅の色　富子
もうとまだ往き来している紅を刷く　寿美
他人さまは簡単に言うもう一歩　霜石
もう一度言わせて置いて断られ　不二
オークションもう一声に煽られる　慕情
もう少し端折って欲しいご挨拶　尚士
道草はもう許されぬ持ち時間　岳水
もう二十歳権利ばかりを主張する　愁女
もう一杯飲めば天下を取る屋台　孝雄
これ以上言うと心が鬼になる　みず帆
もうとうに赦したままで疎遠なり　さち子
一流が潰れてももう驚かぬ　保州
もう少し生きろと麻酔から醒める　順子
もう古い事は言わずに朱に染まる　敏子
もう仕舞うとこがないのに買うてくる　伊津志
もういいかい鬼はとっくに逃げている　早智

ローン完済もうなくなった背の荷物　一　風
諦めが早くて風に逆らわず　日枝子
もう誰も私を知らぬ故里の駅　あずき
もうとまだ使い分けてる生き上手　強　一
もう少し出世払いを待ってやる　周　信
もうだめと思う心に負けている　一　壺
もうカメラ目線を使う三歳児　ゆきの
もう一度聞くがと父の目が厳し　秋　星
徘徊の親看取る子ももう白髪　あやめ
もう駄目だめだめだと息してる　照　彦
四度五度妻にも角が生えてくる　兵八郎
もうあきた言うほど貯めてみたい金　セツ子
もう一度自分のために咲いてみる　千　里
もう一歩進めと風が背なを押す　淞　丘
春近し脱皮するまでもう少し　千　代

佳

もう少し余生の風と舞ってみる　扶美代
もう済んだことにする人　できぬ人　たもつ
もう一回り大きくなれと子を放つ　玉　恵
もう一度振り返らせて子を送り　寿恵子
目ではもう許して口にせぬ頑固　朝　子

人

勘のよい奴でそこらにもう居ない　しげお

地

限界を超えて仏が鬼になる　慕　情

天

もう少し仏待たせて身づくろい　吉岡　修

軸

和の中をもう抜け出せぬ春の風

三好　専平選

神の目に止まらなかった絵馬である　扶美代
警官に会えば自然に目が逸れる　慕　情
暖衣飽食目の輝きが失せている　保　州
新聞でいつもお目にかかっています　半　覚
小雨ぽたぽた野良犬の目に負ける　力
目の奥にまだ燃えるものちゃんとある　みず帆
ロボットの目にも涙が出るのかな　愛　論
真実を語る目熱く燃えている　照　子
目標にまだ行き合えぬ回遊魚　岳　水
ふんふんと目ン玉テレビ見てる妻　みね
目隠しをされた貴方の手が温い　昌　鼓
指の先目があるように点字読む　悦　男
目の動き見えぬ不気味なサングラス　玄　也
網の目をくぐってずるくなる魚　正　子
目に見えぬ多くのものに支えられ　活　恵
目も馴れて奇異に思わぬ茶髪の子　東　吉
目を皿に就職口を探してる　妻　子
笑い過ぎ目尻の皺が深くなり　ゆきの
目の青い子を抱き留学から帰る　棲　世
日曜の朝だけパッと目が覚める　霜　石
しっかりと目を見て話す子に育ち　たず子
一目惚れ以来頭が上らない　和　輝
目も耳も達者で卒寿越しました　虹　汀
目障りのブルカを脱げば青い空　(植)輝　夫
避妊具を買えず目薬買ってくる　一　花
病み上り秋刀魚の煙目に沁みる　宗　明
贔屓目に見ても美人に程遠い　俶　子
寂聴の講話に落ちる目の鱗　周　信
四季を盛る京都の料理目で食べる　彩　子
妻の目があかんあかんと言っている　重　人
目刺し焼く酒は一合もあればよい　靖　巳
よくわかる目印付けて傘を持つ　照　彦
殺伐の世相をなげく埴輪の目　道　子
二つも目持って真実見抜けない　たもつ
リストラを告げる男も目に涙　淞　丘
俎板の魚に一瞬目を剥かれ　(保)絹　子
落選に片目のだるま忘れられ　徳　三

佳

模様編みの一目一目にある思い　さち子
目で習い舌でおぼえた母の味　栄　子
捨てられたことを知らない仔犬の目　あずま
不ぞろいの糸目で愛を縫いあげる　ひかる
目の前でUターンする福の神　正　雄

人

象さんと話す子の目に檻はない　度

地

人間が見えてくるまで目を洗う　大　吾

天

目立たずに一輪の花胸に咲き　藤井　郁代

軸

死んでゆくアフガンの子の大きな目

初歩教室

題―勝っ

吐田公一（はんだきんいち）

初めて川柳をなさる方にとって川柳はとっつき易くもあるが、いざ始めてみるとなかなか作れないと言うのが実状のようです。これは当然のことであり、どんな趣味でも最初はたやすく取り組めるのだが、少し解り出すとだんだんむずかしくなり深みにはまり込む。

十七音字の世界だけに詠むのはいと簡単と思われ勝ち。だが考えてみると十七音字の中にユーモアや穿ちや人情の機微など詠み込み、これを読む相手に解ってもらおうとするには相当な勉強（一つの表現をしようとする事柄に対して、色々な角度からの考察や言葉の選択など）をしなければならないこともまた否めない。

添削句

○二十五の楽日決戦我慢勝ち　忠子

栃東関のことと思うが、上七が冗長

▽張り手にも耐えて賜杯の重さ知る

○五人姉弟勝っているのは孫の数　政子

原句では誰が勝っているのか分からない。

▽末弟が勝っているのは孫の数

○勝つよりも負けねばならぬこともある　三喜夫

具体性に乏しい

▽勝つよりも負けて嬉しい子の育ち

○塾通い受験戦争勝つために　稔

説明句と言える。

▽必勝を絵馬にもすがる受験生

○体力じゃ負けるが口で勝ちにいく　照彦

押し売りや取り立て屋を想定すると、

▽恐持（こわもち）てへまくし立ててる勝気です

○不況にも勝つ精神は持っている　はるみ

全くの説明句

▽荒れた手も不況に勝てぬ小商い

○簡単な勝負じゃんけんぽんで決め　孝明

○ジャンケンに勝った負けたと弾んでる　ゆきの

○ジャンケンに勝って選択権を得る　サト子

○じゃんけんぽんぐうしか出さぬ児と勝負　栄子

〝勝つ〟の題に対してジャンケンを詠まれた句がこの外にも多数あった。しかもどれも似たような内容の句で、着想の乏しさが目立った。

○こんちくしょう花粉に勝つ術教えてよ　益子

上六の強調が冗長。

▽花粉には勝てぬと医者も匙を投げ

○言い勝って心の風に論（あげつら）われる　ヨシ枝

いい句ながら誤字はいけません。論は諭されるの誤りでしょう。

○勝ってみてはじめて知る狭き知恵　利子

中六で語呂が悪いうえに、この句の場合には内容から言って知った……。一語を大切にして頂きたい。たった十七音字だから同じ内容をもう少し川柳らしくすると、

▽負けて勝つこの世を丸く生きる術（すべ）

○言い負けて実は勝ってるお母さん　純

実はの表現が説明句にしている。

▽屁理屈へ負けてやってるお母さん

○まけといてかけ引勝負の先手打ち　いたる

上五は不要

▽かけ引きの勝負へ根回し先にする

○お手合せ一瞬にして覚る勝　㈢八重子

川柳はできるだけ詠んだ情景が彷彿と浮ぶように具体的に

▽一瞬の油断を突いていた竹刀（しない）

○諦めず勝る機能を探ってる　栄呼

できるだけ具体的に詠むと解りやすい

▽勝てる夢抱いて耐えてるボクシング

○この勝負あの世で待つと逝った姑　てる代

同じ内容を

▽あの勝負預けたままで姑は逝き

○鼻の差も人間だけが大さわぎ　恵美代
当然すぎる着想です。
▽鼻の差の万馬券からハワイ行き
○勝ち負けは言わず聞いとく母の愚痴　美代子
中七を言い代えてみると、
▽勝ち負けにこだわらず聞く母の愚痴
○誘惑に勝たねばならぬ浪費癖　左余
原句の情景は堅い。謹厳実直型もいいが少し男の弱さも詠めば——
▽誘惑に勝てない性の女癖
○ライバルに勝ちたくて絵馬重ねてる　裕峰
ライバルより受験生を持ってくれば……
▽三浪が今年も絵馬の神頼み
○テロリスト恐怖に打ち勝つ心境は　郁代
ブッシュ大統領の強腰を詠むと、
▽テロに勝つUSAの底力
○チョコの数勝った負けたと兄弟で　満子
上句と下句を入れ代えてみるといいのでは。ただバレンタインの句は他になかった。
▽兄弟で勝ち負け競うチョコの数
○スタートで気合いが勝っていた相撲　ふりこ
相撲の場合スタートとは言わない
▽立ち合いの気合で勝っていた相撲
○談合の勝ち目なくして長話　トシエ
下五が冗句
▽入札で勝って下請け丸投げに
○勝つという言葉を信じ逝った人　喜子
戦時のことと思うので
▽勝つことを信じて散った特攻機
○勝ち気な人言うことごとに気に障る　美恵子
直截な表現のため説明的になっている。
▽いちいちと言葉に角がある勝ち気
○すり傷も苦にはならない勝ち相撲　彰雄
中七を代えてみると
▽すり傷の痛みも消える勝ち相撲
○奥の手の涙見せられ勝ち目なし　つよし
背景が浮ぶようにして欲しかった。見付けはいい。
▽奥の手の涙に負けた痴話喧嘩
○老ゆるとは勝つことでない処世術　和友
上五に一考が欲しかった。色々な言葉を引用してみるといい。上六になるが
▽長生きとは勝つことでない処世術
○良く揃うアイスダンスに金メダル　和香
説明句。今回のオリンピックでは投句後の現象だから無理もないが——（参考句）
▽談合で貰う優勝だってある
○勝ち負けよどこ吹く風の野草たち　弘之
〝よ〟でなくて〝も〟とすればよいのでは。
○六十路坂年には勝てぬ神経痛　錦
六十路坂と年（老年）は同義語
▽神経痛歳に勝てぬと医師もいい

佳句

勝てたけど気迫で敵に負けている　さだを
座布団が舞う金星の勝ち名乗り　恵勇
リストラをしなけりゃ勝てぬこの不況　和輝
勝つまでは止めない父のヘボ将棋　章司
ライバルに勝って射止めた妻だけど　侑子
追い風に乗って勝運引き寄せる　昌鼓
諍いに勝って空しさだけ残る　美弥子
美酒の味覚えた駒が走り出す　鈴美
負けて勝つことを若さはまだ知らず　秋星
勝ち目ない勝負に挑む天邪鬼　ヤギエ
屈辱の思いをバネに金メダル　ふみ
日の丸を肩に選手の成田発　(山)雅子
角番を脱出長い喪が明ける　みず帆
パチンコの一度の勝ちが嵌り込む　比佐子
押し売りにねばり勝ちする年の功　智加恵
五目飯真似して母に勝てぬ味　好勝
ふり向かぬ亀ゆっくりと勝つチャンス　敏子
勝敗で流す涙は次の糧　更紗
（選手心情の極み）
阪神がたまに勝ったら休刊日　九好
（ファンらしい句）
カアチャンに勝って何にもしてくれず　輝夫
（ユーモアたっぷり）

私の句

○．（コンマ）○三世界の壁勝てず

秀句鑑賞

同人吟　米田恭昌
―3月号から

川柳は省略の文芸。昔趣味の8ミリ映画の編集のカットに苦労し、今は川柳の省略のための言葉選びに苦労しています。私が川柳を始めたきっかけは8ミリ映画です。その経緯はまたの機会にするとして、短期間での秀句鑑賞は私如きでは至難の業でした。各自が十分自選され、そして主幹の選を通り抜けて来た名句一二七〇句、その中から私なりに私の好きな句、二十二句を選ばせて頂きました。

総入歯寄れば噛みつきそうに置き

(故)菱田満秋

噛みつきそうに―とは言い得て妙、妻と大笑いしました。これぞ川柳と言う一句です。さりげなく置かれた入歯に、幼児はギョッとするでしょう。想像するだけでも愉快です。

すき焼を食べ狂牛の夢を見る

井上喜酔

何かしら可笑しく笑ってしまいました。そしてゾッとしました。ブラックユーモアの句です。どんな夢なんでしょう。恐いもの見たさ、見たいものです。

娘五人欲しいと思う要介護

井上勝視

不安、とまどい、期待の思いをもって介護保険がスタートしてはや三年目に入ります。娘だとお互い遠慮せず、心苦しく思わないですむのも分りますが、娘らは「ジャンケンポンかわりばんこにする介護」(美代子)いともクールに割り切っています。だからいいのかも。

釈迦の手は私あなたは孫悟空

古今堂蕉子

このての夫婦を詠んだ句は時々見かけるが、釈迦の手と孫悟空をもって来た所が面白い。蕉子さんにかかると御主人の行動全てお見透しなのです。父上の故栞先生に一番よく似ておられるとの評判、ますます楽しみです。

埴輪の口からオカリナ聞こえそう

天正千梢

古代風景にはオカリナの音がよく似合いそうです。人物埴輪の口や目はオカリナの指穴を思い出させます。この着眼まだまだお若い。もう年齢だなど言われず頑張って下さい。

あんた誰介護してますあんたの子

江見見清

露芳さんの「ドナタハンと聞かないでくれわしやがな」を思い出しました。痴呆老人を介護するという厳しさの中にあって、ほのぼのとしたユーモアが感じられ救われます。

デイケアー結んで開いた手の皺よ

山門幸夫

仕始めは空ろな目で「結んで開いて」をしていた老女の顔も、やっているうちに表情が出て来て、やがて明るい顔になるそうです。手の皺よ―に哀感がしみじみ伝わって来ます。

長期戦上手に手抜きする介護

生嶋ますみ

少子化の長寿社会、老々介護の時代が来つつあります。適当に手抜きをせねば、介護する方が先に倒れます。先が長いのですから。

かあさんが笑い家中温まり

太田昭

「母さんが動けば温い風動く」母さんはどこにいても、いつも温いのです。そんな母さんが家族の輪の中で笑えば、家中温くなります。

ゴミ分別やっと覚えたお父ちゃん

鷲見正子

何故こうもお父ちゃんは覚えが悪いのか。私はまだ時々間違って妻に叱られています。

心配の種こそこそとする五臓

海老池　洋

五臓とは心肺肝脾腎、従って消化器系ではないから、心配の種とは―なんて理屈で考えると面白くなく、ここは矢張り昼食べた吉野屋の牛丼が心配の種で、狂牛の肉がこそこそ動いているのかも知れません。

宝くじ今年最初のごみに出す

多々納　テル子

今年最初の―がこの句の面白い所。当るはずはないと思いつつまた買ったジャンボ、矢張り今年も駄目だったのでしょう。でも九月二日敗者復活抽籤があります。お楽しみに。

義理チョコがまだ男性と見てくれる

籾山　隆盛

当方とうとう義理チョコもなくなりました。本命の妻から「ハイ義理チョコ」と貰っただけでした。義理でも貰えば嬉しいもの。生真面目な隆盛さん、ひょっとしてなんて決して思わぬように。

五感健在三猿もむずかしい

稲葉　冬葉

五感とは触嗅視味聴覚を言います。五感不満足でも地獄耳もあれば第六感（勘）もあります。要は心の問題です。自然体でいきましょう。きっと仲良くつきあえるでしょう。

分け合った喜怒哀楽の五十年

木村　富美子

故川口弘生医師の句「生きて行く重荷夫婦で振り分ける」を思い出しました。喜怒哀楽は勿論、一本のバナナさえ分けあっておられた睦まじいご夫婦だったのですね。果して我が夫婦は―と反省しきりです。

挫折する背中が丸く堕ちて行く

小寺　花峯

背中が丸く堕ちて行く―にどうしようもない挫折感が極まっています。丸くなった背すじを伸ばしましょう。きっとプラス志向になり明日への道が拓かれるでしょう。

元日の雪粛々と胸に降る

青山　久子

胸に降る―とあるからきっと何か思いがあるのでしょう。が前夜までの忙しなさが静まり、新しい年が明けた朝、音もなく雪が降っていると本当に心が洗われ、気も一新されます。外は雪、炬燵の中で賀状を―いいですね。

心得て嫁はすぐさま卵酒

吉村　一風

風邪をひいてまで「酒」。さすが一風さん。奥さん心得ておられます。一風さんには嫁さんは居られない筈で、老妻でなく嫁としたのは一風さんの願望でしょうか。

娘や孫の便利屋になりまだ元気

津村　志華子

頼られているから元気で居れるのです。我が家も娘に全自動と言われて妻がこき使われています。まだまだ元気で頼られて下さい。

笑ってるうちは長生きできそうだ

三好　専平

笑えばNK細胞が活性化して免疫力が増すと様々な研究結果が発表されています。アメリカではユーモアセラピー学会もあります。日本でもホスピス医療の先駆者柏木哲夫医師が、ユーモア川柳に笑いの効能を見出し、死を見つめるガン患者と川柳を通して接しておられます。笑っているうちは長生き出来ます。

背筋のばしてもう少しだけ歩きたい

青戸田　鶴

うつむいたままで終ってなるものか

近藤　佳子

うつむけばマイナス志向に走りがち。背筋伸ばして顔を上向ければ三徳があります。若く見える、つまらぬ事が脳裏から消えプラス志向になってくる。従ってNK細胞が活性化して免疫力が強化する等、「笑う」事と共に長寿の秘訣です。うつむいた顔を上げましょう。そして背筋を伸ばしましょう。まだまだ元気に歩けます。

秀句鑑賞

―水煙抄

―3月号から

白根ふみ

完璧を言う不器用の鉋屑

藤田芳郎

だんだん薄くなって、美しい鉋くずがひらりと舞う。研ぎ澄まされた心と相反して、ぶきっちょな語り口の匠が窺えます。

新しい定期と降りる春の駅

国米きくゑ

年度更新のフレッシュな情景を連想し、不景気な昨今に新風を感じます。

両親を看取り深まる夫婦仲

小林久美子

長寿国、大切な親、姑を介護することは、言葉では言えないご苦労があったことと察し、感謝も籠めて深まるものと思います。

墨汁の滲む賀状が温かい

鈴江純子

ワープロ、印刷が多いこの頃、直筆で届く賀状は、やっぱりこころ温もりますね。

出不精が誘ってくれるから出かけ

秋元和可

余程いい事があるか、急に気分転換か、兎に角興味しんしんです。私も行きたいです。

半分にしても嬉しいことを言い

長島亜希子

嬉しいことは、得てして少ないのに、割り引いても嬉しいとは、夢が膨らみますね。

ど根性だんだん涙もろくなる

両川無限

不屈の精神で生きてきた人生、余りにも悲しいこと、苦しいことに出会い過ぎ、加齢と共に、それだから人間だと思います。

土の声聞ける農夫になりました

安達厚

ここまで来られたのは、人生そのものだと思います。私は鉢づくりだけでも大変ですのに、素晴らしい土の声が聞こえてきます。

これからの策を練ってる靴の紐

猪森スミヱ

今日のドラマを靴の色も考えながら、楽しく練っている。自分の足で欲するところまで行けるのは幸せですね。

一本の杖は私の背骨です

田中トシエ

いちばん大切な部分となっています。

徳だわら踏んで余生を暮らしてる

鳥羽直市

おまけの余生、だが一度しかない人生を有意義に送ることは大切です。私もいつも徳だわらを踏んで感謝の日を送っています。

腕力を甘く見たのか曲がる釘

高橋宏臣

本当ですね、私も無力を試されることが、しばしばあります。高橋さんの場合はたまたまですよ。

気がつけば慣らされていた使い捨て

円増純子

懸命に働き気が付けば窓際族になっているなんて、人の世は難しいものですね。

人生に答はいらぬ生きている

田村邦昭

この世に生を受け、生かされていると思えば、あまり追究すると分からなくなるので、この歳になると日々感謝ですね。

ヒーローもいつかは挽歌を耳にする

乾春雄

歩も飛車も同じ夕焼けもっている

福西茶子

人生の終焉は等しくやってきます。嫉妬、傲慢など煩悩になやみながら、最後は美しく夕焼けてゆきます。

■句集紹介

『花絨毯』

斉藤 カカ著

波多野 五楽庵

川柳塔みちのく二代目主幹斉藤カカさんが百句集を出版された。薄紫の表紙に肥後和香子さんの書かれた題名〝花絨毯〟の字がすばらしい位置をしめている。

〝花絨毯〟とはカカさんの代表句でもある。

花絨毯踏まねば帰る道がない

この句の中にある余韻が川柳の醍醐味であり川柳なればこそ表現できる静なのだ、と思っている。もっと早く句集を出すべきだったと思っているが、人生の円熟期にある今だから一句一句が呼吸をしている百句なのだと思っている。

人間が好きで教師をしています

一行の口語体が、なんのてらいもない一行がカカさんの人生を表現している。農業関係の高校校長で終った長い教員生活、しかもこの教育の廃退している時に、自分の持てる総てを子弟に託して来た情熱は脈々と受けつがれて行くに違いない。こんな先生にめぐり合えた生徒は幸せだったと思う。

赤とんぼ止まった肩が軽くなる

この軽くなるを表現できる力量は半端でない。肩に止まった赤とんぼをじっと見ているカカさんの視線は俳人一茶のような純真な目であったのである。重さを計量できないとんぼであるが、じっと見ているカカさんの心はひたすら童心になっていたのである。

千本を伐り一本の植樹祭

内容は限りない風刺であると同時に、森を愛し、緑を愛するカカさんの代表句でもある。数年後この句とそっくりな句が発表され、どこかの大賞になった事があるが、盗作される程印象深く充実した句でもある。

りんご一本植えて私の現在地

私の好きな酒を愛した隻眼の歌人、山崎方代は電気もガスもない生活の中で、小屋の入口の石榴の枝に留守と言う札を下げていたと言う。留守の札を返すとやっぱり留守と書いてあった。方代の歌に

留守と云う札を返すと留守である

そしていつでも留守の方代

がある。カカさんは留守の方代ではないが弘前でも庭にりんごの木を植えている家はない（農家は別として）。カカさんは石榴ではなくりんごの木を植えた。やがてその枝に留守の札がかかる日もあろう。その時はカカさんの廊下で私と酒を酌みながらとんぼの話をしていることだろう。

この紹介文も残り少なくなった。

おにぎりを握り続けた掌が丸い

この土と生きるプライド持ち続け

虎落笛亡父に逢いたくなりました

負け犬の動悸をそっと抱いている

まだまだ書きたい句が沢山ある。カカさんはきっと川柳塔を支える一人になるだろう。

昭和五十七年川柳塔賞作家

噫 奥山美智子さん逝く

黒川紫香

二月十三日早朝、突然FAXで訃報が届く。ご主人奥山洋介さんから美智子さんが亡くなられたお知らせ。前から肝臓が悪く入院されたので病院へ二度、退院されてからお宅へ伺いましたが、元気なお姿を見て来ただけに言葉もなく唖然とするばかりでした。

美智子さんと昭和五十年代初期、大鉄川柳会の米田耕三さんに誘われて、尼崎市西部にあった蓬川公民館で開かれていた句会に参加し彼女にお会いした時、まだ若く可愛かった。小学二年から病に犯され言語が不自由なのに、終始笑顔で作句しておられたのが印象に残った。耕三さんが亡くなった後、先輩格の北浦牧郎さん（元ふあうすと社同人）が場所も移して生島公民館で始めたのが今も活躍している尼崎いくしま川柳会で、私も牧郎さんの補助として参加し、弟分として尾浜川柳会も出来、美智子さんも両方の会員だった。

太陽の笑顔を独り占めにする

が五十七年度川柳塔賞に選ばれ表彰されてから作句が本格的になり、続いてふあうすと誌でも特選句が発表されると両社から同人への誘いがかかり、結局身体障害者であり有望な作家と言う事で、双方の主幹の了解を得て異例の両社同人となったいきさつがある。当時の作品

父の死でわたしの視野が開けて来る

たわいない噂に風も笑いだし

笹舟を流した川は地図にない

等である。その後、老いた私を労わり助けつつ私の赴くいろんな会に同席された。特に日川協の全国大会では私が選者として出た千葉を始めとし仙台、名古屋、津、奈良、和歌山、米子、松山、長崎、熊本等の地方へその他鳥取鹿野、米子、岡山大原、島根出雲、木次等回を重ねた。

子供の頃から聴力を失われたことに屈せず川柳を楽しみ、手話で市から委嘱を受け講師もされていた。ご主人も同病で優しく、グラフィックデザイナーだから当然字も絵もお上手で、毎年戴く賀状には必ず美智子さんの似顔がマンガ風に描かれてあった。

夫婦共お酒が好きで息子さんが二人あり明るい家庭を作られていた。特に美智子さんは猫が好きで家でも飼っておられた。道で猫に出会うと忙しくても暫く屈みこんで相手をするほどだったが、作句の中に猫がないのが不思議である。

天性の勘と相手の口の動きで判断され、私との会話でも余り不自由なく、句会で選者から自分の句を読まれた時、私の腕をつついて代わりに呼名をしろ言う合図がある。

地方へ行った時のいろいろな逸話もあり、思い出がつきない。

沈丁花亡母の面影抱いて咲く

空想をいっぱい詰めた種袋

別れ際優しい言葉添えておく

宝石の輝く嘘が見抜けない

化身とも言える鏡を光らせる

楽しんでこの世去らねばあほらしい

戒名　法智院妙歌日美信女

享年　五十八歳

片っぽも両手にもなる杖とられ　紫香

こころからご冥福をいのります。（合掌）

□薫風川柳集大成

橘高薫風川柳句集

沖積舎刊　四六版・三五四頁・上製
定価　八〇〇〇円

□半世紀記念出版

橘高薫風川柳文集

沖積舎刊　四六版・四三六頁・上製
定価　八〇〇〇円

◎お申込みは川柳塔社事務所へ

〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
川柳塔社
電話　〇六―六六二九―六九一四番

国民文化祭・とっとり2002

応募受付期間　4月1日(月)～6月28日(金)
作品は未発表　各題2句

宿　題（事前投句）
「砂」　黒沢かかし選
「ふるさと」　竹本瓢太郎選
「学ぶ」　本庄　快哉選
「鳥」　河内　天笑選

宿　題（当日投句）
「果物」　吉原　辰寿選
「輝く」　新畑ひろし選
「静か」　荻原　柳絮選

応募料　1,000円
発　表　川柳大会（入選発表・当日句・選評）
14年10月26日(土)
詳細は3月号P89に掲載

問い合わせ先　第17回国民文化祭鹿野町
実行委員会事務局「文芸祭」川柳係
〒689-0405 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1517
TEL0857-84-2299　FAX0857-84-2598

笠岡市制施行50周年記念
第3回井笠川柳会笠岡大会

と　き　5月25日（土）
開場　午前9時30分　開会　午後0時30分
締切　午前11時　閉会　午後4時30分

ところ　笠岡市保健センター（ギャラクシーホール）
岡山県笠岡市十一番町1－3　TEL0865-62-5700

第一部　「輝く」泉　比呂史・小島　蘭幸　共選
(当日投句)「挑む」柏原幻四郎・濱野　奇童　共選
特別課題　当日発表　高木　勇三　選

第二部(事前投句)
「記　念」橘高　薫風・土居　哲秋　共選
「耐える」小松原爽介・岡田　千茶　共選
「悩　み」梶川勇次郎・小野真備雄　共選

会　費　2000円（昼食・発表誌呈）

出　句＊第二部　各題2句並記（用紙自由・B5程度）
住所・氏名・電話・所属結社名を明記
会費2000円と共に**4月末日**必着で送付のこと
＊欠席投句は1000円送付のこと(大会誌後日郵送します)

投句先　〒714-0081 笠岡市笠岡507-68 井笠川柳会
TEL0865-63-5858　FAX0865-63-6131

賞品・賞状　第一部第二部　各々1位に石碑贈呈5名　知事賞他15名

前夜懇親会　とき　5月24日（金）午後6時～午後8時の予定
ところ　笠岡グラントホテル　TEL0865-63-0111
会　費　6000円（4月末日までに申し込み）

懇親会・宿泊斡旋　申込先　井笠川柳会

本社　三月句会

三月七日(木)午後五時半
アウィーナ大阪

四ヶ月振りの夜の句会であったが、寒い中108名の出席者があり、例年通り、主幹以外、女性陣を揃えた雛まつり句会は、暖かい会場でにぎやかに開催された。

二月に亡くなった同人奥山美智子さんと、その日の朝訃報の届いた理事菱田滴秋さんのご冥福を祈り一分間の黙祷を捧げる。

お話は木本朱夏さん。中国の大学へ年に一回、ボランティアの客員教授として日本文化を紹介されている知人のことを話す。

今回は川柳を紹介し、川柳を通して日本社会、文化を理解してもらおうという講義なので、資料を提供したと言う。教授自身も図書館で勉強され、新聞川柳から世相を切り取り2時間の講義をされた。俳句、短歌を知っている中国の学生はいたが、川柳を知る人はなかったと言う。

川柳とは何かをわかりやすく説明し、実作をしてもらったそうである。

本格川柳、現代川柳は残念ながら理解された句は数少なかったというが、将来には期待するものがあると結ぶ。

月間賞は大谷篤子（吹田市）さんに輝く。

（司会―遠野）（記名―朝子・澄子）
（受付―睦子・保子）（清記―義）

席題「わくわく」　太田扶美代選

札束の嵩とわくわく比例する　隆盛
この歳のわくわく心臓に悪い　金太
ランドセルも机も買ってもらったよ　楓楽
花の方もやっぱりわくわくしてる春　求芽
わくわくと開花予想を聞いている　泰子
ピチピチのヘルパーさんがきてくれる　千代
わくわくと三代揃うて雛遊び　(矢)五月
さあ明日わくわくします退院日　金太
わくわくと陰で揺れてるかすみ草　萬的
皮算用すませホワイトデーを待つ　楓楽
混浴でわくわく誰も来てくれぬ　大輪
わくわくがいらいらしだす花時計　重人
わくわくと男の嘘に乗せられる　諷云児
前ぶれを信じわくわく待っている　典子
もう一度わくわくしたい恋したい　弘風
わくわくを探し風船空へ発つ　希久子
核ゼロのその日紙面も踊ってる　ダン吉
野仏もわくわくしてる土筆の芽　哲男
春一番皆わくわくで留守隊長　賢子
わくわくと土の中にもある宴　鐘造
妻の留守今日はわくわくしています　大輪
啓蟄にわくわくしてる恋の虫　柳弘
新車くるわくわく門の前で待つ　朋月
恋泥棒わくわくさせてそれっきり　柳弘
わくわくとさせてあっさり背を向ける　房子
青春のわくわく詰めた箱である　義子
わくわくと恋愛物を読んでます　しげお
ホワイトデー少し期待をしてしまう　美代子
三月のページに弾むものがある　美代子
ゴーギャンの絵と逢えるわくわくの旅　天笑

佳

憧れの刻よ視野を朱に染めて　森子
わくわくは見せず夫に頼む留守　(矢)五月
わたくしがわくわくすると沈む人　達子
悟られぬようにわくわくしています　利昭
わくわくは今日出来上る処女句集　千代

人

今日はどんな日わくわくと目を覚ます　みつ子

地

わくわくと娘の便利屋に徹してる　篤子

天

わくわくが息の継ぎ目に顔を出す　つづや

軸

空回りばかり私のワクワク

兼題「マドンナ」　鴨谷瑠美子選

マドンナは飽き飽きしてる赤いバラ　充子
マドンナの用心棒をたのまれる　螢
日に一度マドンナに逢う若返り　照子

マドンナの抱くおもかげは僕でない　シマ子
マドンナも今では65キロなり　寿美子
マドンナと飲んで浮かぶは妻の顔　欣子
マドンナが二人どちらも譲らない　英子
マドンナを真ん中にしてはずむ酒　いわゑ
人の好いマドンナに会ったことがない　義
マドンナの笑顔で喫茶よくはやり　利武
マドンナとなられるだろう愛子さま　舞夢
いい村だったマドンナも居た僕もいた　アキ
二重人格のマドンナが家に居る　冬葉
逆光線わたしもマドンナに見える　昭子
マドンナは魔性の女化身せり　(田)節子
悪女ぶるマドンナやっぱり美しい　洞庵
マドンナが動物園へ行きたがり　岳人
マドンナが老いて笑顔が磨かれる　ダン吉
態度が大きくなってきたマドンナのにゃんこ　天笑
見なければ良かったマドンナの素顔　大輪
遠い日のマドンナに会う野球帽　ダン吉
バラ百本明日マドンナの誕生日　たず子
グラビアから抜けマドンナが歩き出す　雅文
オムレツをやくマドンナの目が温い　義子
生き方の素敵をマドンナと呼ぼう　扶美代
四十過ぎ僕のマドンナ満五歳　(矢)五月
マドンナの誇り都心に一人住む　はじめ
マドンナに騙されました二度三度　利昭
マドンナを探す苦労は疲れない　三喜夫
マドンナの窓マドンナのシルエット　泰子
マドンナが気になり仕事はかどらぬ　いわゑ
マドンナは一足先に衣替え　愛論

佳
マドンナも人恋しくて輪にはいる　千里
マドンナとラストダンスで蝶になり　文
マドンナの人気に家族遠くする　弥生
ケロッとした顔でマドンナ無理を言う　求芽
マドンナのバストあたりがまばゆ過ぎ　正雄
人
マドンナに聞けば何でも知っていた　岳人
地
空想の中マドンナがキスを待つ　つづや
天
マドンナとおなじケーキを買うてくる　伽羅
軸
マドンナの真っ赤な傘にみとれてる　千里

兼題「歌」　吉川寿美選

歌うたうように自分に聞かす独り言　満津子
ボソボソと歌うのは花嫁の父　充子
泣くでない千と千尋をもう一度　螢
海ゆかば歌うと亡兄の靴の音　アキ
歩いてる犬まで走り出すマーチ　文
耳をすますと聞えてきます亡母の歌　いわゑ
自分史の節目の歌の泣き笑い　朝子
孫を見る目できいている半次郎　保子
音痴とは知らず歌っているカラス　颯云児
勝ち進むごとに重みを増す校歌　求芽
みだれ髪女のいのち歌い上げ　隆盛
子守歌背中で聞いた母背負う　哲男
カナリヤが英語のうたをうたってる　日出子

花嫁の父の力んだ祝い歌　真理子
黒人霊歌の底に通ずる琉球歌　あやめ
水車小屋原田泰治とわらべ唄　伽羅
酔うほどに麦と兵隊歌う老父　千里
応援歌唄う日が来た甲子園　吐来
寄席好きとオペラ好きとで五十年　哲男
青春ははるか軍歌と労働歌　正坊
コーヒールンバで愛を育てことがある　澄子
雑草に碑を覆われて鎮魂歌　求芽
同期の桜しんみり歌う花吹雪　洋
青春は軍歌に踊らされた日々　恭昌
人間のエゴが歌わぬ川にする　弥生
青い背広で　ああ青春が舞い戻る　武庫坊
片方の耳で聞いてる妻の歌　鐘造
たった二人の家族の歌が揃わない　希久子
賛美歌が好き教会の椅子が好き　泰子
春の歌聞いた聞いたとつくしんぼ　倫子
玉砂利へ母の挽歌がうめてある　メ女
父さんの鼻歌が出る台所　朋月
佳
ふるさとに僕のララバイ満ちている　修
敗戦の痛みリンゴの歌で癒え　笛生
廃校の風に少年期の唱歌　洋
新しいあしたがほしいから歌う　颯云児
つくしんぼ大地の歌の音符かも　楓楽
人
風に歌雲に歌あり恋さなか　みつ子
地
おもちゃ箱の中で聞こえる反戦歌　大輪

天
視野は春花の音符と打楽器と　森子
軸
車椅子へ惜しまぬ母の応援歌

兼題「招く」　**神夏磯典子選**

こうなれば鬼を招いて厄払う　照子
春招く都会のウインドーショッピング　満津子
まだ生きて金婚式に招かれる　螢
リストラのため息もれる招き猫　茜
大嵐招く口火を切って去り　かりん
彼を招待父は立ったり座ったり　正雄
肩書きのある内は来る招待状　冬葉
遠慮なく招きたいとき父母はいず　かすみ
自己主張多くて不信感招く　達子
ここまでおいでやっとアンヨが前に出た　春
招かれて嬶天下の家と知る　弘一
半信半疑が招いた軽い自閉症　澄子
お食事券の罠へすんなり招かれる　天笑
客招くたんびに掃除行き届き　文
夕焼けが招くと森はほほ染める　義子
寂聴の風に招かれ明日生きる　弥生
招かれて形見の小紋陽の目みる　欣子
手招きの鬼の笑顔にふと油断　朝子
煮えきらぬ言葉が招く一波乱　朱夏
寝たきりの祖母へも届く招待状　千代
よい宴だみんな笑顔の招待者　たもつ
招いてもそっぽ向いてる福の神　みつ子
招待状の数だけ服は買ってある　美代子
春の睡魔がおいでおいでをして困る　楓楽
出不精を招くたんぽぽから便り　朝子
婿としての面接試験に招かれる　シマ子
お招きの明日へ着物だ金封だ　あやめ
御招待妻は何処でも行きたがる　伽羅
底冷えの街で屋台の灯が招く　睦子
流し雛海の彼方へ招かれる　泰子
桜が招くそわそわとしてしまう　希久子
春や春幸せ招く自己暗示　みつ子
佳
雛さまに招かれ喜々として出かけ　いわゑ
ご招待ポケットにジョーク詰めてゆく　篤子
福招く大きな耳のお婿さん　しげお
貧乏神あなた招いておりません　弘風
身の丈に合うたお招きなら受ける　朱夏
人
花好きの貴方を招く花を選る　鹿太
地
招いてはいけない人と朧月　森子
天
百年を生きて百人を招きたい　倫子
軸
こころよく招いてくれる花の風

兼題「呪文」　**西出楓楽選**

呪文の要領でラップミュージック　充子
改革の呪文が宙を舞っている　螢
ケセラセラそれが私の呪文です　泰子
しっかりと呪文をかける五寸釘　重人
呪文より花粉が怖い春の靴　英子
気休めに呪文唱えるテスト前　(田)節子
帰巣性妻の呪文が効いて来た　寿美
親子して呪文にかかり受験塾　(矢)五月
種があるからどんな呪文も効く手品　弘一
かがみよかがみ呪文唱えてマッサージ　かすみ
呪文かも知れない父の子守歌　鹿太
ぎりぎりで呪文となえる癖がある　扶美代
つまずいた誰かが呪文かけている　妙子
幼い日かけた呪文がまだ解けぬ　睦子
てのひらに呪文を書いて出番待つ　愛論
呪文あれこれ若さ取り戻せるならば　みつ子
眉につばつけて呪文を聞いている　金太
鶏肉も呪文をかけて食っている　朋月
カリスマも呪文となえて荒稼ぎ　はじめ
呪文では及ばぬXデーが来る　あやめ
受験票にばあちゃんにわか陰陽師　恭昌
ムニャムニャとつぶやくお悔みの呪文　朱夏
信じてた呪文さっぱり効き目なし　春
将来は医者だ医者だと呪文かけ　文
ドンマイドンマイ呪文のように内野席　哲男
綱紀粛正呪文で終らないように　保州
母さんに抱きしめられている呪文　朝子
振り向かぬ男へ呪文かけようか　希久子
掌に男を丸めこむ呪文　朱夏
養毛剤夫呪文をかけている　かりん
イチローもきっと呪文を唱えてる　たもつ
呪文間違え運が向いてくる　千歩
エプロンのポッケに呪文溜めている　舞夢

Eメール恋の呪文が宙に舞う　隆盛
佳
神さまの呪文で開く朱いバラ　澄子
念仏は己にかけている呪文　隆盛
呪文まちがえカボチャはベビーカーになる　寿美子
春風が恋の呪文をかけにくる　いわゑ
わたくしへストレス放つ呪文懸け　茜
人
嫁姑たがいに呪文かけている　千里
地
藁一本だけで束ねてある呪文　しげお
天
呪文のように一人ぐらしのひとりごと　倫子
軸
勉強勉強母の呪文の効き目なし

兼題「結　ぶ」　河内　天笑選

ほんとうと嘘を結んで生き延びる　螢
紅白に結んだものは美しい　瑠美子
ゴミ袋恥がこぼれぬよう結ぶ　真理子
神前で結んだ愛が綻びる　弘風
友へ累及ぶ話題に口結ぶ　久峰
結納も式も手軽にハネムーン　欣子
下手に手を結ぶとあとで泣きを見る　鹿太
起承転結びは妻がデンと居る　哲男
一輪車蝶々結びが風に乗り　かすみ
親と子と孫とを結ぶEメール　正坊
水引きの結び目ごとにある祈り　楓楽
金色のリボンを結び見栄贈る　公誠

平和宣言締結しても核がある　保州
政官財手を結んでた水面下　正雄
孫の髪やっと結べるぐらい伸び　伽羅
母の結びだ念入れてある宅急便　一風
結び目の固さに父の顔がある　睦子
わだかまりさらりと捨てて和を結ぶ　久峰
結び目が途中で緩む稚児の列　哲夫
角帯が女結びに仕切られる　文
五体投地仏と結びたい大地　茜
ネクタイは結ばず今はフリーター　伽羅
神前で結び家裁でほどかれる　弘一
お金がたまったら結び目をとこう　義
命綱主治医と固く結んどく　希久子
ひも持てば何でも結んでみたくなる　度
結び目を解けば孤独な風の中　森子
きれいごとリボン結びは解けやすし　泰子
仲人のきれいな嘘で結ばれた　正雄
結び目をゆるめて意見受け入れる　保州
結び目がほどけて母が見えてくる　ダン吉
大銀杏結ぶ夢見て四股を踏む　洞庵
嘘すこしまぜて結んでいるコント　重人
結ばれる予感の紅を直してる　つづや
赤い糸もうコブ結びしていいね　睦子
何べんも結び直した夫婦綱　寿美
佳
おみくじを結んだ枝は神になる　とし子
風呂敷をきつく結んでひとり立ち　篤子
一瞬の迷いでユダと手を結ぶ　澄子
母の手で結ぶといきな帯になる　〆女

結び目をときどき緩めてる夫婦　朋月
人
何回も結び直してきた絆　扶美代
地
いたずらな神が結んだ赤い糸　鐘造
天
銀髪を結ぶリボンを選っている　大谷　篤子
軸
ちょん髷にせったなにわの春がくる

すみさか2002 夏の誌上大会

課　題（各題2句ずつ・4句一組）
「水」斉藤大雄・下重秀石・濱野奇童
泉比呂史・中澤恵生共選
「自由吟」橋本天呑・會田規世児・北野岸柳・ちば東北子・鶴見虎魚共選
用　紙　便箋使用（連記）
投句料　一組千円＝何組でも可（発表誌呈）
締　切　4月25日（発表7月初旬）
賞　合点25位迄・天位・他に10単位賞
投句先　〒382　須坂郵便局　私書箱18号
すみさか川柳社宛
TEL 026-248-7288　中澤恵生

冬季 時計台ビール川柳入選句発表

「温　泉」

川柳塔社
名誉主幹　橘高薫風監修

温泉にビールときてはたまらない　竹澤　聡
旅プランまず温泉を決めてから　西村　嘉浩
空っ風今日は草津の湯にしよう　石井　信一
地球からゆが湧くとてもよいところ　土橋　螢
温泉の名で覚えてる日本地図　涌井　悦子
爪先に湯加減を聞く露天風呂　小田中準一
ただ一人月を崩して露天風呂　小口　宏
羽衣を揺らし独りの露天風呂　岡　かつら
満月のうさぎとはいる露天風呂　仁部三枝子
温泉へ道連れにする文庫本　大河原信昭
パソコンもケイタイも持つ湯治客　千葉　敬彦
湯治場の自炊時間がたんとある　原田否可立
温泉郷が生臭いサスペンス　永友　和仁
湯けむりに愛を修復して貰う　古笹原芳子
湯けむりの中に駒子も夢千代も　辻　葉
これ以上望まぬ妻といい湯だな　早川　盛夫
となりから温泉みやげよくもらう　藤森　愛
露天風呂えなりかずきに会いました　坂上ミック
温泉にひたって敵を数えない　佐藤　美文
温泉へ嫁のへそくりあたたかい　吉田　泉陽

準特選

ばあちゃんの水着がはしゃぐクアハウス　松山　栃木
温泉へ妻への手形まだ落ちず　美祢　福田仁兵衛

特選

湯治場の話題昭和のことばかり　山本　毅　安平次弘道

時計台の鐘の音を
心に響くおいしさにして

〒060-0051
札幌市中央区南一条東７丁目15-16

時計台ビール株式会社

HP　http://www.tokeidaibeer.co.jp/
E-mail　info @ tokeidaibeer.co.jp/

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

川柳塔おおとり　原　みさを報

憎まれる種を播かないようにする　風花
憎まれる事も時には言ってみる　義弘
年輪の垢を浮かせた仕舞風呂　螢
寛いだ風呂で明日を整える　登美
浮き世風呂温度変化に馴れて老い　一弘
湯につかり機嫌の直る膝小僧　幸次郎
バストイレ一緒にあると落ちつかぬ　宏章
岩が呼ぶ湯煙がよぶ河原風呂　和子
風呂上がり一番好きな顔になる　紀子
露天風呂月がときどき酌をする　黙光
長風呂へ大丈夫かと覗かれる　雄々
父さんを聞き役にして長い風呂　せつ子
一人風呂柚子を浮かして話する　道子
大声で愚痴る楽しみ風呂の中　芙美
感激とドラマソルトレークから　由多香
寝不足をオリンピックが加速させ　大鯰
オリンピック選手に拍手こたつ抱く　清子
小銭入れ二人の仲を往き来する　艶子
足して二で割れば絵になる夫婦です　彰雄
今日も歌う夫と二人の夢芝居　佳子
満天の星くず二人だけの宙　庸二
留守番のふたりで食べる残り物　孝子
三代の夫婦は二人三脚で　小生
四国路を大師と二人傘と杖　富貴子
騒音は夢だったのかまた二人　邦昭
一人でも同行二人遍路笠　舎人
二人分喋ったばあさん良く眠る　仁子
久しぶり友と二人の無人駅　野草
二人だけになってしまった庭を掃く　みさを

城北川柳会　川久保睦子報

初詣でツアー参加もままならぬ　美代子
ささやかれふっとその気になる弱さ　八重
極楽に着いたつもりが針の山　あき子
テロ基金のぞき込んでる寒い風　照子
タバコ屋の看板娘見あたらず　東雲
爆音が蒼を奪ったテロの街　ただし
初日の出鯛も跳ねてる瀬戸の海　トヨ子
おかげさま八十六の誕生日　登美子
煩悩を消して夫婦の初春を酌む　ひさ乃
来年も酒買う店のカレンダー　順三
呼び水と種火残して春を待つ　綏子
正月の愚痴老妻の割烹着　はじめ
仏壇に手を合わさぬ子もクリスマス　政子
耳鼻内科眼科と忙し年の暮れ　達子
白いバラ垣根をこえてうちで咲き　久留美
伸び過ぎた花が下向きおじぎする　昭子
淋しいが気楽さもある老いひとり　睦子
口紅をはじめてひいた日は遠い　あい子
幸せを逃がさぬ袋縫ってます　志華子
切手とは舐めるものだと心得る　あやめ
ときどきは自分にライト当ててやる　典子
アルバムを開けば逝きし友が笑む　倫子
確かなる足あと残す持ち時間　千里
大好きな音に動いた犬の耳　重人
策はない真正面から勝負する　修
水琴窟私一人の音にする　高栄
胎動と一緒に弾む毛糸針　柳弘
折角の芽をままごとに摘んでいき　千歩
老人よ大志を抱け宝くじ　史風
婉曲に言えばずばり切り返す　公一

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

宝くじ当りましたと届けよう　美代子
申告で納めてみたい億の金　民
真人間の自己申告はガラス張り　欣之
変わらんなあいつも言われている頑固　ダン吉
頭の様子みんな変った同期会　のぼる
ハードルへ変速ギアに切り変える　祥一
うっすらの噂大きくする女　弥生
三叉路でふと気が変るカタツムリ　千里
正装をしたら標準語で話す　弘一
変るなら幸せ色の世にしてよ　頂留子
アリバイが崩れ男のにが笑い　弘直
むきになりすぎてアリバイ疑われ　春蘭
アリバイの謎を知ってる時刻表　一風
アリバイを仮面の下で組みたてる　ますみ

風邪のはずが外野で旗を振っている　度
妻の目がうっすら開いてる午前様　きよみ
うっすらとベールかぶっている記憶　ミツ子
うっすらと笑いが浮ぶコンパクト　宏至
捨て石にやっと届いたうす明り　年人
パートナーとなる盲導犬の律義　半蔵門
下積みの律義が今に生きていた　東雲
利息だけきっちり払て逝かはった　柳伸
一分の遅れ許さぬ律儀者　とみを
律儀には二度びっくりの茶髪の子　加津子
定年後も律儀な父の靴ひかる　シマ子

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

理屈つけ人生いろいろ酒を呑む　聖子
公園のブランコだけが知る秘密　恵美子
公園の風遊ぶ子をまっている　好栄
藤の花ほころぶまでは転ぶまい　民子
片意地な男が酒で妥協する　ちよえ
たっぷりと薬をのんでいた仏　はるみ
たっぷりと食べてわがまま言って居り　かつ子
兄弟会だんだん酒量が落ちて来た　博利
この酒の仕掛けにまんまとのせられる　清泉
心からわたしを信じている鮒　白汀

川柳高知　川竹　松風報

人事する課長も首を洗う人　圭二
リストラで人事課長が憎まれる　幸
人事がいつか自分にふりかかる　かよ
外務省人事厳しい女王蜂　功

栄転と左遷のひもを持つ人事　孝雄
社長より人事部長が恐ろしい　ただし
更衣室人事異動がもれてくる　やすき
リストラをちらつかせてる人事権　快風
茶の間から叫ぶ平和はとどかない　竹萌
ワンテンポずれて拍手がある音痴　典雄
心ない野次が音痴を傷つける　佳風
機械音痴時代の後をついてゆく　和江
抱いた子をあやす音痴の子守り唄　栄珍
花嫁の父の音痴へきた拍手　圭風
蓮根の穴の昔が向き直る　哲史
青春の昔に戻る駅がある　てるみ
高速が延びて昔を消して行く　美々

西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

底のない器に欲の水を汲む　高栄
子の器分かっていても夢を見る　光久
老夫婦器が合うて真珠婚　奮水
八起き目の朝には捨ててある仮面　しげお
生きてゆくための仮面が外せない　たず子
本当のわたしを知っている仮面　能子
仮面脱ぐまだその下にある仮面　房子
仮面にもＴＰＯあり女です　文
仕事終え素顔の母に戻る道　てる
善人の仮面今更外せない　尚士
寡黙だがあらゆる試練舐めた髭　澄子
温暖化あらゆる罪があるヒト科　石舟
無鉄砲あらゆる恥はかきました　求芽
青空があらゆる嘘をちっぽけに　孝一

余命表まだ満足はしていない　鹿太
鏡ポン満更でもない出来上がり　哲男
水がめが静かに満ちて浮く秘密　富喜子
満月を少し恨んだ日の記憶　無禄
満期利子回りすしにも手が出ない　美代子
ストローが二本並んでいる絆　春蘭
心から感謝の妻をオイと呼ぶ　五月
すぐ渇く涙を仕舞う小銭入れ　遠野
息子より娘に夢を託す父　松煙
絵手紙の可愛い鬼が来た節分　江美
料理より器自慢のおもてなし　いたる
熱燗に心が溶ける外は雪　千代
甲子園の土は球児の夢を生む　比ろ志
楽しみはまだ読まぬ本五冊ほど　正坊
一度だけ仮面を捨てて問い正す　昭三

佳句地十選（3月号から）

植田一京

物忘れダブルパンチというショック　**みつ子**
上司の息かかる所にいて孤独　**みね**
煩悩は捨てぬゴールは未だ遠い　**無禄**
深呼吸ここで怒ってなるものか　**民恵**
見渡して自分の位置を思い知る　**求芽**
手を引いてくれたら行こう地獄まで　**葉**
生きるとは結局一人芝居なり　**保州**
主義ひとつ守って冬の風に会う　**ダン吉**
誘惑に勝って寂しい気も残り　**昭**
夕焼けが明日も達者でやれと言う　**深雪**

それぞれに思惑がある鍋の蓋　義芳

かわはら川柳会　上田俊路報

スタートで皆一番を目指してる　輪多朗
スタートは無念無想に無欲だせ　悦子
家計簿のスタートに出るお年玉　余吏子
子育てのスタート強い母の顔　泰良
托鉢の僧くつしたにわらじばき　一薫
靴下にこだわるおしゃれほんまもん　聰
酷使した靴下シャボンなぐさめる　寿子
十代とルーズソックスさようなら　静子
花が咲き夢ふくらますランドセル　俊路

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

仮の世の顔にまゆげをかいている　田鶴
待ちわびて少し崩れた雪だるま　日枝子
父よりも土産を待っていた土橋　富美子
雪が舞う何かいい事あったのか　千春
水ぬるむ煎じぐすりにさようなら　ふみ
ホームレスさえこわごわと見るラベル　千代
待ちわびた児等は雪に興じてる　八重子
ユニクロが全世界にとピーアール　晶子
二十四時間自分のものになる不安　天雀
ソルトレークの雪の上にも火花散る　なみ
幾度か寝返り打ってもとの鞘　すみゑ
紫の花で気を惹く野大根　繭
ユーモアを聞く水仙はこちら向く　てい子
ひと彩を刷いて私を染めあげる　麗
躓いた足から春に立ち向う　恵子
福相の友と落語を交わし合い　瑞枝
貧乏もいいな呑気でペイオフよ　やえ
冬晴れ間明日を信じて今日を舞う　春枝

川柳大阪　高木信酔報

祝福に苦労の花もそっと咲く　喜楽
熱かんで流し込んでる今日のグチ　民子
嬉しかろ青いテントに日の丸が　隆司
潮時も情がからんでまた悩む　利昭
着飾った孫バアサンに似て困る　司
少子化になんでやうちは孫五人　章久
情熱もそろそろ賞味期限切れ　宏
祝福の鐘は大空かけめぐる　朝子
妻の乱情けないやら怖いやら　柳宏子
点滴の情けは指の先にまで　笑風
話し飾るとだんだん嘘がばれてくる　一風
醗酵の樽で人情絡み合う　國治
飾らない人に余白あけて置く　春蘭
しめ飾り歩幅大きく明日に向け　楽子
飾っても話せばすぐに河内弁　修
かぶり物とればアフガンみな美人　本蔭棒
古い酒場にしみついている情け　金太
古希なりに自分祝福してやろう　敏
控えめに飾る女で夢を追う　洛酔
太陽の祝福受けて冬苺　青道
情熱がいっぱい靴を光らせる　重人
祝福の輪の中にいて風を読む　柳弘
血税が呑み食いされる情けなさ　鉄心
情熱が心の芯に燃え移り　功
祝福の日本一が遠かった　照月
なんでやろう水を飲んでも太るよな　かよこ
飾らない言葉の中にある誠意　美花
心情が光と影の綾を織る　柳昌
やせ薬それだけ呑んでなんでやねん　まつお
男なら半端な情けかけぬもの　信酔

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

豆まいて追い出すもののない孤独　満寿蔵
元旦や色んな馬が舞い込んだ　幸子
亡父午の歳すぎ吾は幾つまで　正子
春の午硝煙和して突っ走る　十四郎
駄馬なりに分わきまえて明日を追う　武庫坊
二度三度拾った命未練なし　純
命また拾って試歩の河川敷　東園
天命とあきらめ後はさばさばと　愛
信じ合う命柘榴の実が熟れる　歌子
うつ伏せの命ひそかに枯れてゆく　義芳
梅かおり亡夫の影追う如月よ　郁子
枯野行くポケットの小銭ならしつつ　里江
幸せが一升ビンの底にある　寛之
春が来て駐在さんも庭いじり　紫香
あれこれと遺影の写真妻と選る　弘治
淋しさが光ってきます寒ざらし　恵子
気の弱い鬼はいつでも酔っている　久子
音もなく順番を待つ神経科　薫
運は球形掴みどころのない風船　比ろ志
座り胼胝凡の人生しめくくる　しづ子
寒暁やごとりと重い貨車動く　光穂

やや遠出万歩計にもコーヒーを　昭　三
春近し梅見物の暖かさ　節　子
外遊を見送る彼女投げキッス　糸　子
寒風にろう梅がやく春間近　千　恵
先頭を歩き疲れた象の足　静
果し合い懐に抱く柿の種　孝　一
野良犬の背中で折れている夕日　芳　子

尼崎尾浜川柳会　田辺鹿太報

石橋を叩きまだ安心はしていない　鹿　太
火の元を残したままで手締めする　幸　子
土と汗手袋にしむ農に生く　そ　の
電話口母の元気に安心す　江　美
寒中に小枝の梅は輝いて　カズ子
名残り雪首をすくめて春を待つ　信　子
絨毯にタマの足跡梅の花　秋　子
テロ超えてさすがアメリカ沸く五輪　亀与子
手袋の中で闘志が燃えている　イサミ
早春の風香ばしい梅の里　まさ
駆けつけて母の寝息にほっとする　耕　治
小出ししてその辺のこと聞いてみる　昭　三
軍手干す梅の小枝に冬陽射す　義　芳
父さんの軍手元気に干してある　孝　一
薬より梅がよく効く祖母の風邪　弘　治
安心の笑顔乳首を離さない　正　治
歯痛から解放された総入れ歯　満寿蔵
反抗期安心できぬ春の部屋　十四郎
結局は手袋脱いで出す小銭　求　芽
安心も得心もさす老母の文　柳宏子
片っぽの手袋落ちている寒さ　紫　香

京都塔の会　都倉求芽報

ばあちゃんのポッケ多いが古くさい　てる
出稼ぎの帰り待ってる柿の色　春　蘭
少しセンチに昔むかしを巻き戻す　達　子
少子化を助けて下さいにしんの子　高　栄
にしんの子 年に一度の晴れ姿　満　子
数の子でグレードアップするお重　英　旺
かずの子に目が無い父の初春の膳　百合子
里からの寒餅 雪の音がする　典　子
あぶり餅本家元祖で競い合い　満寿蔵
赤福を買って装う伊勢旅行　克　治
五平餅民話もぬくい木曽の宿　萬　的
日々好日のんびり餅を焼いている　紫　香
餅肌のホッペいつしかにきび面　幸　代
雑煮食べきずな固める大家族　葉　子
床の間に一年の計 鏡餅　友　熙
姉さんの恋に焼餅やいてる子　メ　女
まんべんなくこぼれ種にも陽の光　庸　佑
神様はいのちまんべんにくれたはず　求　芽
まんべんに頒けて母さんだけまま子　柳宏子
まんべんなく弥陀のこころを身の内に　礫
狂牛病まんべんなく肉ばなれ　輝　美
校正の目をすりぬけてゆく誤植　啓　子
余白あるうちに書きたいことばかり　ただし
さよならの後の余白が語るもの　福　子
決算書の余白不況と書いておく　英　一
残されて空蟬のまま以下余白　ルイ子
追伸の余白にひそむ愛がある　芳　子
青春の余白をうめる同窓会　益　子
ヤマみんな外れた余白の答案紙　正　坊
余白には自分の地図を書くつもり　宏　子

川柳塔まつえ吟社　津川紫晃報

人生を煮込んだ鍋が煮えている　多　喜
冬眠を覚めた人生春がすみ　茂　美
人生いろいろ引いたおみくじみな違う　義　良
人生の裏は見せない髭を剃る　叮　紅
人生の日だまりで摘む冬いちご　(故)草　丘
人生の下る峠で恋をする　俊　一
犬の目の高さで犬と話する　すみこ
さむらいの子が躾した犬である　螢
私と話のできる犬を飼う　きみえ
尻尾など振らず左遷の渦の中　澄　子
躾られ犬の自慢が見えてくる　邦　代
木戸口で犬の吠え声夫帰る　(多)博　子
漫画の森が深くて抜けられぬ　蘭　水
四コマの漫画社会を閉じ込める　注　湖
小児科へ漫画のつづき読みに行く　与根一
眠った子にっこり漫画の中にいる　多賀子
目の色を変えて漫画の中泳ぐ　畔
四コマの漫画の中に棲むわたし　昭　二
淋しくていっぱい書いたみかんの絵　ちえこ
鏡餅乗せたみかんが落ち着かぬ　淞　丘
急斜面さぞや苦労のみかん山　静　恵
ビタミンCみかん一つにある誇り　桂　子
二箱のみかんを空けて春が来る　知恵子

絵手紙にみかん一つを差上げる　秀子
補聴器を外し雑談聞き流す　昌枝
これでもかと身の上ばなしまだ続く　太泡
雑談の中に潜んでいる本音　玲子
雑談を聞いてた猫の大欠伸　房子
咳払いして雑談へ釘を刺す　治代
雑談で喋り会談で黙り込み　紫晃

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

平凡な毎日だけどわたし色　よしこ
毎日の終り修正液が要る　輝子
生きるため毎日渡る橋がある　寿子
毎日を元気で越した喜寿の坂　正博
愛してるよと妻に毎日嘘をつく　楓楽
平凡な日々を優雅と羨まれ　信子
毎日が戦争ですと子沢山　和重
毎日を感謝とボヤき老い達者　柳宏子
毎日の座りごこちに満ちている　豊太
毎日が平和の中で泣き笑い　健三郎
今日だけは嘘つくまいと書いてみる　ダン吉
毎日でなければやれる主婦業も　克子
寝たきりへ雀毎日来てくれる　三男
忙しい毎日だから楽しいね　三喜夫
蹲いて平凡な日々恋うている　冨美子
毎日がいくさと思う父の靴　稚代
毎日の逢瀬楽しい万歩計　呑天
愛一途何も追加はしていない　大輪
追伸に行きつくまでの迷い道　保州
追加した酒の値段に青くなる　あき子
消える夢増やし追う夢長い道　佐代子
二番目を走る男にある野望　優子
二人三脚走り続けて今がある　怜
達観の二字に遠くてまだ迷う　さち子
逃げていく二月で予定表残る　紀久子
二次会に飲めぬ顔ぶれ先ず誘い　佐一
割り箸をさくとき森の悲鳴きく　鉄治
寝て二人起きて二人のいる安堵　美子
二兎を追う趣味に翻弄されている　和子
肩書きを追加名刺を出したがる　緑良

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

絹漉しの貌しておんな爪を研ぐ　謙一
チャンス到来この追い風に乗って翔ぶ　きよし
縄張りを奪う野性の爪を研ぐ　北歩
源泉課税忘れてどっと臍かじり　順風
悠久の風に研がれる磨崖仏　慕情
古希までと決めた農夫の鎌を研ぐ　銀波
取敢えず明日食う米を研いで寝る　ふさゑ
チャンス来て男の度胸ためされる　花匠
研鑽を積んで仲間も増えて行く　雅城
遠い日の板チョコ兄と半分こ　ヒサ子
非課税の暮しにもある酒肴　ツネ
国税庁ねらいをつける発泡酒　井蛙
汗を積みオリンピックというチャンス　愁女
忙しく泳ぐ二月のチョコレート　黙人
税務署の扉を開けている猫背　花峯
ボケ出した脳細胞を研ぐ酸素　一花
立ち直るチャンスをくれた父の鞭　九九
飲食税雨のネオンを闇歩する　五楽庵

川柳塔鹿野みか月　土橋　肇報

しぶとさをやんわり母のテクニック　菊乃
生きるためしぶとく餌を狙う猫　みどり
すぐ切れるくせにしぶとく泣いている　立亥
捨て猫にしぶとさがあり根気負け　八重子
一触即発我慢ぎりぎりの域らしい　弘子
ただ酒にしぶとい客がいて困る　睦子
しぶとさのB面に意が固まらぬ　孔美子
三男坊しぶとく金は貯めている　節子
未練まだ迷いの中にあるマスク　かつ乃
人間の顔が一番むずかしい　英夫
大空はマスク剥がしたような青　公子
真実を隠しつづけているマスク　みさ子
幼年児数えると国滅びそう　喜与志
名も知らぬ雑草芽ぐみ春を待ち　武子
人情のつまった過疎が捨てられぬ　幸枝
あなたしか解けぬ暗号書き留める　茶子
熱燗の湯気にも愚痴がまざり込む　八重子
湯気のたつ鍋にストレス消えてゆく　房子
寒の月露天の湯気に浮いている　実満
背の湯気は騎手に納得してのぼる　諷人
梅干しを一つ頬張りゃ湯気が立つ　はるお
湯気のたつ飯戴いている無上　きみ子
自由だからとても嬉しい日を重ね　汲香
寝て起きて自由にとんで句碑も建て　野草
風まかせ足に縺れる六つの花　富久江
家族皆健康だからある自由　きみゑ

勝ち取った自由使いこなせない　和子
ご自由にどうぞと縛りつけている　忠良
狭くても自由に歩く道がある　久枝
結婚も離婚も自由　無責任　螢

川柳ふうもん吟社　杉本　孝男報

人生はいくさだ敗けも気にするな　洋々
B6の芯の太さに負けている　彰夫
翔びたいね時の鎖を断ち切って　鬼桜
癌告知気にするなってそりゃ無理よ　すなお
コーランの芯は平和を説いている　蟹郎
気にするな七十五日我慢しろ　(山)節子
真っ直ぐに伸びてる芯だ見守ろう　はつ江
父の芯こんなに脆くなったのか　一瑶
掃き溜めの雀ぐらいでいいだろう　修
いつの日か川柳会の芯となる　圭一郎
テロよりも親の虐待子が恐れ　三津子
コスモスの芯の強さに風が惚れ　悦子
負けて勝つ芯の強さが母にある　無限
気にするな神は最後に味方する　行男
叱られているは脈あり気にするな　宗明
燃え尽きるまでを一途な蠟の芯　毅
テロにはテロの僕には僕の熱がある　忠良
気にするな嫁は必ずつれ戻す　美恵子
無差別なテロに犠牲者泣いている　一京
人間の芯の恨みは火の玉か　益子
父の芯時には飴のようになり　春名
死ぬために生れて来たか自爆テロ　昌鼓
捨て身のテロに新兵器役立たず　雅女
気にするな宗派を変えただけのこと　茂登子
よく拗ねる虫を嗅ぎだす聴診器　志げ緒
栄転へ見知らぬ街が好きになり　金祥
寂しさをぽつりと漏らす母の意地　健一
悪口は酒が言わせた気にするな　喬水
気にするな男に酒という魔法　茶人
気にするな一度のミスは誰もある　孝男

川柳塔なら　坊農　柳弘報

鞄の中三億詰めて歩く夢　積子
でかい鞄地球の情報入れてます　さだを
友情で留める切ない人が居る　博一
天才が走るコースを野次が追う　敏子
友情が互いに隠れ蓑になる　米子
友情の証半分ずつのメダル　桜竜
招かれたお茶席足が文句言う　秋泉
戦なきしあわせ招く初日の出　むつみ
ブランドの鞄かかえて用もなし　とし子
変わり身の天才らしい金バッジ　修
天才的酔うたふりして出さぬ金　章久
天才の遺伝子がないボクの家　良一
友情が愛情になるぼたん雪　富子
老指揮者天のタクトに招かれて　真理子
お年始に招かぬ客がついて来た　あやめ
友情をぬくめ合ってる縄のれん　一風
友の訃へ二日二晩飲み明かす　茂雄
友情の輪にかこまれて立ち直り　春蘭
神童と騒がれ末は紙おむつ　隆盛
手さげ鞄ふんぎり一つつきました　洋子
開けるなと今も言われている鞄　ダン吉
お浄土に招かれる日も金が要り　絹子
友情で夫婦してます隠居部屋　卓
妻よりも僕を知ってる友がいる　太一
招かれて心得のないにじり口　美千子
エリートの鞄に詰めている孤独　秋雄
天才が迷子になっている恋路　朝子
菊日和妻同伴という受賞　寿美
スタートラインもう友情の顔がない　春雄
さげ鞄妻の重さと子の重さ　道子

川柳ささやま　遠山　可住報

三尺は隣の分まで掃く心　純子
不況風とことん吹いて冬の街　恵美
辛抱の亡母を手本に今日がある　多美子
お手本の母の背輝く愛がある　美智子
自分史を飾る手ごろなワイン買う　八重子
ポックリの寺で手ごろな杖もらう　とみ子
いい予感女手ごろの服を選る　靖子
ふる里にお手本になる詩がある　つや子
お手本になる人までが虫がつき　かほる
薄氷踏んで渡った若き日日　君代
氷点に女の嫉妬怖さ知る　毬子
花の日に逢うて雪降る日に別れ　芳郎
親の背が手本にならぬ現代子　泰子
身のほどに合わぬ紐丈で翔んでます　冨美
余白ある手ごろな彩がまだ塗れず　美緒子
手ごろだが漬物石に軽すぎる　みはる
一流な履歴手ごろな職がない　寿子

遺産分け氷のように裁かれる　可住

川柳会梨花　石上悦子報

しょから蟹の背中に灸の跡がある　重忠
コンパニオンが蟹を解剖してくれる　石花菜
退屈をしない程度に口喧嘩　幸子
七人の敵には見せぬ涙つぼ　きみ子
振り向けば外相蚊帳の外にいる　(明)かつみ
鳶見て次は雀を見る鴉　修
朝市の大根やけに笑ってる　芳光
鏡見て紅差す顔がにっこりと　東雲
にっこりを一度してからノックする　(石)悦子
にっこりとしてる後ろで鋭い目　ただし
にっこりと切腹をした人はない　蟹郎
にっこりと笑う孫には嘘言えず　宏
花瓶です造花はいやだ自負がある　高栄
いい花瓶野菊も薔薇も差別せず　完司
御三家の葵の紋は僕も有る　一夫
印画紙の先に匂った葵の血　和歌子
懐にも髪にも霜が忍び込む　克枝
霜月に足るの足らぬの報恩講　螢
べっぴんもオカメも同じ霜をおき　美恵子
眼裏に霜焼けの手の母が住む　(最)和枝
霜崩れ女に少し隙がある　忠良
さあ霜がおりた葱畑がはしゃぐ　求芽

川柳塔唐津支部　久保正剣報

老夫婦支えてくれる妻も古希　實
若者の話が見えず雪の舞う　兵八郎

どっちかが惚けると思うとぞっとする　輝夫
高潮が引きリストラの靴の跡　晴翠
改革劇政治の裏が見えて来た　勝視
聞く耳は持たず彼奴に惚れている　水笑
男性はシャットアウトの女子トイレ　高明
四月馬鹿などと戯れてる暇はない　虹汀
古里の棚田に今年つく予算　四郎
老いらくの低温火傷してる恋　正剣

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

はっきりと言える若さがうらやまし　かつみ
ワンテンポ置いてはっきり解けた謎　たけし
はっきりとしたいけれども金がない　一壺
割り勘とはっきりきめてデートする　敦子
はっきりと富士が見えたと旅だより　庸佑
酒好きとはっきり分かる赤い鼻　志洋
お腹の子はっきりさせた親の意地　さとみ
新人へシートノックの雨が降る　重人
新春のシートノックの高く舞う　聡
事故現場覆うシートに有る情け　柳宏子
シルバーシートまだいいですと虚勢はり　みよ子
お先にのひと言心温まる　昇
お祝いの言葉の裏の嫉妬心　章司
挨拶を知らぬ隣のドアチェーン　一知
挨拶の旨い男の裏を読む　吐来
とりあえずまあ一杯で輪に入る　六点
飴玉が効き丁寧な御挨拶　耕策
ひざを折る哀しい挨拶だと思う　元紀
味方ではないが挨拶しておこう　美代子

納骨がすんでしんみり独り飲み　専平
しんみりと写真みつめる偲ぶ会　敏
娘の挙式終えて無口な帰り道　泰子
警察でしんみり言われ口開く　洞庵
しんみりと話聞いてるくいだおれ　利武
しんみりと女の過去を聞いてやる　満寿蔵
しんみりとしてたら病気かと訊かれ　みつこ
身の上をしんみりと聞き騙される　久仁子
男にもしんみり祈る夜がある　扶美代
しんみりと花束抱いて姑になる　りつえ
しんみりの席でコントを考える　ダン吉

竹原川柳会　時広一路報

初めての着物私を良くみせる　(九)千枝
老人大学一年生のいい眼だな　蘭幸
老いの身はひとつわすれてひとつ知る　夏喜
テロにくしだけれど学ぶ貧富の差　正宏
ころんだら痛いと学ぶ試歩の道　笑子
裁縫は解いて学べと母が言う　輝恵
しっかりと学びうまく忘れてる　力
まっすぐに生きたか鏡に問うてみる　敬子
孫四人まっすぐな目で問いかける　幸子
まっすぐな視線に出合う日の鼓動　厚子
まっすぐに歩いています蟹の私語　房子
まっすぐに歩けぬ蟹の子は悩む　蝸牛
まっすぐに育てた花の曲り癖　淑子
まっすぐに見る人がいて落ち着かず　万年
瀧はまっすぐ迷いごころを叩く　栄恵
曲線美まっすぐ歩くのもうまい　寿枝

二〇〇二年馬まっすぐにかけてくる　孝枝
まっすぐに神降りたもう神の瀧　不朽
砂時計刻がまっすぐ落ちてゆく　静風
森の杉まっすぐ伸びる友を待つ　一枝
台風に負けじと岬四股をふむ　笹舟
突端の岬に立ちて未知と遇う　汎美
岬から見る空の青海の青　半覚
またひとり恋を岬に捨てにくる　白孤
いくつもの叫び岬は知っている　千代美
レーダーの死角を知っている岬　菁居
人間が小さく見えてくる岬　節夫
信じよう岬の果てにある平和　眞由美
岬に佇つと私の未来見えてくる　比呂子
海に問い海の答えを聞く岬　一路

東大阪川柳同好会　森下愛論報

うやむやに流れ実のない日を送る　弥生
塩撒いて送るお客の悪い酒　章久
覚えない人から送って来たメール　萬的
追伸の二行お金に飢えている　元紀
恙無く巳年を送る礼参り　朝子
七人にメールを送っている自信　とみを
お金には縁ない僕の小さい耳　美弥子
お金では買えぬ情けを知って老い　文子
僕のカード実感もなく金が減る　雅文
思うこと一緒に竹馬の友やんか　柳宏子
親が子を思う子が親思う温かさ　賢子
アフガンを思えば茶漬けも贅沢や　柳弘
幸せと思う補聴器よく響く　三重子
鏡には楽しいドラマ映ってた　東雲
逆転のドラマに風が鳴り止まぬ　湖風
玉手箱にうれしいドラマ積めておく　シマ子
海から来て海へ帰ってゆくドラマ　英一
密室の畳りガラスにあるドラマ　愛論

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

耳許の甘い話が命とり　かおり
老人の砦を攻める消費税　あきら
疑えばみな隠してる鬼の面　坊太郎
句碑一ツ胸に抱いて今日もゆく　吟笑
躓いた石に教わる処世術　賢
予期しない人に足元掬われる　ひかり
影法師だけには言える胸の内　八重子
点滴の雫を信じ明日を待つ　治延
愛想よくやって来た友何かある　放任
叱らなくなった親父が恐ろしい　文仙
ささやかな夢と同居をして元気　勝
まだチャンスあるかも知れぬ夢捨てず　よしみ
信頼を僅かな肉でチャラにする　輝夫
久し振りローカル線で聞く訛　寿々女
医者梯子今日も元気な顔でいる　いさむ

サークル欅欅　小林一夫報

綿は綿絹とは違うまま生きる　みつ子
リストラの機と泣いてる綿ぼこり　遠野
いつもグウ出す彼にチョキ出してやる　義子
はんなりと正面避けて身構える　智恵子
太陽と綿の手ざわり素朴な日　保子
科学万能月にウサギはおりまする　哲夫
真綿いろの雲とぼんやり夫の忌　澄子
ぼくに似て隅っこ好きな綿ぼこり　たもつ
あっさりと嘘の出るのが恐ろしい　靖巳
ペイオフが真綿で首を締めにくる　希久子
言い訳は聞きたくないが聞いてほし　房子
盛り場で教師に逢うた小倉服　正坊
参ったと言わぬ頑固な寒の月　あずき
地球混乱空はこんなに青いのに　いわゑ
綿雲よ亡母の旅はどの辺り　楓楽

高槻川柳サークル卯の花　川島襲云児報

ＯＢ会先ずは安否の話題から　無禄
ロッカーの話題に尾ひれ生えてくる　五月
戎さん参りで損をした話題　しげお
街角で風が話題を膨らます　節子
あれからは私のページに彼が住む　吉之助
あれからは見るのも厭になった酒　比ろ志
あれからだヘップバーンに嵌ったのは　孝一
あれ以来夫は過去を話さない　萬的
似たように枯れて二人の茶が和む　〆女
渡り鳥になくてはならぬ島の位置　求芽
水仙の島に哀しい七年目　稲子
ちっぽけな島にもあった敗戦記　芳子
島の猫街の空気に憧れる　重人
還っては来ない島あり雪しきり　碟
男一匹ひそかに期待するものありて　あやめ
男一匹海の向こうで大暴れ　義一
男一匹おんなの泪には弱い　澄子

男一匹負けるいくさは仕掛けない　秀夫
男一匹女心が判らない　尚士
村おこし男一匹飯も炊く　柳宏子
男一匹無口なほうが様になる　石舟
交叉点泳いでわたる人の波　泰雄
老いてなおそっと取り出すコンパクト　治三郎
おせちより人気があった鰤大根　活恵
意気がって見てもお里は知れている　武史
バーゲンに弾き出される痩せ蛙　スミ子
見て見ないふりで女を見ています　紫香
いたわりの文字を携帯から貰う　晴美
あいまいな返事で風を読んでいる　庸佑
生かされている幸せにありがとう　諷云児

川柳塔みぞくち　小西雄々報

平和だな馬のひずめの音のどか　康女
空駈ける駿馬にいちど乗りたいね　正光
追風に天馬が走る気どらずに　公美枝
駄馬なりに夢中で越した喜寿の坂　豊枝
高々と馬の嘶く年が明け　久子
幸せは手足が動く初明り　智恵子
初夢は馬にまたがり初詣で　鈴枝
乗馬してガッツポーズがしてみたい　弘子
福袋私の思い詰めてある　和代
不況風吹くから馬に期待かけ　静代
玉砂利の音信念は曲げられず　雄々

三幸川柳教室　三宅保州報

明日へと続く足音夜が明ける　昭枝
遠回りしただけですよ星月夜　よし子
機械化で夜星と縁のない野良着　嘉平
言い勝った夜のしじまを持て余す　町子
ノルマ成し遂げた夜明けの握りめし　鉄治
もぎたてを熟成させている夜長　公子
夜話の真ん中にある自在鉤　和子
泣いている子に含ませる母の愛　健三郎
突き放す後の涙を子は知らず　かず子
エリートの二親を持つ子の重荷　みね
同居する親が折れてるオムライス　当代
親思いの子どもにいつも叱られる　保州
親の轍踏まぬ踏まぬと親に似る　さち子
名案が出来たときには電池切れ　起世子
しまつ屋に案内された小料理屋　正匍
思案するポーズでちょっと一眠り　章子
手術をと言われて歳が思案する　正一
末席の案は途中でもみ消され　三千子
酔い醒めの酒に思案が浮いている　朱夏
消しゴムが減った分だけ思案する　登美代
雑兵の案で急場を切り抜ける　千秀
原案は夢多過ぎて没になる　孝子
三歳の口とんがらせ自己主張　純子
傷口に母のくちびる躊躇せず　一歩
悪評を言うだけ言うて含嗽する　栄之進
唇を噛んだことない楽天家　碧
口紅を変えて百まで踊りたい　豊太郎
唇が赤い一日署長来る　伸二
腹話術唇ばかり注意する　美子
くちびるは歓喜の歌で締めくくる　桂香

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

肩こりもそろそろとれて春の風　シマ子
邪魔だとは言わないけれど出る態度　慶子
プライドが邪魔する二度の職探し　アキ
邪魔くさい話はしない決算期　弘直
邪魔にならぬよう真ん中を走ってる　喜美子
妹が何時もデートについて来る　会美
思い出の品も時々邪魔になる　能子
まじめさが邪魔面白味ないお人　香住
決断へ深い絆が邪魔となる　欣史子
親心そろそろ解るはずの歳　あずき

川柳高知　川竹松風報

結局は丸く治めたのはお金　三郎
結局は茶漬けで済ますひとり膳　かよ
威張っても結局妻に丸められ　功
結局は私が悪いことでけり　京子
黒幕はいつでも塀の外に落ち　快風
黒幕は妻で平和な家がある　孝雄
黒幕はあくまで白を主張する　幸
黒幕の歴史を刻む永田町　圭二
黒幕の顔で溜めてる罪の数　愛宏
欲得が絡んで糸がほどけない　典雄
姑さんと結べば恐いものがない　美々
縁結びコンピューターになる時代　和江
AとB思惑があり手を結ぶ　てるみ
帯結ぶ時に女をとり戻し　松風
年輪が生活の知恵を語りあい　竹萌

涅槃へは古い仮面を脱いで逝く　哲史
繕うてまた繕うて着た昔　佳風
純潔を言えば古いという時代　暖

岸和田川柳会　長谷川呂万報

亡き母の知恵袋だけ生きている　房枝
みどり児が抱かれる人を選ぶ知恵　東吉
嫁ぐ娘に持たせる母の知恵ノート　みつ江
万物の霊長の知恵核兵器　ダン吉
家計簿の苦しさ見せぬ主婦の知恵　さよ子
通知簿も介護も五四三の順　洋
容赦ないガンの告知に言葉ずず　珠子
大丈夫ほめておれない通知表　英雄
生きている通知出してと保険庁　俶子
Eメール甘い知らせのあとの悔い　蛙城
通知表見るまでママは笑ってた　仁緑
梅一輪春の女神が来る通知　基
通知簿を見せに来る孫見せぬ孫　呂万
大過なくと退職通知誰も書き　甚一
定期券持ってたころにかえりたい　和美
橋が出来暮引く空の定期便　盛之
独り居の母を気づかう定期便　路子
借り物の定期見破る凄い勘　穣一
楽しみは定期に開く娯美の市　けい子
養老院予備の棺桶二個三個　力子
骨董に欲望燃やす虫めがね　守
それぞれに顔の道具かシミとシワ　一脩
神様が道具違えた我がフェース　笑司
相槌を道具に世の中生きてます　鹿太郎

太刀打ちの出来ぬ道具は手の温み　苑子
道具には凝って道具に使われる　柳宏子
老夫婦過去を流して生きている　昭二
流された赴任の先で知る情け　岩夫
使いすての時代去ったと予感する　弘子
日の丸の旗が流れる初参賀　狸村

翠洋会　穴吹尚士報

惚れ薬ふりまき春の風が吹く　真理子
やせ薬あれこれ飲んで終わる恋　富子
薬ならたんと飲んでる忘れてる　春
薬効が同じで高い方を買う　正雄
よく効いた薬に恐い副作用　舞夢
百薬の長は家族の笑顔です　楓楽
女房にバラ一輪の鼻薬　尚士
留守電についためらって名前だけ　叡子
転職をためらう子等の成長期　澄子
武将にもためらい傷はあると言う　昭
孫受験健康面はまず安心　照子
安心して買えるラベルが貼ってある　石舟
百均はみな百円で安心だ　義
いのち綱つけても安心してません　千梢
三人目片づいた日のお茶の味　日の出
肩車安心をして見渡せる　東雲
目覚めれば手足も動く目も見える　みつ子
牛肉偽装パズル解くよう暴かれる　恭昌
旅好きを掻きたてに来る小冊子　志華子
食用と生け花用の菜種買う　伽羅
人情にふれると脆くなる私　蛙

生きる知恵柳の枝に教えられ　さと美
ファックスのメールに弾む小商い　久峰
ばあちゃんのやっぱり長いEメール　千歩
白川郷障子に映える雪と灯と　蕉子
SLを乗りにわざわざ雪の中　会美
車座になれば無口もよく喋る　靖巳
冬五輪張り切りすぎるアナの声　さだを
難関突破さてこれからの教育費　周信
春一番待たず納税申告書　正坊

富柳会　池森子報

掃除機に詰っていたのは母の事　扶美代
昨日とは違う空気を吸っている　鐘造
悔いのない道へそれぞれ自負を持つ　紅紫朗
わたし魔女箒で闇を掃きにゆく　夕子
あの山の火を噴く鬼に逢いに行く　冬虹
別れの日夕陽も泣いてくれました　文子
雑音を連れて夕陽が落ちてゆく　花梢
満月に心の垢を大掃除　和代
夢を追う蝶の行方を知らぬ蟻　一慧
百の灯に百の暮らしの窓灯り　淳一
それぞれの夢カプセルに子等巣立つ　勇
うちの嫁四角い部屋を丸く掃く　亮幹
狂うかもしれぬ秋の日の風と　アキ
それぞれの角度でアトリエが弾む　美代子
回顧録夕陽に語ることばかり　恵勇
居酒屋で経済学を学んでる　昭水
それぞれに電子おしゃべりして平和　和子
掃除好きの妻と意見がかみ合わず　たかし

封じてた鬼の優しい誘い声　一夫
日が落ちる前に別れの話など　キミエ
夕焼けが明日も達者でやれと言う　深雪
夕焼けの下へ夕陽は落ちていく　(故)滴秋
掃き捨てた心のこりが吹き溜まる　年人
日月を消すそれなりの紅をひく　呑舟
逃げきれぬと思う男の十二月　初太郎
形よく彩よく準備して師走　信子
薬には近く酒には遠くなる　宏至
ぬかるんできて結婚がにおいだす　かなこ
わたくしの甘さ洩れてた身八つ口　ひろこ
情熱を語れば沈めない夕陽　森子

岬川柳会　八十田洞庵報

おしゃれして女は少し羽目外す　勇
墨痕淋漓ハッと目覚めた白い和紙　俶子
日が暮れてやっと別れた立ち話　年子
高そうなふぐと目が合い睨めっこ　富美子
キッチンがそのまま趣味の室になる　孝子
すれ違いかすかに匂う爽やかさ　茂平
誉めてくれあなたあってのおしゃれする　和美
おしゃれなど知らない人にある魅力　みやこ
喜寿祝うロングドレスに紅いばら　和香
鯛焼をそりかえらせる化粧塩　勝
晴れ着きて裾はだけてる帰り道　桜琴
おしゃれして少し豊かな風もらう　令子
髪洗う抜け毛の行方じっと見る　よし子
家計簿の洗い直しで無駄がへり　ユミ子
朝ドラとタイム合わせる洗濯機　里子
時くれば白紙に戻る猶予刑　昌夫
委任状白紙で出せぬわけがある　とみ
脱税もしてみたいけど億が無い　蛙城
馬の背へ分相応のビジョン積む　芳子
客引いて残る煮しめに吐息つく　悦子
若返る秘訣に趣味を光らせる　みつこ
多恨まだ解けぬ日記は白いまま　洞庵

川柳さんだ　北野哲男報

天婦羅屋泡の大小で揚げ加減　開子
もう一度バブル来るまで生きてやる　正和
親と子が風呂で高めた愛の泡　俊昭
マスクして知らぬ顔してすれ違う　歳子
マスクでも性格が出る冬景色　久恵
まっすぐに帰って来ても叱られる　忠
まっすぐな竹も風には右ひだり　敦子
まっすぐに伸びて親越す今年竹　サクラ
おばあちゃん寝たきりだけど生き字引　ちあき
新訂の新語辞典も追いつけず　藤朗
辞書を背に新進作家のインタビュー　千代
語らずに紫煙で分ける意志二つ　正行
一兎だけ追う日楽しむ歳になり　章子
よそ行きの挨拶添えてのし袋　哲男

南大阪川柳会　吉川寿美報

往年の人気にぶら下がっているスター　柳弘
油断した人気は波にさらわれる　志華子
現実を人気の中に置き忘れ　章久
人気もの笑顔ふたつ持っている　アキラ
話上手よりも人気の聞き上手　楓楽
少し人気出て来て敵も出来ました　萬的
少年に銃を持たせている悲惨　なぎさ
ひとりの夜寝返りうてばなおみじめ　度
惨劇のテレビ映画と思ってた　東雲
アフガンの悲惨な人へ無力なり　たもつ
超うまい母の味噌汁ぬくい飯　シマ子
土俵際ウルトラCで勝ち名乗り　遠野
ウルトラの妙技氷盤アスリート　叡子
ツアー客異風に奇声あげ通し　柳宏子
風習の違い覚悟の角隠し　柳伸
ジャングルの奥地に異風生きている　直子
結び目を解けば両説走り出し　宏
両説に卑弥呼ほほえむ花の陰　道子
読売と朝日の違いだと思う　雅文
どっちにも言い分があるヤジロベー　重人
両説あれば足して二で割る議長席　のぼる
両説のデフレ対策かみ合わず　初太郎
自分史の惨めなページ抱いている　ダン吉
惨禍から雄々しく響く槌の音　庸佑
異風景在来線が面白い　三男
路の蓄積った雪を持ち上げる　千梢
家庭内別居異風になる家族　ひさの
人気捨て森に小さなログハウス　日出子
嫁入りの年の雑煮は気をつかい　珠美
惨めさを試練と思い生きてゆく　久子

川柳塔打吹　米田幸子報

疲れてもママの笑顔は王者なり　賀寿恵

我が夫王者でないが頼ってる　和子
誰もいない部屋で王者のバイアグラ　よしえ
サバンナの王者孤独な影がある　和枝
ラブシーン親父がテレビ放さない　一夫
王様の男を盗みご親戚　和歌子
一時でも王者になって威張りたい　幸香
除夜の鐘煩悩闇へ消してゆく　芙美子
ラブシーンおらあの頃は暗闇で　重忠
遠い日のこんなシーンにもノスタルジー　しろう
憧れのシーン見たさに長い列　順子
天体の不思議なシーンまた観たい　京子
儲かるか初取引きの鐘響き　伊佐子
壁越しに響く隣のどなり声　久芽代
金メダル極限に耐え微笑んだ　善江
ツーカーと響く夫婦にあと一歩　龍枝
もと王者だれも見て見ぬふりをする　友楽
砂利満載王者の如くトラックが　セツ子
蟹に河豚冬の王者も金次第　博丈
歓喜に耐えるシーンほど難しい　蛍
人類が人類否定したシーン　石花菜
只酒を飲んで王者の真似をする　かつみ
キリストも邪宗の王と処刑され　照彦
一国の総理を産んだ母がある　貴恵
酒切れるまでは無敵の王者なり　完司
片方の目に蓋をして見るシーン　勝見
女房の苦言響く二日酔い　芳光
運と知恵かけて王者の椅子競う　孝恵
クライマックス全神経が点になる　節子
私の五感に響く師の助言　幸子

川柳ねやがわ　江口　度報

うまいこと拝みたおしに来る二男　朝子
親の背で拝む仕草のもみじの手　三郎
合わす掌にいつかなさけをくれる神　佳風
ご神体石ころだって拝みます　三峰
どちら向いても拝みたくなる里の山　かすみ
気がつかず貧乏神を拝んでた　順三
名も告げず去る親切な背を拝む　賢子
合掌の十指のあたり風和む　度
陽を拝み祖母の一日動き出す　庸佑
仏壇へ見よう見真似のもみじの手　仁清
決意してから気が楽になる会議　亜成
新年の決意家族でくい違う　茜
リストラへ妻も決意を迫られる　恵子
今年こそ登山を決意絵馬に富士　日出子
断固たる決意誰にも洩らさない　ルイ子
凛とした父の決意で屠蘇を酌む　一風
さようならなんの決意もない夫　礫
にぎやかに盛り上がります相撲吟　高栄
賑やかに騒ぐいのちの洗濯日　洋
にぎやかな男ひとりで座をつなぐ　博泉
にぎやかな見舞いが帰り熱が出る　冬葉
お隣はにぎやかうちはしんとして　あやめ
にぎやかが好きな男の通夜の席　利昭
嫁が来てにぎやかになる過疎の村　波留吉
にぎやかに八割引きで店仕舞い　忠央
にぎやかが味付をする鍋料理　弘風
にぎやかな女で恋が届かない　修
にぎやかな列だが蟻に声が無い　弘一
にぎやかがすきだったよと父の通夜　勇太朗
生前葬にぎやかににぎやかに　たもつ

川柳クラブわたの花　吉村　一風報

意図はない母の大きなにぎり飯　ますみ
哲学のぎっしりつまる学位帽　トシエ
就職へスタート台が見付からぬ　まさと
お蒸いしお待ちしてます諭吉さま　いつふみ
ロボット犬面白くって後に鬱　春江
孫の前アリバイばれて万事休す　知佐子
うつすらと紅さし八十路今日生きる　美代子
言い訳を考えながら乗る電車　民子
ぎっしりと順番まって地獄行き　明
悪妻に律儀ノムさんなさけない　八寿子
母と娘の夢たくされる孫娘　(増)道子
ひとつまみおいしく変る匙加減　宏至
図られているのに気付かない呑気　ミツ子
大勢の意見焦点まとまらず　(二)道子
図らずも軽受けあいが命とり　君江
親心ぎっしりつめて宅急便　(馬)宏
陶酔を破って過ぎる救急車　春子
解決を図るどころか酔いつぶれ　一風
陶酔の極み子猫と日向ぼこ　幸枝
ワンカップ命を燃やすホームレス　隆盛
子はラップ親は演歌に陶酔す　晴美
変り身の早さで保つ疑似夫婦　俊子
変り身が下手で世の中渡りかね　恭一
次の番俺のはずだが気がもめる　奈良司

新入社とたん仇名で人気者　友甫
本年も変らぬ愛とおせっかい　正純
心臓を明日もうごくと信じたし　一道
律義者誰に似たのか孫娘　(本)妙子

岩美川柳会　石谷美恵子報

おみくじを受けとる素手をよく洗う　大漁
裏口へ素手で合格頼めない　喬水
野次馬の足急がねば火が消える　静生
信頼の部下が弓引く音を聞く　孝男
身を守る蕾に春の雪しきり　一京
竹とんぼ柵こえる日も近かろう　一瑶
人間のスペアにいのち軽くなる　忠良
閣僚のスペアいくつも置いてある　蟹郎
素手で味しみたおにぎり素手で食う　完司
梨を捥ぐ素手で喜び味わって　重忠
柵越える気力が欲しいやせ蛙　(野)節子
うぐいすに誘われ蕎麦を食いにゆく　螢
正しきは素手で掴まにゃ泡になる　はるお
雪バラり素手に沁みこむ日の孤独　きみ子
軍手ならまだ一ダース予備がある　よしえ
急用と言っても僕は二日酔い　一夫
謹んで私のスペアは天使　和歌子
柵のない家で噂がつつ抜けだ　かつみ
しなやかに女は柵をのり越える　雅女
美しい花花花を素手でとる　多哥由
告白はスペアのキーを渡すだけ　たぬ
素手だから掴んだものがよくわかる　希久代
急ぐからかるい会釈ですれちがう　節子

本物かコピーか素手で確かめる　裕子
愛情は素手で確かめ合うが良い　圭一郎
スペアにしたいクローンが見つからぬ　公乃
ひさし打つ音はあられか寝つかれず　照子
生きるため猿も電流柵越える　菖子
お互いに見て見ぬ振りの柵の中　美恵子

いずも川柳会　佐藤治代報

対岸のホテルは時給いいらしい　(故)草丘
高層のホテルがテロの餌になる　多賀子
地球儀のどこかホテルで語る恋　紫晃
ふたありでいつか来たいなこのホテル　玲子
今日だけはみんな忘れたホテルの灯　義良
4Bの芯は太くて愛される　蘭水
ひそやかに自己主張する帯の芯　久子
幾度も芯を摘まれてものになる　ちかし
懐の芯は少うし手強いぞ　多喜
芯になる部分大きな虹になる　章峰
芯棒は動かぬO型のわたし　文子
ふる里の便りに匂う牛の声　房子
便り来ぬ友の様子を風に聞く　淞丘
一通の便りで迷い深くなる　治代
くせのある文字なつかしく読み返す　満江
恋文も忘れず持って嫁にゆく　茂美
おふくろの便り隠れて読んでいる　与根一
あれ以来逢えない人の風便り　秀子
一晩中妻とじっくり考える　竹夫
氷雨降るじっくり過去を振り返る　桂子
じっくりと妥協の線を模索する　芙佐子

じっくりと妥協の線を模索する　昭二
おだやかな声じっくりと急所刺す　寿美
じっくりと聞いて誤解を流す川　多輝子
リストラに遭ってじっくり考える　叮紅
求愛の羽根大袈裟に舞うがいい　ちえ
補助受ける被害程度をおおげさに　まこと
大袈裟に泣ける女の演技力　昌枝
大袈裟な男で男をかるくする　きみえ
おおげさな話に猫がワンとなく　れいじ

長柳会　加島由一報

不景気で繁盛してる高利貸し　たけし
梅が咲き続いて桜春爛漫　ひろし
初日の出商い繁盛皆元気　輝治
携帯がのさばりテレカ押え込む　敬二
幸せが続き悩みの笑い皺　由一
倒産店最後のセール活気づく　一慧
焼いもが繁盛してる中之島　芳野
賑やかな人一人いて盛り上がる　もこ
昨日今日続く明日に夢が無い　英美
電話魔の続きはファックスで頼む　潤子
野良猫が住みついてから店繁盛　良男
各種塾繁盛します五日制　和代
繁盛のルーツ辿ればあのえくぼ　和子
賑やかなキャンプ便りが高知から　正一
三姉妹続く夜中の長電話　俊郎
恋さがす人で繁盛チョコ売場　正美
母ちゃんのえくぼ繁盛引き寄せる　正子
満願へ祈りは続く風のみち　冨美子

長女次女続き三女も福娘　けい子
何時までも続かぬ母娘の口喧嘩　マ　サ
負けん気の遺伝子続く三世代　三和子
千客が万来のころ知る暖簾　幸　雄
繁盛の裏にマダムの名演技　てるこ
一徹が今日も客呼ぶ縄のれん　直　樹

むらくも川柳会　毛利　幸報

秋味覚老いは忘れず子に還る　幸　夫
今朝の冷え離れられない床の中　島　子
可愛い子雪と遊んでりんご顔　安　男
節分祭豆いる香り春を呼ぶ　仲　子
住みにくい日本いらいら駈けめぐる　信　夫
節分は鬼は厄日でこぶだらけ　幸
いらいらは決してしない主婦の役　明　朗
水子地蔵通る度毎手を合わす　八重子
さりげなく言った言葉が気にかかり　恵美子
会う度に白髪増えてる同窓会　ます美
亡き夫を偲んでやたら香をたく　まさ子
爪かんで在りし昔を手繰りよせ　ふさえ
人形展なつかし生活想い出し　寿
愛子さまお健やかにと願いつつ　美喜子
幸せを願ってトンドが燃え上がる　昭　子
冬ごもりしばし冬眠春を待つ　定　子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

喜寿傘寿　神のみぞ知る黄泉の道　知香子
神ありや己れ心に聞いてみる　久太郎
表彰ににこにこ手話の手が踊る　〆　女
家族集いににこにこ楽し夕餉の灯　庸　佑
ににこにこはしてるが腹は黒そうだ　寿美子
ににこにこと笑ったとこで切るシャッター　ただし
ににこにこと反対をする妻である　博　子
ににこにことしながら貸さぬ支店長　周　信
恙無くにこにこ顔で黄昏れる　つえ子
笑っても怒っていても二十四時　高　栄
知らぬ間に蹴られた案が使われる　見　清
アフガンの子等に笑顔のいつ戻る　満寿巳
裏話聞いてあっさり席を蹴る　萬　的
千年の恋やはげしく鞠を蹴る　都代子
二代目の人気が会社よどませる　慶　子
申告を初日に済ます人気者　実
幼稚園もうバレンタインの人気者　柳宏子
病みつきになりそう馬券大当り　和　子
炬燵からオーイ新聞オーイお茶　石　舟
ほめてほめてやる気にネジを巻いてやる　蛙
白黒をはっきりしたい鬼の面　重　人
冷えきった愛をレンジであたためる　諷云児
触るまで造花と分からない造花　正　坊
夕焼けが嘘もほんとも染めあげる　求　芽

倉吉川柳会　竹信　照彦報

人災で金が流れる智頭の川　一　夫
しょうも無いお顔をつなぐ寺の寄付　和歌子
三回忌ますます悲し寺の鐘　(西)喜美子
不況風椅子の下まで冷えて来る　(前)喜美子
寒水に五臓六腑がふるいたつ　康　子
左遷地の椅子に噂が先ず座る　和　枝
化粧水ぴたぴた叩き主婦終わる　和　子
倉吉の水で上等低所得　日出子
不況風お布施の数は南無枚陀　十三男
数え唄千までつなぐ義理がある　螢
つなぐ手に弾みがついて唄になる　ゆり子
水源を満たしてくれる山がある　睦　子
親不孝せめて末期の水飲ます　かつみ
寒皇の千の光とつながらん　石花菜
車椅子行きたい海の見える場所　季　芳
本堂の諸仏媚薬に似た匂い　克　枝
年賀状だけでつないだ友も逝き　泰　輔
いつまでも枯れぬ花増え位牌堂　京　子
つなぐ手の中で氷が溶けていく　芳　光
お寺にもしっかり税を掛けんかい　次　男
遺伝子がつながっている丸い鼻　よしえ
外務省お手てつないで庇いあい　重　忠
背もたれのない丸椅子がよく似合う　和　男
土砂くずれ水の流れを狂わせる　龍　枝
リハビリの母を励ます車椅子　智　子
位牌堂大売出しでやっと買う　賀寿恵
登るほど孤独な椅子が待っている　悠　子
寺と墓俺にゃ不用と言えぬ年　志郎
椅子めぐる争い人の悲しさよ　宗　光
定年でつないだ糸が切れた凧　照　彦

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

一徹の抱く火はそっと見ていよう　保　子
かがり火が走る二月の寺を染め　長　一
主役でも端役でもなく輪の中に　昭　子

二度までも主役演じた雪印　祥風
脇役につっかい棒をはずされる　久子
永田町一座主役に事欠かず　勝
節目ごと肩借りている妻主役　千里志
歳とっただけで主役にさせられる　見清
映画館はねて主役の顔で出る　実
葬式の主役写真で大舞台　契子
主役ではないが生きがいちゃんとある　螢柳
監督に怒鳴られている主役　ただし
初節句主役はミルクあればよい　まみ子
退院の今日だけちやほやしてくれる　陽子
スーパーの駅弁貰って旅気分　正安
ひとときは土地っ子になる朝の市　桂子
朝市で方言真似て土産買う　雪子
牛肉の市場に踊る欲と嘘　黒兎
淋しいな市場が消えてビルが建ち　庄三
魚野菜人のうわさも売る市場　よしろう
店閉めはったらしいシャッター下りたまま　直次
鍵忘れオートロックに家人待つ　馬洗
終章は孤独で閉じる一代記　正三郎
軒並みに閉店目立つ冬の街　柳童
銀行のシャッター下りて貸家札　禄骨
財布閉めバーゲンロード通りぬけ　信男
閉じた振り薄目で探るかくれんぼ　幹治
閉めたかな不安になって舞い戻る　賢次

うぶみ川柳会　上田　宣子報

知らん顔している婆あの得意技　登美枝
褒められてだんだん上がる熱気球　芳光
雲隠れしても夕暮れには戻る　あづま
誰の手も届かぬ位置に置くこころ　完司
テロガツン火噴き崩れた摩天楼　和
反骨はどこに置いたかお爺さん　重忠
ラップしていた得意の芸が動きだす　雄人
職安の壁にガツンと突き当たる　よしえ
冬ざれの紫陽花いくど命乞い　美ッ千
わたくしを二十世紀に置き忘れ　螢
朽ちかけた社で神も落ちつかぬ　芳江
一発のガツンで奮起した俺だ　天人
ゴミ置き場わたしの破片落ちている　和枝
児童らがガツンと受けた深い傷　くにお
置き物同士何を話しているのやら　華子
渡り鳥位置関係は決めてある　睦子
朽ちながら脳いっぱいを動かせる　ひろこ
肩組んで得意な歌もとんで出る　一枝
ガツンガツン妻がストレス響かせる　黙光
空いっぱい得意に泳ぐアドバルーン　ユリ子
結論を置いて静かに部屋を出る　宣子

くろぼこ川柳会　武田　帆雀報

寒の入り大繁盛の救急車　常子
二親のぬくい涙に救われる　一眸
悪人は神様だって救わない　あらた
子を救うためなら罪を恐れない　八千代
救われる事たのしみとして待って　清美
切れそうな薬につかまり救われる　悦子
倦怠期を救う子どもの誕生日　孝美
迷いから救ってくれた亡母の声　ふみ子
救ってやると言うなら猫の手でもよい　みち子
救われたのか風船が高く飛ぶ　遊子
絵はがきが一人旅へと誘い出す　はるみ
うれしくて言葉が出ないはがき書く　菜美
クイズ狂あたり次第はがき出す　小生
はがしたらお金払えの葉書来る　正邦
大勢の指紋をつけたはがき来る　重忠
絵はがきに新雪のこと書いておく　小鹿
選ばれたあなたにだけと来るはがき　幸子
五十円で葉書は遠い旅をする　喬水
ごぶさたの義理を果そうはがき書く　富子
有り難い年賀はがきを二度もらう　公弘
弓なりになってもあなたガードする　春名
やっと弓持っていられる程の腕　久江
暁に弓張り月を見る神秘　和代
少年の夢大空へ矢を放つ　静生
弓張りの月がこぼした露の濡れ　螢
弓を引く予感ピタリと風が止む　一瑶
深呼吸してさよならの弓を引く　美佐枝
ホウホケキョ矢のない弓を引いている　はるお
弓が手に馴染んで怖いものがない　一撲
哀愁を誘う胡弓の風の盆　帆雀

堺川柳会　河内　月子報

はがされた写真のその後思うなり　春蘭
また一つ増えた楽しみ抱いて寝る　篤子
いややなあ化粧せぬ顔ズームイン　俶子
どんな鳥今日は来るかと楽しみだ　龍三
パソコンに向って笑う三歳児　日の出

パソコンを使えなくても困らない　朋月
若返る話題楽しく盛り上がり　八千代
マウス持つ右手マジシャン連想す　舞夢
パソコンのマニュアルだけで頭痛する　忠敬
いたわりあいけなげに生きるズック靴　りつえ
いけずもし喧嘩もするがずっと好き　千代
チャット名イブで婆ちゃん若返り　つづや
窓際だ手塚治虫をたのしもう　文
パソコンがこんなに慰めてくれる　扶美代
鼻唄が出る包丁の音軽し　かりん
いつからか結婚観がずれてきた　さくら
いかがです経過お見舞ずばらしていじめより喧嘩の方がずっとまし　哲平
満開のどんな花にもあるその後　玄也
パソコンで出来たらしよう月旅行　五月
時々は一人ディナーを真似てみる　半銭
翔びすぎて其の後せっせとはりやいと　小雪
家一歩出ると楽しくなるわたし　冬虹
も一人の私になってEメール　伽羅
楽しさがこぼれそうですティースプーン　梓みつこ
Eメール軽いはなやぎ期待する　アキ
楽しい日顔も艶めき元気でる　和香
バブル以後安近短で茶を濁し　甚一
夫他界その後さばさば暮してる　さだを
政治漫画楽しむ父はまだぼけぬ　洞庵

毎月24日までに到着した分を、二ヵ月先の当欄に掲載します。

第3回大阪川柳人クラブ吟行

吟行日　5月29日（水）

行　先　和歌山・雑賀崎

行　程　9時大阪ヒルトンホテル→養翠園庭園見学→ホテル太公望（和歌浦）で昼食・川柳塔わかやま吟社有志と句会→和歌山城見学→大阪駅17時20分

宿　題　「和む」「手ぶら」「歌う」
選者未定

募集人員　45名（定員になり次第締切）

参加費　八千円

申し込み締切り日　5月10日（金）

申し込み先　坂本　晴美
06-6384-2466
川島諷云児
0726-96-2765

第13回　時の川柳交歓川柳大会

日　時　5月12日（日）10時30分開場

会　場　兵庫県民会館9Fホール
神戸市中央区下山手通4-16-3
（JR元町駅西出口・阪神電車元町駅西出口より北へ徒歩10分）

会　費　2000円（記念品・発表誌呈）
昼食は各自お済ませ下さい（地下に食堂あり）

兼　題　各題2句　締切12時
「道草」　西宮　佐野美知子　選
「痛む」　神戸　廣嶋　英子　選
「魚」　篠山　遠山　可住　選
「半分」　大阪　久保田半蔵門選
「流れ」　堺　中田たつお　選
「戦」　弓削　濱野　奇童　選
「脱」　西宮　小松原爽介　選

特別課題　1句
「頑固」　宝塚　石井　冬魚　選
特別課題の入選句には景品進呈

席　題　なし　欠席投句拝辞

講　演　「ジュニア川柳の魅力」江畑哲男

賞　知事賞・市長賞ほか多数

懇親会　5000円　同館7F「鶴の間」
当日受付（申し込み順60名）

＊当日、平成13年度・時の川柳社　作家賞ならびに第22回ときせん賞の表彰を行います

柳界展望

★川柳塔わかやまでは、平成13年度各賞を発表した。

〈葵水賞〉（○印内は順位）

①ポケットに飴玉がある調　教師　川上　大輪

②心まで干してはならぬ辞書をくる　細川　稚代

③それぞれの指一丸となる拳　三宅　保州

〈あおい賞〉

①精一杯生きよう明日が来なくとも　宮園射月芳

②もう少し喋っていたい雪ダルマ　川上　大輪

〈たちばな賞〉

①生きていてよかった少し歩こうか　土橋　螢

②変哲もないが乗りたい観覧車　三宅　保州

★第24回阪神文芸祭は、112名の応募で締切られ、門谷たず子・西口いわおさんが秀作を受賞、2月23日に表彰された。

▽表　彰△

■大阪川柳人クラブでは、2月16日ドゥスポーツプラザで総会を開き、長年にわたる大阪の川柳界発展への寄与により、大阪文化団体連合会と連名の表彰をした。

〈功労賞〉　森下　愛論

▽出　版△

■『橘高薫風川柳文集』A5判・クロス装434頁・沖積舎刊・頒価八千円

■斉藤劾百句集『花絨毯』川柳塔みちのく句集第17集　序文・波多野五楽庵・A5判38頁

★『川柳春秋』（NHK学園4月1日発行65号）に、奥田みつ子さん（副主幹・西宮市）が「一人20句」欄に発表。

▽人事往来△

■橘高薫風名誉主幹は、㈳日本川柳協会東西合同常任幹事会・総会に出席のため、2月10日東京都台東区の龍宝寺行。

▼訃　報▲

■奥山美智子さん（同人・尼崎市）2月13日肝臓癌のため逝去。享年58歳。15日ベルコで行われた葬儀には、柳友多数が参列した。

■菱田満秋氏（理事・横浜市・横浜あおば川柳会長）は、3月7日病気のため死去。74歳。10日の葬儀には薫風名誉主幹・みつ子副主幹他柳友多数が参列した。

■3月常任理事会＝4日19名出席　①900号記念大会役割分担を決定　②来年度本社句会開催時間を昼・夜各半年ずつと決定　③臨時同人総会継続審議事項に関する検討　④同人3名承認

▽常任理事会△

■4月1日㈪13時からアウィーナ大阪206号

番傘本社4月句会（女性部企画）

日時　4月9日㈫　18時　締切18時50分
会場　三井アーバンホテル　会費　千円
宿題　草―小林すみえ選・厄介―岩田明子選
内緒―大内朝子選・奏でる―長谷川てふ選・生まれる―森内惠美子選

新同人紹介

仲谷弘子
―狸村・さよ子・ダン吉推薦

岩屋美明
―薫風・たもつ推薦

浦田絞子
―公一・典子・倫子・昭子推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま	14日(日)午後1時から 四・語尾・埋める・外れる	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木)正午から 弁当・わくわく・湯 親馬鹿・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児
城北 川柳会	20日(土)　吟　行 酒・悟る・ショック・自由吟	**問い合せ先　TEL・06－6953－3225** 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子
川柳会 梨花	20日(土)　吟　行 **午前10時から**（3月号 P.84参照）	**問い合せ先　TEL・0857－23－3248** 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4—268—205 宮木方　坂田和歌子
岸和田 川柳会	21日(日)正午から 付き合う・出来事・豆腐・慰め	**五風荘　岸和田城南東横** 〒596-0827 岸和田市上松町610—85　芳地狸村
岬川柳会	21日(日)午後1時半から 正直・持て余す・異状・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	22日(月)午後1時から 締める・低い・規則・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801　田中正坊
京都 塔の会	22日(月)午後1時から 紋・いけず・免許	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	22日(月)午後7時半から 花・蛙・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪 川柳会	24日(水)午後6時から 月収・生・テスト・熱弁	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前10時から ブーム・踏む・ぼんやり・円滑	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	27日(土)午後6時から きっと・軽い・座る・友	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	28日(日)午後1時から ぶつぶつ・部下・叫ぶ 「リッチ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	28日(日)　吟　行（郡家町） 半・女々しい・ルート とっぱあ・（席題あり）	**問い合せ先　TEL・0858－85－2463** 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

4月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	4日(木)午後1時から えくぼ・肌・四季	船橋フロムワン（船橋商店街内） 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼　崎 いくしま	5日(金)午後1時から 位置・希望・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 唐津支部	5日(金)午後1時半から 護る・欠ける・途中	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13 宗 水笑
富柳会	6日(土)午後1時から 土・絡む・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉　吉 川柳会	6日(土)午後1時から 貝殻節・小説・寄せる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時から 暗号・椿・ふと・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	9日(火)午後1時から 次回・情け・すかたん	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5 田辺正三郎
尼　崎 尾　浜 川柳会	9日(火)午後1時から さくら・自由・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太
堺川柳会	11日(木)午後1時から 海藻(共選)・まさか ふたつ(折り句)	堺総合福祉会館 2F 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
川柳塔 打　吹	13日(土)午後1時から ダメージ・熟女・兵	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	13日(土)午後1時半から 出発・家族・職	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22 三島淞丘
川柳塔 みちのく	13日(土)午後4時から イメージ・迷う・内緒	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川　柳 ねやがわ	14日(日)正午から 娘・ばりばり・習慣・自由吟	寝屋川市民会館 京阪寝屋川駅東口から市民会館前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
八尾市民 川柳会	14日(日)午後1時から プライド・綴る・そっと・平気	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

編集後記

☆900号記念大会の事前投句締切りが、目前になってきた。川柳塔の大きな節目の大会、1人でも多くの方の参加をお待ちしています。☆3月号にも書いたが、午後1時からの本社句会は好評を得たため、開催時間について目下執行部で検討中である。土・日曜日の午後に会場を確保できればベストなのだが、いかんせん結婚式優先となっていて年間を通じてダメ。料金・申込み手続などの条件面で、今のところ他の会場は考えられない。全員に都合のよい日時の開催は不可能だから、最大公約数でご理解を得ることになるだろう。実施は来年からの予定である。☆編集作業の4月を例にとって言えば、1日に7月号の課題吟（一路集）の選者を依頼する。同時に6月号の秀句鑑賞・佳句地十選もお願いし、9日～15日で1回目の校正を済ませた5月号のゲラ刷りを送る。4月本社句会の原稿は5月号に掲載するため、大急ぎで清記をしてもらう。19日は5月号の最終校正。25日は本社句会を除いた6月号の原稿を下読み、割付けをし、印刷屋さんに渡す。☆この編集後記を書いているのは、冬期オリンピックが判定問題で揺れ、後味の悪さを残して終る寸前の2月下旬である。こんな風に1ヵ月の間に数ヵ月が交錯する。編集長を引継いで以来、頭の中は混乱しづめで、ふと今何月か解らなくなる。勘違いして大事な会を欠礼するなどのポカをしていないか、いつも戦々兢々としている。（ふ）

あたたかい集り

「この初めての句会で、一句でもぬけたら句会に入る。ぜんぼつならあきらめる」

そんな打ち合わせで、すすめられてうっかり句会にでた。教えられるままに自分の句を出したが、ぬけるはずがないと思っていた。が、ぬけた。約束だからと有無を言わさずの入会である。平成十一年の春だった。

句会には一種独特の雰囲気がある。わくわくさせるスリリングな場だ。一句、二句と抜けるので、欲が出てくる。結局はまってしまった。それに句会の皆さんのわけへだてないあたたかさだ。新人をこんなふうに笑顔でむかえてくれる集りが、他に有るだろうかと思い、以来、山あり谷ありだがおめずおくせず句作りに出来の悪い頭を悩ます日日である。（安達 忠央）

○最近出合った本から、インタビューから、ちょっといい言葉。―「生きていくということは／誰かに借りをつくること／生きていくということはその借りを返していくこと」（永六輔）私達は自分一人でこの世にいきているとはおそらく誰も思っていないだろう。誰かのお世話をしてお返しをし、その誰かがまた借りをつくって生きていく。―

勝手に引用させていただいたが、これは本誌誌友の藤井則彦氏の著者『いきいきビジネス・ライフ（脱・会社漬け人間のすすめ）』の中の一節である。他にビジネスマンでない人達にも通じる社会とのつき合い方、時代に合った生き方を、数々の名言で示唆してくれている。

○ソルトレークにて、フイギュアの村主章枝さん（五位入賞）「悲しかったことも苦しかったことも含めてスケートを愛しています。」

○女優野際陽子さん「今は緩やかな丘の頂上にいるような気がします。ゆっくりゆっくりこの坂を下りていくつもりです。」

このお二人とは住んでいる世界が全く違うにも拘らず、何故か私の今の心境にも当てはまる言葉を語ってくれている。（希）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**6月号**）　地名　　姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

本社4月句会

とき　4月8日（月）午後5時半・6時半締切
ところ　アウィーナ大阪　4階
天王寺区石ケ辻町19－12　電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
兼題「メール」　坊農柳弘選
「桜」　池森子選
「どんどん」　高須賀金太選
「公園」　前たもつ選
「刻む」　河内天笑選
席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円

5月本社句会は5月4日900号記念大会として開催します（表紙裏をご参照下さい）

作品募集

6月号発表（4月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　板尾岳人選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　宮西弥生選
課題吟（3句）
「譲る」　福原悦子選
「欠ける」　八田敏選
「途中」　徳山みつこ選
初歩教室「増える」（3句）　吐田公一担当

7月号
課題吟「池」「スクリーン」「ちょっと」
初歩教室「テーブル」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第11回「市」　春城年代選
ハガキに3句　4月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇二年（平成十四年）四月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六六一―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可

第26回 全日本川柳2002年沖縄大会

日　時　平成14年6月9日(日)　午前10時開場

会　場　平和祈念堂
〒九〇一―〇三三三　沖縄県糸満市摩文仁四四八―二
TEL〇九八（九九七）一三〇一

交通機関　那覇市からバス、タクシーで三十分
当日は那覇市から会場まで往復専用バス運行

宿　題　第一部（事前投句、四月十五日締切）
「王」　塩見　草映　選　「塔」　斎藤　大雄　選
「南」　吹田　朝児　選　「丘」　太田紀伊子　選
沖縄祖国復帰三十周年記念特別宿題　「三十」　仲川たけし　選
2.7×18㎝の句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒に住所・氏名明記、投句料一、〇〇〇円（定額小為替・現金書留）同封して左記宛郵送のこと。

投句先　〒五三〇―〇〇四一　大阪市北区天神橋二丁目北一―一一　ステップイン南森町七〇二
㈳全日本川柳協会　宛
TEL〇六（六三五二）二二一〇　FAX〇六（六三五二）二四三三
郵便振替口座　〇〇九七〇―九―三五七五

宿　題　第二部（当日投句、十一時二十分締切）
「泳ぐ」　橋本　比呂　選　「祈る」　大木　俊秀　選
「味覚」　住田英比古　選
各題二句当日配布の句箋に記入

第二次選者　吉岡　龍城・今川　乱魚・磯野いさむ
橋高　薫風・藤沢　岳豊

会　費　四、〇〇〇円（昼食、記念品含む）

表　彰　(1)文部科学大臣奨励賞　(2)参議院議長賞　(3)川柳大賞
(4)大会賞　①知事賞　②那覇市長賞　③糸満市長賞
④沖縄平和祈念堂賞　⑤㈳全日本川柳協会賞

＊
㈳全日本川柳協会大会委員長　磯野いさむ
全日本川柳沖縄大会実行委員長　国吉司図子
TEL〇九八（八九二）二〇一〇
FAX〇九八（八九二）二一八五

前夜祭・宿泊・観光ご案内

前夜祭　平成十四年六月八日(土)　午後六時～

会　場　沖縄ハーバービューホテル（彩海の間）
〒九〇〇―六〇二一　那覇市泉崎二―四六　TEL〇九八（八五三）二一一一

会　費　八、〇〇〇円（会食・アトラクション）

宿　泊　(1)Aタイプ　六、〇〇〇～八、〇〇〇円
ホテルチュラ琉球　ホテルサン沖縄　ホテル山ノ内
ホテルサンバレス　アネックスエッカホテル
(2)Bタイプ　八、五〇〇～九、五〇〇円
オーガストイン久茂地
(3)Cタイプ　九、五〇〇～一〇、〇〇〇円
沖縄ハーバービューホテル
宿泊料金（三名一室、二名一室）一泊朝食付・税金・サービス料込み。
先着順でお引き受けいたしますが、宿泊希望者が多い場合は上記ホテル以外になる場合もあります。また、一名一室希望の方はその旨記入して下さい。

観　光　(1)コース　那覇市内観光　三、五〇〇円
平成十四年六月八日(土)　14：00～
(2)コース　南部戦跡&琉球王国村　五、九〇〇円
平成十四年六月十日(月)　9：00～
(3)コース　中北部コース　六、九〇〇円
平成十四年六月十日(月)　9：00～
(4)コース　那覇市内観光　三、五〇〇円
平成十四年六月十日(月)　9：00～
(5)コース　離島コース　平成十四年六月十日(月)発
最少随行人数三〇名とし、それ以下の場合は料金変更があります。
上記の前夜祭、宿泊、観光の申し込み締切は四月十五日必着です。
別紙申込書に内容記入の上、合計金額を郵便振替口座へご入金下さい。

申込先（お問い合わせ先）
〒九〇一―二二一三　沖縄県宜野湾市志真志四―二四―三　當山　稔方
日川協沖縄大会事務局　宛　TEL・FAX〇九八（八九七）一六五二

送金先　郵便振替口座番号一七〇一〇―一一―三三一八七四
日川協沖縄大会事務局　宛

雑誌　05703―4